

は じ め に

平素は、なんと農業協同組合をご利用、お引き立て頂き厚く御礼を申し上げます。

昨年は、1月1日にM7.6の能登半島沖地震が発生、また、9月には能登半島豪雨が発生し、震災の復興に力を合わせて取り組んでいた時に、心が折れてしまうような2重の被害を及ぼしました。一方、海外に目を移しますと、韓国の現政権による非常戒厳令の発動、シリアのアサド政権の崩壊、イスラエルとパレスチナとの対立、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の長期化など、対立・紛争が数多く発生する事態となっています。

本年の富山県における主食用米生産目標数量は、需要の増加におされ民間在庫の減少による予測から昨年比1.9%増の数量に設定されました。当JAでは、酒の需要が堅調に推移していることから、酒造好適米について数量を増やすこととしました。

さて、昨年のお米につきましては、登熟期に高温の期間もありましたが7月下旬～8月の降雨と平年よりやや多い日照時間を確保でき登熟が全体的によくなり、乳白粒や不稔粒の発生があまり見られませんでした。全体として、品質は良かったのですが、収量は前年をやや下回る結果となりました。今後とも、品質はもとより収量も確保できるよう栽培技術の向上に努めてまいります。

転作におきましては、大麦が前年に引き続き苗立ちや初期生育が良好で穂数を多く確保できましたが、くず麦が多く収量は平年並みとなりました。一方、大豆は、出芽・苗立ちとも良好でしたが、雨の影響で培土が1回のみの圃場もありました。開花期頃に数日おきの降雨により莢付きは良かったのですが、高温の影響で小粒傾向が見られ、収量は平年より少なくなりました。また、「にんにく」につきましては、前年に続き大玉傾向で品質が良く反収が増加しました。「青ネギ」では生育、収穫量とも良く昨年より増加し販売先からも高評価をうけています。これからも、干柿・赤カブ・みょうが・かぼちゃ・白ねぎ・にんにく・青ネギの育成、新製品の開発、販路の拡大に努めてまいります。

本年も、当地域の農業・特産物生産に、営農組織をはじめ皆様と指導機関が連携して取り組んでまいります。

この「営農のてびき」は、それぞれの作物の栽培基準を示したものです。是非、参考にしていただければ幸いです。

今後とも、地域農業振興にご協力いただきますことをお願い申し上げます。

なんと農業協同組合

目次

稲・大豆・大麦編

1. 売れる「なんと美味しい米づくり」の基本方針	4
2. 令和6年産水稻の概要・令和7年産水稻の重点技術対策	6
3. 健苗の育成	14
4. 豊かな土づくり	22
5. 直播栽培	24
6. 肥料の施肥設計	25
7. 水稻本田雑草防除対策	28
近年多発する水田雑草への対応策	35
8. 畦畔除草剤	36
9. 水稻病虫害防除基準	38
水稻の主要病虫害	41
10. 城端・井口地区の品種別栽培基準	
(1) 五百万石【JA米生産基準】	42
(2) 雄山錦【JA米生産基準】	44
(3) 山田錦【JA米生産基準】	46
(4) 直播栽培山田錦【JA米生産基準】	48
(5) コシヒカリ【JA米生産基準】	50
(6) 直播栽培コシヒカリ【JA米生産基準】	52
(7) 特別栽培米（減農薬、減化学肥料）コシヒカリ【JA米生産基準】	54
(8) 直播特別栽培米（減農薬、減化学肥料）コシヒカリ【JA米生産基準】	56
(9) てんこもり【JA米生産基準】	58
(10) 直播栽培てんこもり【JA米生産基準】	60
(11) 新大正糯【JA米生産基準】	62
11. 平・上平地区の品種別栽培基準	
(1) てんたかく【JA米生産基準】	64
(2) コシヒカリ【JA米生産基準】	66
12. 農作物の鳥獣被害防止対策	68
13. 大豆栽培のかなめ	
(1) 令和6年産大豆の生育概況	70
(2) 病虫害の発生状況と対策	70
(3) 令和7年産大豆の重点技術対策	71
大豆（えんれいのそら）の栽培基準	72
豆の被害とその原因の見分け方	74
大豆の主要病虫害と防除	75
14. 大麦栽培のかなめ	76
大麦（ファイバースノウ）の栽培基準	78
15. 地力増進作物	80

園芸編

柿の栽培指針	82
果樹栽培の注意点	88
にんにくの栽培ごよみ	90
青ねぎの栽培ごよみ	92
大麦・にんにく跡 青ねぎの栽培ごよみ	94

白ねぎ(チェーンポット栽培)の栽培ごよみ	96
かぼちゃの栽培ごよみ	98
みょうがの栽培ごよみ	100
赤かぶの栽培ごよみ	102
馬鈴薯の栽培ごよみ	104
さつまいもの栽培ごよみ	106
さといもの栽培ごよみ	108
黒大豆栽培(枝豆)ごよみ(品種 丹波黒)	110
そばの栽培ごよみ	112
主な園芸農薬と使用方法(殺虫剤・殺菌剤)	114

○もっと安全・安心に、これまで以上に農薬散布に気をつけましょう	116
---------------------------------	-----

農薬希釈早見表・農薬は正しく使って安全に	120
----------------------	-----

農業共済編

N O S A I 事業の種類とあらまし	121
建物共済	123
収入保険	124

資 料 編

○農業所得の申告について	126
1. 令和6年産 米地区別検査結果	130
2. 令和6年産 大麦地区別収量及び検査結果	131
3. 令和6年産 大豆地区別収量及び検査結果	132
4. 出荷契約米農家生産者手取り価格表	133

栽培記録簿 (記入例) 160

肥料成分表	134
広告	135
農事カレンダー	148
令和7年産 米栽培記録簿	161
令和7年産 直播栽培記録簿	167
安全・安心な富山米生産のための確認シート	173
令和7年産 大麦栽培記録簿	175
安全・安心な富山県産大麦生産のための確認シート	177
令和7年産 大豆栽培記録簿	179
安全・安心な富山県産大豆生産のための確認シート	181
令和7年度 水稻肥料・春土壌改良資材注文書	184
令和7年度 水稻農薬注文書	186
	188
令和7年度 非農耕地用除草剤注文書	190
令和7年度 春期畑肥料注文書	192
令和7年度用 種子・箱苗予約注文書	194
令和7年度用 直播資材予約注文書	196
令和7年度用 育苗農薬・床土資材予約注文書	198
令和7年度 春耕機用燃料の予約申込みについて	200

1. 「なんと美味しい米づくり」の基本方針

富山県の令和6年産米の作柄は、作況指数99の「やや不良」、富山県産米の1等比率は89.4%（11月末現在）の結果となりました。

なんと管内における6年産米の生育は田植後の強風による植傷みや深水管理により初期分けつは少なかったものの、6月中旬以降の高温・多照により茎数は急激に増加しました。しかし、梅雨入りが平年に比べ11日も遅く、乾かしすぎのほ場を中心に茎数の淘汰が進み、穂数は例年に比べやや少なくなりました。また、葉色は、生育期間を通じてやや淡く推移し収量があまり伸びませんでした。品質のほうは成熟期の降雨が平年並みにあったことにより昨年に散見された乳白粒・背白粒等の白未熟粒はあまり見られず大変きれいな米になりました。1等米比率は99.0%（R5：96.3%）と昨年を上回り素晴らしい結果となりました。

米をめぐる情勢は、昨年の全国的な品質の低下と作況の影響で米が不足となり米価が非常に高くなりました。気象等の不安もありますが、令和7年産米については、今一度、丁寧な栽培管理で収量増を目指し、ほぼ産地指定である全品種を消費者・実需者からの要望に高品質・良食味・高収量の米づくりで応えていくことを目指し、上位等級比率100%を目標に「なんと美味しい米づくり」を推進してまいります。

令和7年産米の具体的取組

（1）品質の均一化と収量増

1. 品質でバラツキの少ない均一な米出荷のために、カントリー施設の全面利用を推進し上位等級比率100%を目指します。
2. 丁寧な栽培管理による収量の増加。

（2）需要に応じた米生産の実施

1. 酒造好適米は蔵元と緊密に連絡を取りながら産地維持を図ります。
2. 実需者・卸・生活協同組合等への直売・産地指定米比率100%を目指し販売体制を強化します。

（3）安全確保と栽培管理の徹底

1. 生産履歴・適正農業管理（GAP）記帳の徹底
2. HACCP対応の強化と衛生管理の徹底
3. カドミウム吸収抑制対策の徹底（出穂後20日間の湛水管理）

農作業安全

毎年、身近なところで農作業事故が発生しています。自己及び他人に危害が生じないよう、日頃から安全意識をもって、周辺の環境にも配慮し、道路交通法等の関係法令を遵守、安全な農作業を行って下さい。

1 基本的な農作業の心構え

- ① 農作業安全に関する研修・講習会等へ積極的に参加するとともに、機械の使用に当たっては取扱説明書をよく読み、操作方法をよく理解しておきましょう。
- ② 疲れた時に事故が多く発生しています。熱中症防止のためにも計画的に休憩を設け、複数人での作業を心がけましょう。体調が悪い、飲酒後や酒気を帯びている人は作業を絶対に行わないで下さい。
- ③ 修理・調整時は必ずエンジンを停止し、完全に止まったことを確認してから行って下さい。
- ④ 事故への備えとして労災保険等に参加し、必要に応じて傷害保険・自賠責保険へ加入しましょう。

2 刈払機での注意事項

- ① 防護めがね等の防護具を必ず付けて作業しましょう。
- ② 足元を確保して体勢を整えてから作業に入りましょう。
- ③ 小石等の飛散があります。作業場所にむやみに近寄らず、作業者は周辺へ配慮しましょう。



3 歩行型トラクターの注意事項

- ① 狭い所で後進（バック）操作は行わないようにしましょう。
- ② 周囲の状況を把握した上で操作しましょう。



4 乗用型トラクターの注意事項

- ① 安全フレームを装着したトラクターを使用しましょう。
- ② ほ場以外では必ず左右ブレーキを連結しましょう。
- ③ 修理・調整時は必ずエンジンを停止し、駐車ブレーキと油圧ロックをかけましょう。
- ④ シートベルトを装着しましょう。

5 コンバインの注意事項

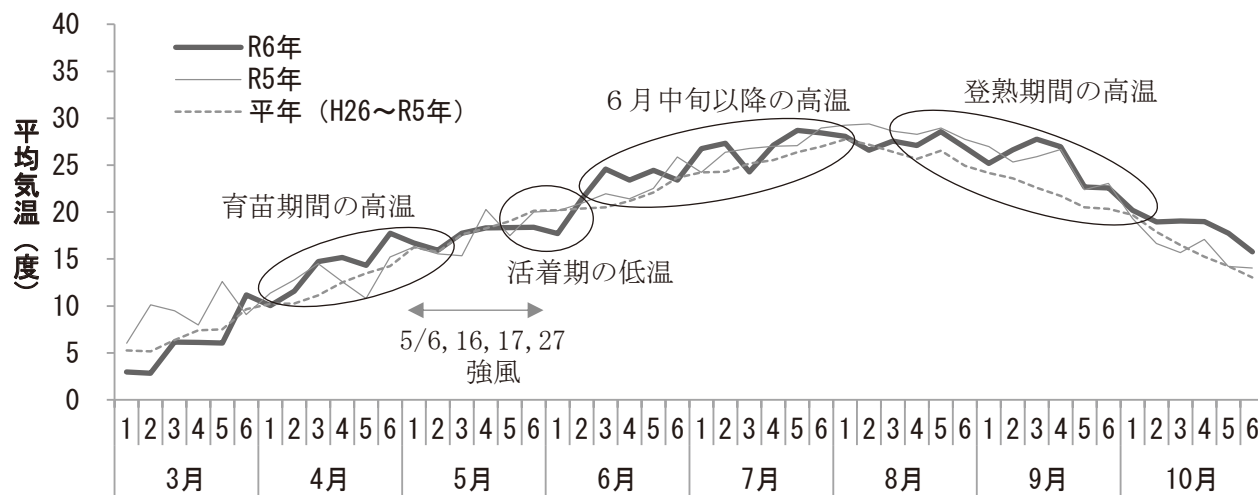
- ① 後進（バック）操作は必ず後方を再確認して、補助者がいる場合は特に位置を確認してから操作しましょう。
- ② 手扱き作業は、作業服の袖口を止め、軍手は使用しないで、慌てず慎重に作業しましょう。
- ③ ほ場への出入りはゆっくりと行いましょう。



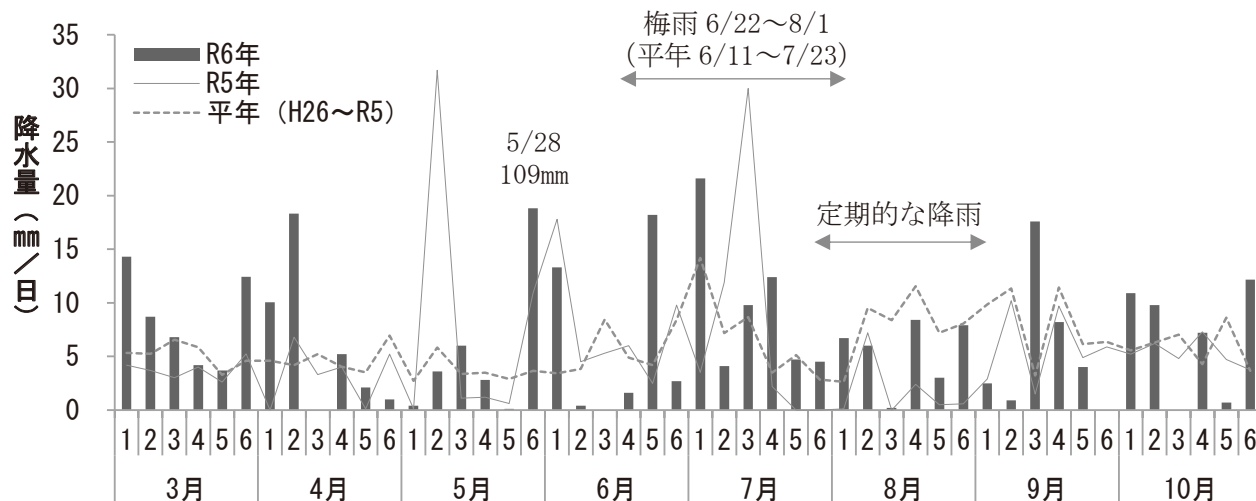
2. 令和6年産水稻の概要

(1) 令和6年産水稻の生育期間の気象経過 (南砺市高宮)

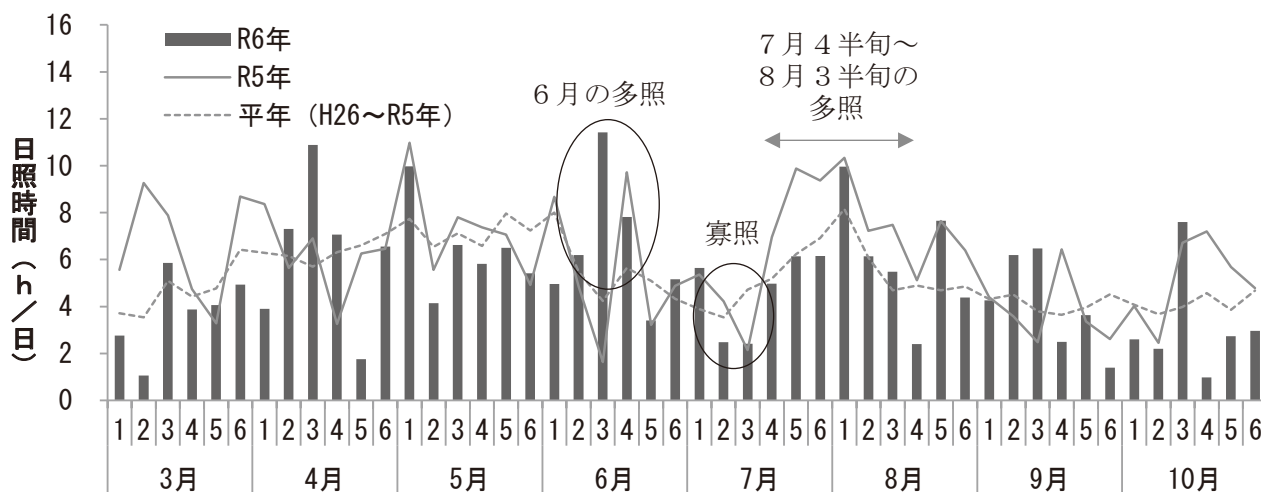
1 平均気温



2 降水量



3 日照時間



(2) 未熟粒及び被害粒の発生要因

整粒、未熟粒及び被害粒

	整粒	基白粒	背白粒	乳白粒	心白粒
					
気象要因	—	登熟初期の高温	登熟初中期の高温	登熟中期の高温など	登熟初期の高温
栽培的要因	—	栄養凋落	栄養凋落	籾数過多や倒伏	籾数過多や倒伏
特徴	未熟粒、胴割米などを除いたもの	基部が白濁した粒	背側が白濁した粒	大部分が白濁した粒	中心部が白濁した粒

山田錦と新大正糯で発生

	腹白粒	青未熟粒	奇形粒	茶米	発芽粒
					
気象要因	—	登熟期間の寡照	開花期の高温・強風	登熟期間の高温 出穂期前後の強風・雨	登熟後期の降雨
栽培的要因	登熟後半の倒伏	籾数過多や倒伏	籾数過多	稲体活力の低下など	倒伏
特徴	腹側が白濁した粒	粒表面が緑色の粒	粒のねじれなど 不整形な粒	粒表面が茶褐色の粒	発芽または発根している粒

	胴割粒	斑点米
		
気象要因	登熟初期の高温・多照	—
栽培的要因	登熟期の水管理不足、刈遅れ、過乾燥	畦畔等の雑草管理や防除の不徹底によるカメムシ発生

一部で多発

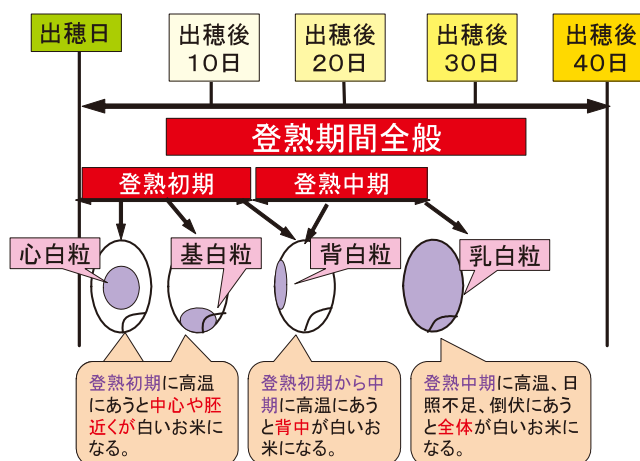


図 登熟期間の気象条件と白未熟粒の発生過程

白未熟粒とは

葉で生産されたデンプンが玄米に十分詰まらなかった部分に空気の間隙ができ、その部分が光の乱反射により白く見える。

栽培面での発生要因と対策

背白粒・基白粒

要因：登熟期間の栄養凋落
(葉色が薄い、極端な葉色の低下)

対策：葉色が薄い場合は出穂前に追肥し、穂揃期の葉色を確保
出穂後20日間の湛水管理の徹底

乳白粒・心白粒

要因：穂数や1穂籾数の過多
⇒デンプンの奪い合い

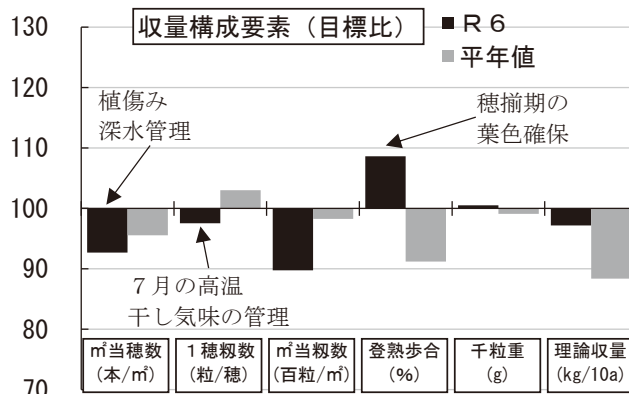
対策：適正な穂数・籾数の確保
倒伏させない稲づくり
⇒施肥量の遵守、適正な田植え
中干しの徹底

(3) 令和6年産JAなんとと水稻品種・栽培様式別概要

(データはなんと担い手組織協議会調査ほ)

五百万石

- 管内の平均単収は 407kg/10a と 平年(440kg/10a) より少なく、年々低下傾向となっている。
- 5月の強風による植傷みと深水管理により初期生育が遅れ、穂数が減少し、7月上旬の高温と干し気味の管理により1穂粒数が減少した。
- 登熟期間は高温で推移したが、穂揃期に目標の葉色を確保し、数日おきに降雨があったことで、登熟歩合は向上した。



山田錦 (移植と直播含む)

- 管内の平均単収は 376kg/10a と 平年(383kg/10a) 並みで、一部、発芽粒で格下げがあった。
- ほ場ごとの出穂期や水管理により、登熟状況は大きく異なった。田植えが遅く、出穂が遅かったほ場は登熟期間の日照時間が短く、干し気味だったほ場は稲体活力を消耗し、それぞれ登熟歩合が低下した。

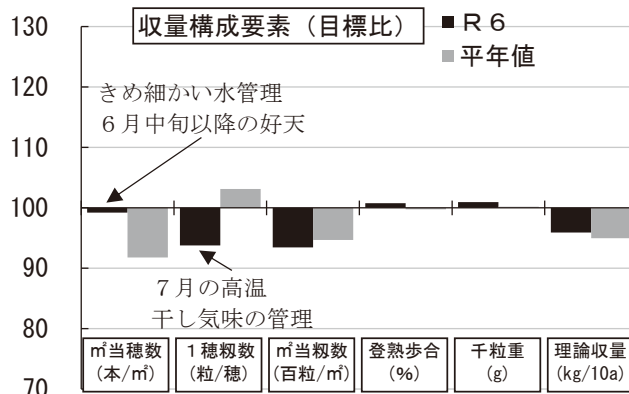
表 山田錦のほ場ごとの登熟歩合と登熟不良/向上の要因 (出穂期順)

ほ場	栽培様式	出穂期	合計日照時間(h)		2.0mm登熟歩合(%)		2.0mm精玄米重(kg/10a)		登熟不良または向上の要因
			R6	平年	R6	目標	R6	平年	
A	移植	8/12	201	185	↓ 67.4	75	520	488	過剰着粒+登熟期間の入水不足→登熟不良
B	カルバー	8/18	196	173	85.8	67	541	439	おおむね適切な水・肥培管理→登熟向上
C	鉄コ	8/19	191	169	↓ 56.7	67	↓ 430	427	出穂前と登熟期間の入水不足→登熟不良
D	移植	8/20	186	158	90.2	75	↓ 391	488	干し気味の水管理→穂数不足→登熟は向上(収量は少ない)
E	移植	8/28	142	155	↓ 73.9	75	↓ 430	488	田植日遅い→出穂遅い→過剰着粒+日照不足→登熟不良

※ほ場Aの調査区が倒伏していたため、ほ場Aの登熟歩合は同一ほ場の倒伏していない株の数値

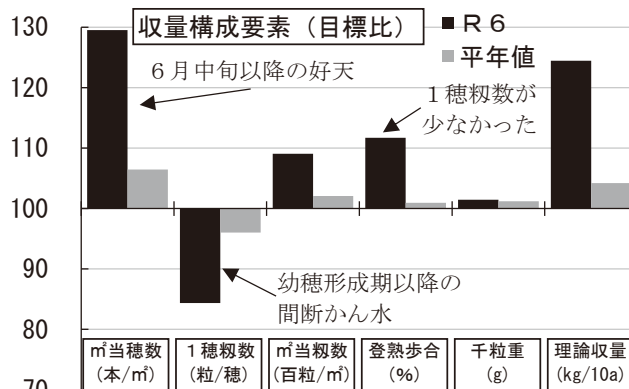
コシヒカリ (一般と特裁含む移植)

- 管内の特別栽培米コシヒカリの平均単収は 450kg/10a と 平年(439kg/10a) よりやや多くなったが、480kg/10aに満たない。
- 田植え後のきめ細かい水管理と、6月中旬以降の好天により茎数及び穂数が増加した。
- 7月の高温と干し気味の水管理(降雨の予報が多く、落水しているほ場が多かった)により稲体活力を消耗し、1穂粒数が減少した。



直播コシヒカリ (鉄コーティング直播)

- 坪刈単収は 525kg/10a と 平年(500kg/10a) より多くなった。
- 6月中旬以降の好天により、茎数が急増し、穂数が多くなった。幼穂形成期以降に間断かん水を実施したほ場で、1穂粒数が減少した。
- 幼穂形成期以降の生育量(草丈、茎数、葉色)が大きくなったほ場では、過剰着粒、節間の過剰伸長及び8月下旬の強雨により倒伏した。



(4) 令和7年産JAなんとと水稻品種・栽培様式別重点対策

(データはなんと担い手組織協議会調査ほ)

五百万石

- ・ 浸種初日の水温確保 (目安 12.5℃) ⇨ 出芽揃い向上
- ・ 育苗日数の短縮 (21 日) + 換気の徹底 ⇨ 老化・徒長苗防止
- ・ 栽植密度 80 株/坪以上の徹底 (図) ⇨ 穂数確保
- ・ 活着後の浅水管理の徹底 ⇨ 初期分げつの確保
- ・ 田植え 4 週間後頃からの中干し ⇨ 梅雨前に一定程度の地固め
- ・ (カメムシが多い場合) 3 回目の追加カメムシ防除 ⇨ 収量・品質向上
- ・ 出穂 1 週間前の葉色診断 + 追加穂肥 ⇨ 登熟向上
- ・ 出穂後 20 日間の湛水管理とその後の間断かん水 ⇨ 登熟向上

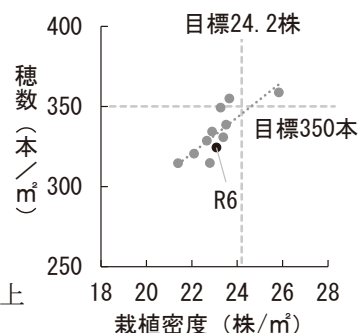


図 五百万石の栽植密度と穂数 (H26～R6)

山田錦

(移植と直播含む)

- ・ 育苗日数の短縮 (19 日) + 換気の徹底 ⇨ 老化・徒長苗防止
- ・ 5 月上旬植えの徹底 (図) ⇨ 出穂を早めて生育量・日照時間確保
- ・ 活着後の浅水管理の徹底 ⇨ 初期分げつの確保
- ・ 田植え 4 週間後頃からの中干し ⇨ 梅雨前に一定程度の地固め
- ・ 幼穂形成期頃の生育量に応じた水管理と穂肥施用 ⇨ 適正な生育量
※水が無いと肥料成分を吸収できない。
- ・ 適期 (穂揃期とその 1 週間後) の基本防除 ⇨ 収量・品質向上
- ・ 出穂後 20 日間の湛水管理とその後の間断かん水 ⇨ 登熟向上

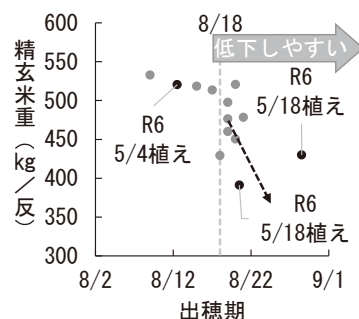


図 山田錦 (移植) の出穂期と精玄米重 (2.0mm) (H26～R6)

コシヒカリ

(一般と特栽含む移植)

- ・ 育苗日数の短縮 (19 日) + 換気の徹底 ⇨ 老化・徒長苗防止
- ・ 活着後の浅水管理の徹底 ⇨ 初期分げつ確保
- ・ 田植え 4 週間後頃からの中干し ⇨ 梅雨前に一定程度の地固め
- ・ 幼穂形成期頃の生育量に応じた水管理と穂肥施用 ⇨ 粒数確保
※水が無いと肥料成分を吸収できない (写真)。
- ・ 適期 (穂揃期とその 1 週間後) の基本防除 ⇨ 収量・品質向上
※特栽は穂揃期～傾穂期に 1 回のみ (穂揃期前に防除しない)
- ・ 出穂後 20 日間の湛水管理とその後の間断かん水 ⇨ 登熟向上



写真 幼穂形成期から穂ばらみ期の期間に落水しているほ場 (山手)

直播コシヒカリ

(鉄コーティング直播)

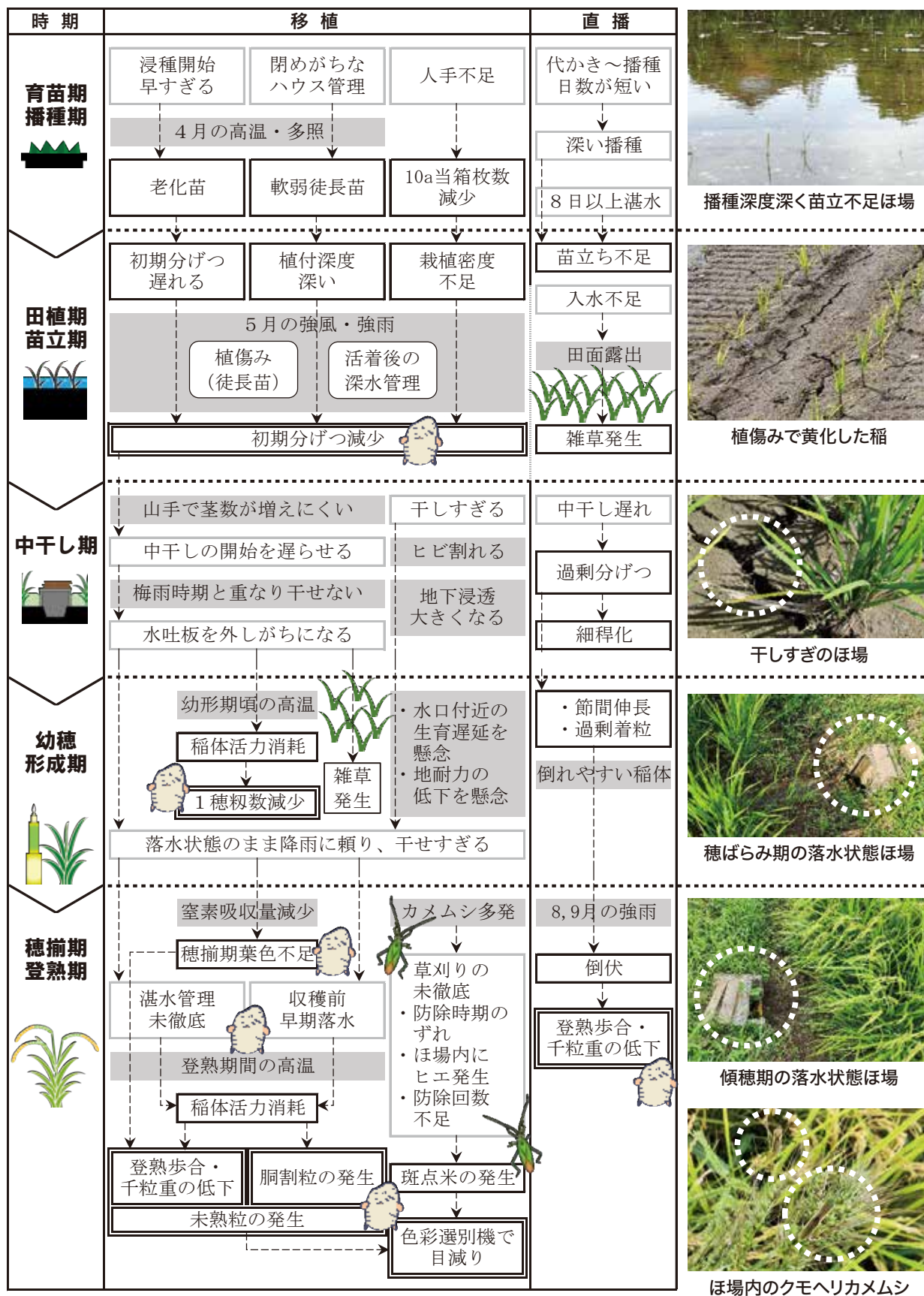
- ・ 代かき～播種までの適正な日数 ⇨ 適正な播種深度 (0 cm)
- ・ 播種後 8 日以降の飽水管理の徹底 ⇨ 苗立ち促進
- ・ 適期の中干し (茎数 80 本/m 程度) ⇨ 過剰分げつ防止
- ・ 幼穂形成期頃の生育量に応じた水管理 ⇨ 適正な生育量
適正な生育量: 飽水管理 ⇨ 過剰生育: 間断かん水
- ・ 適期 (穂揃期とその 1 週間後) の基本防除 ⇨ 収量・品質向上
※特栽は穂揃期～傾穂期に 1 回のみ (穂揃期前に防除しない)
- ・ 出穂後 20 日間の湛水管理とその後の間断かん水 ⇨ 登熟向上



写真 生育過剰で 8 月下旬頃から倒伏し始めたほ場

(5) 令和6年産水稻の単収低下フロー

□□ 低収の原因と要因 □ 人為的要因 ■ 自然的要因等



(6) 令和7年産水稻3大重点対策

重点対策① 目標栽植密度の確保

- ・標高が高いほ場では、85 株植えても 284 本/㎡と目標よりかなり少なくなった（表 1）。
- ・なんと管内は、初期分げつが増えにくい地域であるため、品種ごとの目標栽植密度以上に苗箱枚数を用意する（表 2）。

表 2 品種ごとの目標栽植密度

	五百万石・雄山錦	山田錦	その他
目標栽植密度	80 株/坪以上	60 株/坪	70 株/坪

- ・標高差がある場合は、標高の高いほ場は低いほ場よりも栽植密度を高め、初期分げつを確保する。

→「富山あぐりマッチボックス」の利用、苗箱運搬用機械の導入等の検討を

コシヒカリが「苗半作」なら
五百万石・雄山錦は「苗 7 分作」

表 1 標高が高いほ場の穂数 (R6, 五百万石)

標高 (m)	栽植密度 (株/㎡)	穂数 (本/㎡)
250	25.8	284
目標→	24.2	350

85 株/坪
85 株植えても
目標は 80 株/坪 目標穂数より
かなり少ない

標高が高いほ場は
低いほ場よりも
栽植密度を高める



図 1 標高差がある場合の栽植密度の区分け例（五百万石、雄山錦）

重点対策② 健苗育成

- ・令和 6 年産種子も高温登熟となったため、浸種は十分（もみ殻が透明になり、胚が透けて見える）に行う。
- ・特に、浸種初日は水温 10～15℃（目安 12.5℃）を確実に確保し、催芽揃いを安定させる。
- ・播種～田植えの日数は、五百万石・雄山錦は 21 日、その他は 19 日となるように計画を立てる（表 3）。
- ・ハウス内の温度は 25℃以下になるように換気を徹底する。

→育苗ハウス温度管理システムの導入等の検討を（「南砺市ブラッシュアップ農業導入促進重点事業補助金」の対象）

表 3 品種ごとの育苗スケジュールの目安

品種	浸種開始	播種	田植え	浸種日数	浸種積算温度	育苗日数
五百万石 雄山錦	3 月 29 日	4 月 14 日	5 月 5 日	13～15 日	130℃以上	21 日
山田錦 新大正糯	4 月 7 日	4 月 21 日	5 月 10 日	10 日	100℃以上	19 日
コシヒカリ	4 月 13 日	4 月 26 日	5 月 15 日	11 日	110℃以上	
富富富	4 月 12 日				120℃以上	
てんこもり	4 月 12 日			12 日		

重点対策③ 適期・適度の中干しと中干し後の水管理



(7) 令和7年産水稻の重点技術対策(移植) ～穂数確保で収量・品質向上～

(1) 土づくりの実施 基肥の適正な施用

〔稲体の健全化
収量・品質の安定〕

- ・作土深 15 cm 以上の確保
- ・珪酸質資材等の継続的な投入 (100kg/10 a)
- ・堆肥等の有機物の施用 (施用量 2 m³/10 a)
- ・基準基肥量の厳守

(2) 健苗育成の徹底

〔初期分げつの確保〕

- ・浸種初日の水温を確保し、出芽揃いの安定化 (目安 12.5℃)
 - ・田植時期に合わせた育苗計画と換気の徹底
- | | | |
|-----|----------|------------------|
| 播種日 | 五百万石・雄山錦 | 4月14日 (5月5日田植え) |
| | コシヒカリ | 4月21日 (5月10日田植え) |

(3) 適正な田植作業の実施

〔初期分げつの確保〕

コシヒカリが「苗半作」なら
五百万石・雄山錦は「苗7分作」

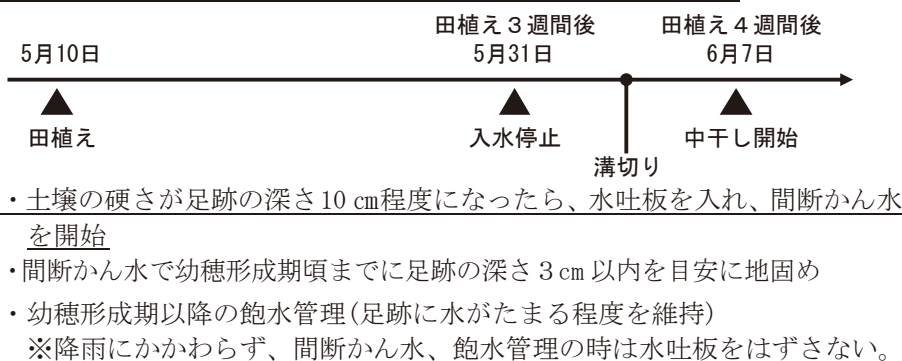
- ・収量・品質確保に向けた品種ごとの田植時期の励行
- | | |
|-------|-------------------------------|
| コシヒカリ | 5月10～20日頃 (収量が確保できない地域: 5/10) |
| 山田錦 | 5月10日頃 |
- ・適正な田植作業で初期分げつの確保

植付株数	五百万石・雄山錦	80株/坪以上
	コシヒカリ	70株/坪以上
植付深さ	3 cm 程度	植付本数 3～4本

(4) 適切な水管理と 適期中干しの実施

〔初期分げつの確保
茎の充実
根の伸長
地耐力の確保〕

- ・活着後の浅水管理 (水深 3 cm 程度) の徹底
- ・暖かい日が続く場合は、軽い田干しや水の入れ替えにより、藻の発生やワキを防止 (根の健全化)
- ・田植え 25 日後頃に溝切りを実施し、そのまま中干しを開始



(5) 病害虫防除の徹底 (被害粒の発生防止)

- ・いもち病防除の徹底 (品種に応じた適期の本田防除)
- ・カメムシ類による斑点米の発生防止
- (畦畔の適切な管理、適期防除の徹底、麦あとほ場の有効利用・雑草管理)
- ・幼穂形成期頃の紋枯病の診断と随時防除 (特別栽培米コシヒカリ)
- ・褐変粳、茶米及び稲こうじ病の発生防止
- 畦畔雑草の適切な管理、水管理の徹底等による稲体の健全化
- 本田防除の徹底 (山田錦)

(6) 的確な穂肥施用

〔過剰籾数の防止
倒伏防止
稲体活力の維持〕

- ・土壌条件と生育・気象状況に応じた穂肥の施用
- ・品種に応じた穂揃期葉色への誘導
- ※肥効調節型基肥でも出穂 7～10 日前に葉色が淡い場合は出穂直前までに追肥 3 号で 7～10kg/10a 追肥

(7) 登熟期間の適切な 水管理の実施

〔稲体活力の維持、登熟向上
カドミウムの吸収抑制
胴割粒の防止〕

- ・出穂期から 20 日間は水を切らず、水深 2～3 cm の湛水状態を保つ
- ※出穂後 10 日間の最高気温が 30℃ 以上で、日射過多の日が続いた場合、胴割米の発生につながる。
- ・出穂後 20 日から刈取り 5～7 日前までの間断かん水
- ※特に、フェーンが予想される場合は事前に入水

(8) 適期刈取り

(青米・胴割米の防止)

- ・籾黄化率 85～90% での適期刈取り (高温時は 80～85%)
- ※早生は特に注意し、成熟期にフェーンが予想される場合は早めに収穫。

(9) 秋耕し

- ・稲刈り後、早い時期の秋耕しにより稲わらの腐熟を促進

(8) 令和7年産水稻の重点技術対策(直播) ～穂数確保で収量・品質向上～

(1)、(6)、(7)、(8)、(9)は移植と同様

(2) 適正な播種

〔苗立ちの確保〕

播種日 コシヒカリ 4月30日～5月10日
てんこもり 4月25日～5月10日
山田錦 4月25日～5月4日

・作業時に種子と肥料が均等に落下しているか確認

＜湛水土中直播(カルパ[®]-コーティング)＞

＜湛水表面直播(鉄コーティング、ぺんがら)＞

播種量(乾籾)

コシヒカリ 2.5～3.0kg/10a
てんこもり 2.7～3.0kg/10a
山田錦 3.7kg/10a
・種子が十分に覆土される土壌硬度で播種

播種量(乾籾)

コシヒカリ 3.0～3.5kg/10a
てんこもり 3.0～3.5kg/10a
山田錦 4.2g/10a
・播種溝が埋まらない程度の土壌硬度で播種
・播種同時除草剤を散布
・播種後7日間は湛水管理
・播種後8日以降～1葉期までは飽水管理による出芽促進、その後は浅水管理

(3) 播種後～苗立期までの適切な水管理

〔苗立ちの確保〕

・播種後5～7日は田干しによる出芽促進
・水持ちを安定させてから、除草剤散布
・出芽期以降は浅水管理
・目標苗立本数はコシヒカリ、てんこもり 60～80本/m²、山田錦 60本/m²

(4) 適期中干しと適切な水管理

〔適正な生育量への誘導〕

中干し開始目安茎数

(播種35日後頃)

コシヒカリ 84～88本/m程度
てんこもり 102本/m程度
山田錦 82本/m程度

中干し開始目安茎数

(播種35～40日後頃)

コシヒカリ 80本/m程度
てんこもり 95本/m程度
山田錦 75本/m程度

・茎数が増えやすいため、遅れずに中干しを実施
・中干し後は間断かん水を行い、幼穂形成期頃までに足跡の深さ3cm程度以内を目安に地固め
・幼穂形成期頃の生育量に応じた幼穂形成期以降の水管理
適正な生育量：飽水管理 ⇔ 過剰生育：間断かん水

(5) 病害虫防除の徹底

〔被害粒の発生防止〕

・病害虫発生状況(いもち病、紋枯病、初期害虫)に応じた殺虫殺菌剤の塗抹処理や随時防除の実施

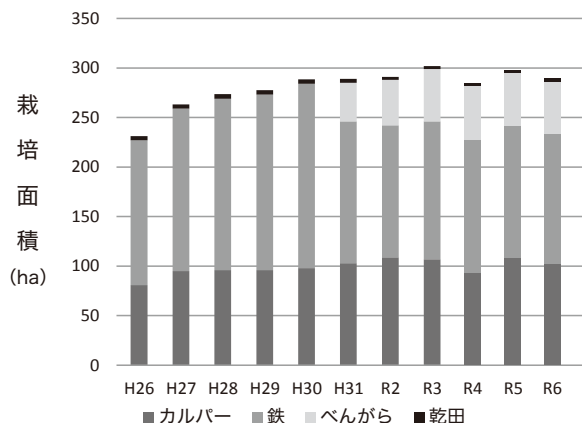


図 J A なんとの直播面積の推移 (H27～R6)

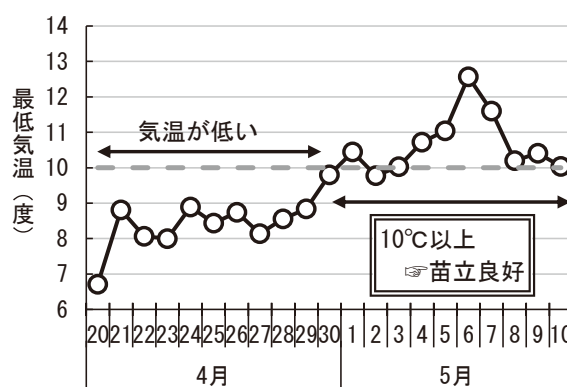


図 4月下旬～5月上旬の最低気温の推移 (H27～R6、南砺高宮アメダス)

3. 健苗の育成

(1) 育苗計画の目安 ——— 田植日を決めてから、育苗期間が長くないように計画しましょう。 ———

品 種	五百万石・雄山錦	山田錦・新大正糯
田植予定日	5月5日	5月10日
比重選・消毒	3月28日	4月6日
浸 種	3月29日	4月7日
催 芽	4月12日	4月19日
播 種	4月14日	4月21日
平床搬出(平床日数)	4月17日(18日間)	4月24日(16日間)
育苗期間	播種から21日間	播種から19日間

品 種	コシヒカリ・てんこもり	
田植予定日	5月10日	5月15日
比重選・消毒	4月6日	4月12日
浸 種	4月7日	4月13日
催 芽	4月19日	4月23日
播 種	4月21日	4月26日
平床搬出(平床日数)	4月24日(16日間)	4月29日(16日間)
育苗期間	播種から19日間	播種から19日間

※育苗日数が基準を超えている場合、1日でも短縮し老化苗を防止しましょう。

(2) 育苗の資材

① 箱数と種籾の目安

品 種	箱当たり 播種量 (乾籾)	植付株数	必要箱枚数 (予備2枚含む)	種子量
五 百 万 石	140g	80株/坪	24枚/10a	3.4kg/10a
雄 山 錦	140g	80株/坪	24枚/10a	3.4kg/10a
コ シ ヒ カ リ	120g	70株/坪	21枚/10a	2.6kg/10a
て ん こ も り	120g	70株/坪	21枚/10a	2.6kg/10a
新 大 正 糯	120g	70株/坪	21枚/10a	2.6kg/10a
山 田 錦	140g	60株/坪	18枚/10a	2.6kg/10a

② 床土と覆土の目安(箱当り)

・1箱当り 床土は3～4kg 覆土は1kg

(3) 育苗期間中に発生する障害と対策 ←(特別栽培米には使用しない)

① 育苗作業時における防除

防 除 時 期	種 類	防 除 方 法	摘 要
苗箱消毒	雑 菌 (糸状菌など)	イチバン 500倍	使用後の廃液は処理業者に処理を委託する。 (農協でも回収しています)
種子消毒 (浸種前)	ばか苗病 ごま葉枯病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 褐条病	モミガードC水和剤 200倍 24時間浸漬	

② カビの防除

症 状	種 類	防除時期	防 除 方 法	摘 要
白カビ (くもの巣状に発生する) 青カビ (種初にべったりとつく)	リゾープス菌 トリコデルマ菌	播種から 緑化期 但し、播種から 14日後まで	ダコレート水和剤※ 500倍液 1 箱当たり 500ml灌注	育苗温度は 30℃以上に しない。 過湿に注意 使用回数 2 回以内

③ 立枯病防除

症 状	種 類	防除時期	防 除 方 法	摘 要
淡紅白カビ 地際部の褐変	フザリウム菌	播種時又は 発芽後	タチガレエースM液剤※ 500倍液 1 箱当たり 500ml灌注	緑化期以降の 低温で発生が 助長される 使用回数 1 回
ムレ苗 葉が早朝正常で 昼間萎凋し、 2～3 日後枯死	ピシウム菌			

※特別栽培米及び生物農薬「タフブロック」を使用した場合は使用不可。

リゾープス菌（白カビ）
による苗立枯れ



ピシウム菌（ムレ苗）
による苗立枯れ



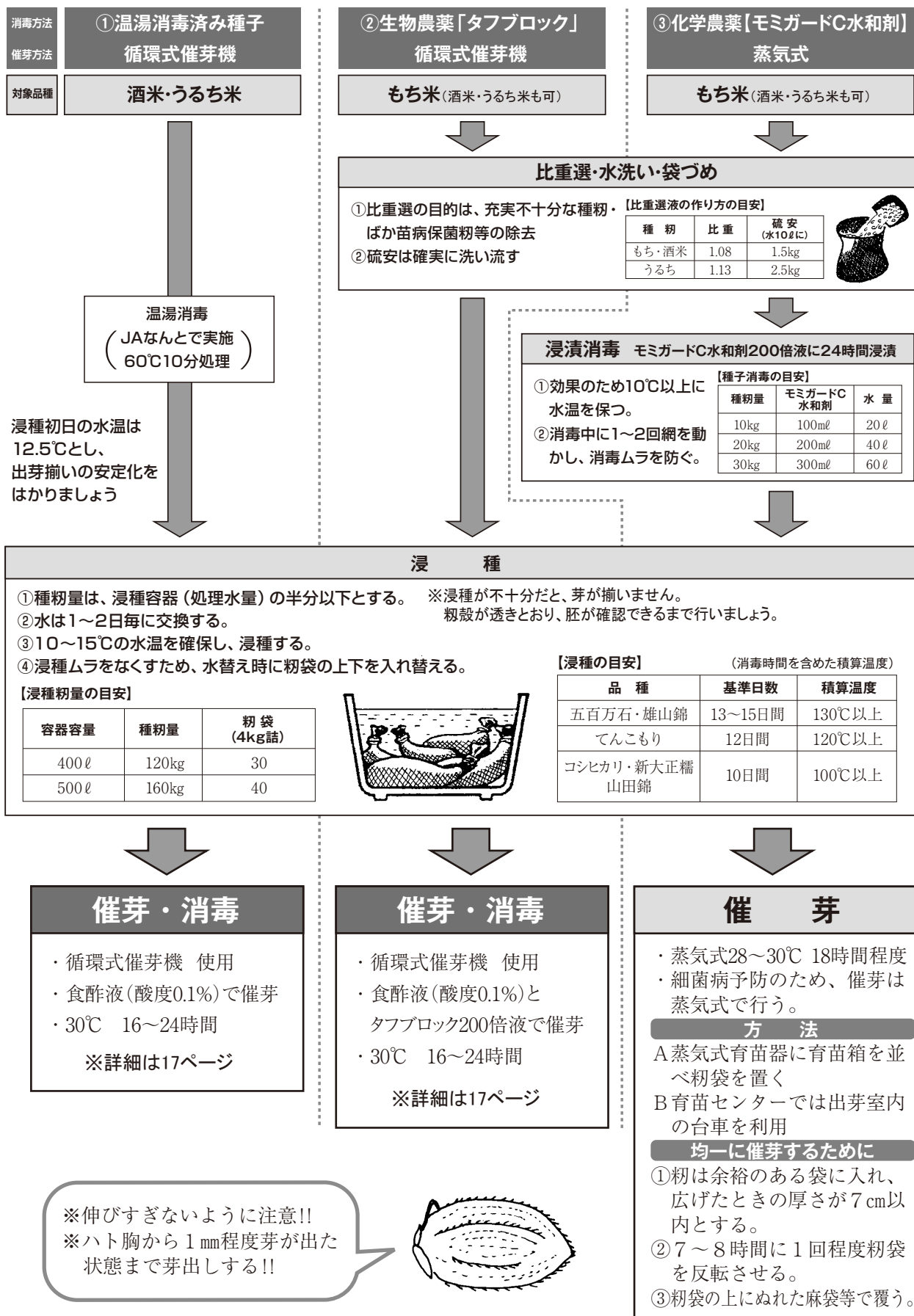
トリコデルマ菌（青カビ）
による苗立枯れ



④ 細菌病の予防

育苗中の高温、多湿は細菌病等を多発させます。播種量は乾籾120 g 以下/箱（コシヒカリの場合）を守り、かん水は控えめに、換気はこまめに行って下さい。

(4) 種子消毒・催芽



○浸種から食酢処理による催芽作業までの注意事項

1. 浸 種 初めの酸素欠乏、雑菌の浸入に注意！！

- ・作業前に浸種オケをよく洗浄しておく
- ・使用する水は、必ず清浄なものを使う（川水は使用しない）
- ・水温を確保する（10～15℃）
- ・水は、毎日交換する

2. 催 芽

1) 食酢溶液の濃度を厳守する

食酢2.3%溶液（酸度0.1%）の作り方

使用食酢
穀物醸造酢
（酸度4.5%）

種籾重量	必要な溶液（ℓ）	食酢（ℓ）		水（ℓ）
		食酢（ℓ）	水（ℓ）	
50kg以下	100	2.3	97.7	
100kg以下	200	4.6	195.4	
200kg以下	400	9.3	390.7	

※食酢や水の量が曖昧だと酸度に大きく影響するので濃度は厳守する

タフブロックを併用する場合
200倍（新大正糯：循環式催芽機使用の場合）

食酢溶液	タフブロック（g）
100ℓ	500
200ℓ	1,000
400ℓ	2,000

※必ず**食酢溶液**と併用してください。

※播種時の**ダコレート水**和剤処理は行わない。

2) 食酢溶液・タフブロックは**別の容器**で作ってから、催芽機へ入れ、よく混ぜる

3) 設定温度30～32℃で16～24時間とする

4) 循環式催芽機で催芽する場合の注意点

- ・循環式催芽機は、作業前によく洗浄する
- ・催芽中、食酢溶液が減った場合は水のみを加える
- ・24時間以上の食酢溶液の催芽は行わない
- ・24時間以上する場合は、食酢溶液を廃棄し、真水にて催芽する

5) 食酢溶液・タフブロックの使用は、
1回のみとする

食酢溶液を廃棄する場合は、重曹で中和する
（廃液500ℓに対し重曹1kgの割合）



<催芽完了の目安>

(5) 育苗作業

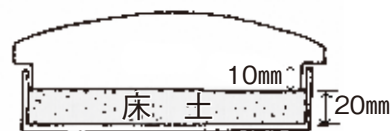
床土入れ



- ① 床土は深さ20mm入れる。
(深さ3cmの箱)

必要床土量

1箱当り	10a 当り
3～4kg	80～100kg



かん水

(ダコレート水和剤のかん注)



- ① かん水は、床土の表面に水がにじみ出る程度まで十分行う。

- ② かん水量の目安(1箱当り)

山土 0.8～1.0ℓ

加工床土 1.1～1.3ℓ

水が多い

根の伸びが悪く、カビの発生が多くなる

水が少ない

出芽不揃いや根上がりになりやすい。

- ③ 蒸気式育苗器の場合はやや少なくする。

- ④ カビ対策としてダコレート水和剤をかん注する場合は1,000倍液を1,000mlかん水と兼ねて行う。

(ダコレート水和剤500倍液の場合は、500mlのかん注と300～500mlの水をかん水する)

(注) 特別栽培米及び生物農薬「タフブロック」を使用した場合は使用不可。

播種



- ① 均一に播種するためには、播種前に種籾の水切りを十分にしておく。

- ② 「厚まき」「ムラ播き」をしない。

- ③ 品種、水分、芽出し程度により落下量が異なるので、播種前に播種量の調整をする。
(空箱を使用し、確認する)

- ④ 品種が変わる時は、きれいに掃除をする。

(箱当たり)

乾籾・芽出し籾 換算表	
乾 籾	芽出し籾
120 g	150～156 g
130 g	163～169 g
140 g	175～182 g

覆土



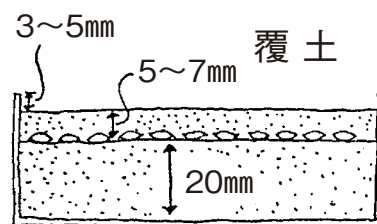
- ① 種籾が見えない程度に均一に覆土をする。

覆土が多い

緑化後のかん水が流れ落ち、しみこみにくい

覆土が少ない

ころび苗になりやすい



- ② 覆土後のかん水はしない。

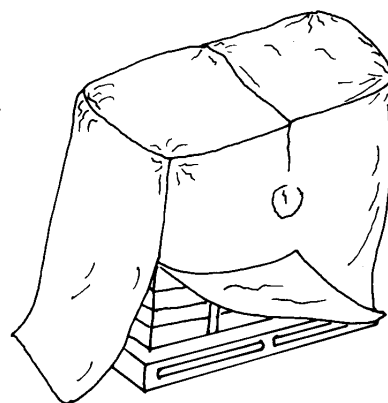
出 芽



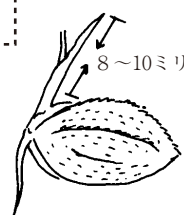
- ① 事前に育苗器のサーモスタット等を点検しておく。
- ② 出芽は30℃で50～60時間。

出芽温度が高い
白カビの発生が多くなる

出芽温度が低い
出芽が不揃いになりやすい



- ③ 搬出時の目安は
芽が8～10mmと
なったころ。



平床搬出

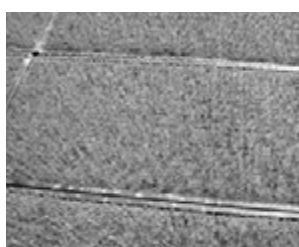


- ① 原則として早朝に行く。
- ② 強い雨や寒い日は行わない。
止むを得ず搬出する場合は
かん水を控え、保温に努める。
- ③ 気温が高いと予想される
場合はかん水をする。
- ④ 籾が露出しているときは、
覆土を補充する。

		緑化期	硬化期
育苗日数		2～3日	13～15日
温度管理	昼間	25℃以下	
	夜間	10℃以上	
水管理		かん水過多に注意 水不足による 葉ヤケに注意	原則、朝1回 土の乾き具合 により適時 かん水
換 気		25℃以上の場合は、換気する	十分な換気

緑 化

〔3日間程度〕



- ① 被覆資材で3日程度被覆し緑化する。
- ② 搬出後、急に強い光を当てない（葉先が白化する）。
- ③ 緑化中は、原則としてかん水はいらない。ただし、覆土が白く乾く場合はかん水する。
- ④ 五百万石は丈が伸びにくいので、やや長く被覆する。
- ⑤ ハウス内の温度は10～25℃とする。

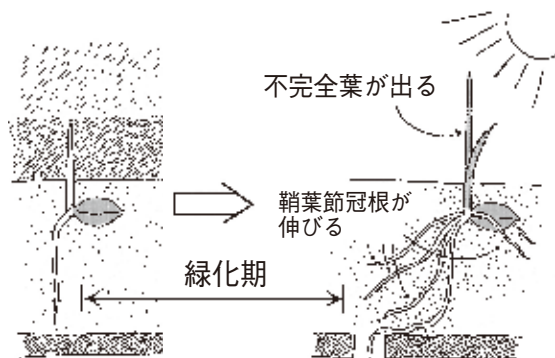
トンネルの管理

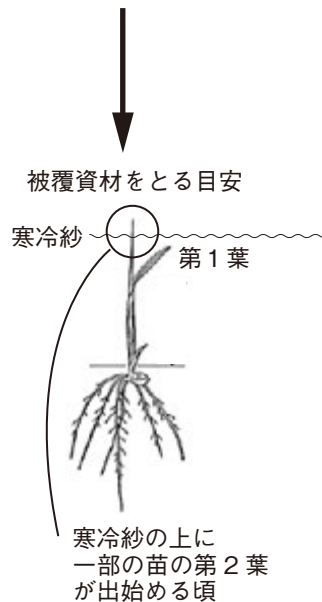
- ① 排水対策を実施する（立枯病予防）。
- ② コモ、オオダレ等をかけて、半遮光状態にして強い光線、高温、低温から保護する。
- ③ 曇雨天時は、トンネル内の温度が上らず、緑化の遅れ、カビの発生につながるため、覆いを外す。

ハウスの管理

- ① 寒冷紗（2重がけ）または、ラブリットをかける。
- ② ハウス内の温度が25℃以上になる場合は、風下側のサイドビニールを開いて換気する。

特別栽培米は
従長していることが多く注意!!

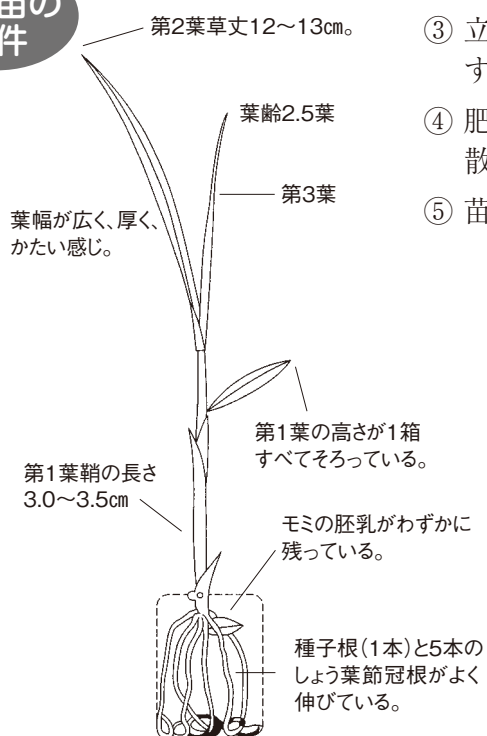




硬化
〔15～17日間〕

田植

◎健苗の条件



トンネルの管理

- ① 本葉1葉が展開したら覆いを外す。
- ② 晴天日は、トンネル内が高温になるのでビニールを開く。
- ③ 平床の排水を良くする(立枯病の予防)。
- ④ 田植4～5日前から夜間もビニールを全開して外気にならす。

ハウスの管理

- ① 日昼は25℃以下、夜間は10℃以上になるよう、換気を徹底する。
・強風日にも、風下のサイドビニールを空けるなど、できる限り換気する。
- ② 換気を始めると、乾燥するため、乾き具合に応じかん水する。
- ③ 田植7日前頃から夜間もビニールを全開して外気にならす。
- ④ 低温対策(5℃以下に冷え込むと予想される場合)
・夕方からハウス内に農業用ローソクまたはストーブをたいて保温する。

※密閉すると酸欠になり、不完全燃焼するので一部換気口を開けておく

【目安】

ローソク：5坪に1本
ストーブ：20坪に1台

・夕方から寒冷紗で三重被覆を行う。

共通事項

- ① かん水は晴天日の午前9時頃までに終える。
(※自動かん水の場合は、水がかからない部分に補正散布する)
- ② フェーン現象等で乾燥する場合は、土の乾き具合をみてかん水する。
- ③ 立枯病が見られたらタチガレエースM液剤500倍液500ml灌注する。(※特別栽培米には使用しない。) p.15参照
- ④ 肥切れ(色ざめ)したら箱当り硫安5gを500mlの水で溶かし散布する。
- ⑤ 苗箱施薬の使用についてはp.38参照。

(6) ワリフ育苗

パイプハウスやトンネル支柱を使用せず、ワリフ（ネット形状のポリエチレン製不織布）、ラブシートとハイマット等の保温資材を直接育苗箱の上に掛けて育苗する方法。

資材費が安価で、設置や撤去・換気等の管理作業が、省力化、時間の短縮できるなどのメリットがある。

しかし、天候の影響を受けやすい等のデメリットもあるため注意が必要。

主な注意事項

①育苗計画

- ・育苗期間が早生30日程度、中生・晩生が25日程度かかるため、田植日を考慮した計画とする。

〔例：早生品種 田植予定日5/5の場合 育苗期間30日〕

比重選	浸 種	催 芽	は 種	搬 出	田 植
3 / 21	3 / 22	4 / 4	4 / 5	4 / 8	5 / 5

〔例：中生・晩生品種 田植予定日5/15の場合 育苗期間25日〕

4 / 8	4 / 9	4 / 19	4 / 20	4 / 23	5 / 15
-------	-------	--------	--------	--------	--------

②苗床の準備

- ・除草や稲株を除去し、凹凸を無くす。
前年に代掻きし、苗床に地割れさせ、排水を良くする。
- ・苗床の周囲に溝を掘り、水か溜まらないようにする。

育苗箱下の水溜まりは、生育ムラ、病害の原因

③板の設置

- ・苗とシートの上に空気層を作ることによって葉焼けを防止する。

④シート上の水溜まりの除去

- ・保温シート上の水溜りが太陽で熱せられ、葉焼けするため取り除く。

⑤被覆資材の飛散防止

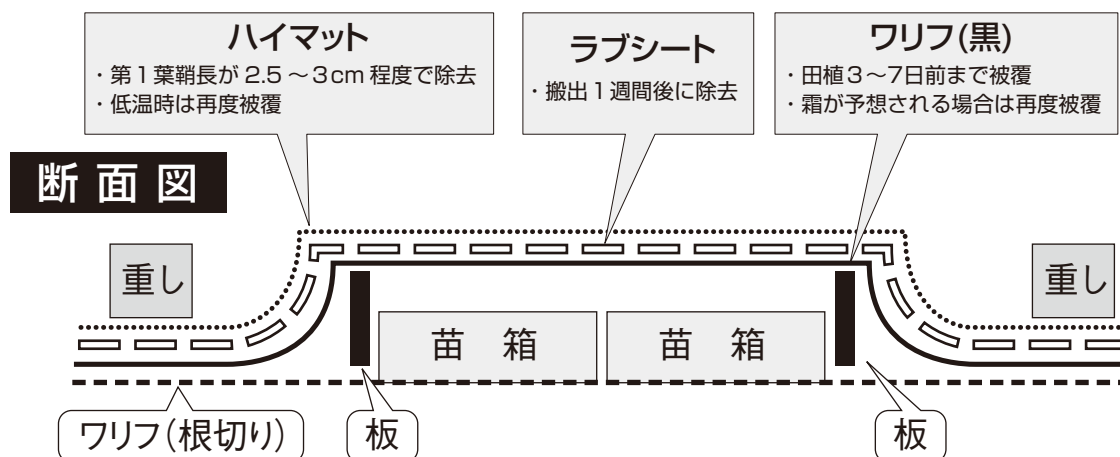
- ・強風時に被覆資材が飛散しないように止めておく。

⑥ハイマット除去後の管理

- ・ハイマット除去後に霜や強風の発生が予想される場合は、再度ハイマットを被覆しなおす（いつでも掛けよう近くに置いておく）。
- ・育苗箱が乾きやすくなるため、状況を見てかん水する。

霜や強風により生育障害が発生

<設置方法>



4. 豊かな土づくり

1 令和4年度 土壌調査結果

(1) 全体の結果

- ・有効態リン酸以外は減少しており、有効態珪酸は目標値以下となった。

表1 土壌分析結果の推移(城端・井口地区平均)

	腐植	有効態 リン酸	置換性 加里	有効態 珪酸	pH
	(%)	(mg/100g)	(mg/100g)	(mg/100g)	
R4	4.3	31.8	30.3	35.9	6.0
H30	4.7	25.7	36.9	37.7	6.1
H24	5.2	27.1	38.2	48.5	6.2
県平均(H26~29)	4.6	23.3	16.0	25.6	5.8
目標値※	3~5	15mg	20mg	40mg	6.0

※洪積粘質、磷酸吸収係数1000~1500の場合(H24当時の目標値から変更されている)

(2) 項目別の状況

① 腐植の減少と地区によるバラつき

- ・南山田地区以外で減少しており、蓑谷地区では目標値以下となった。

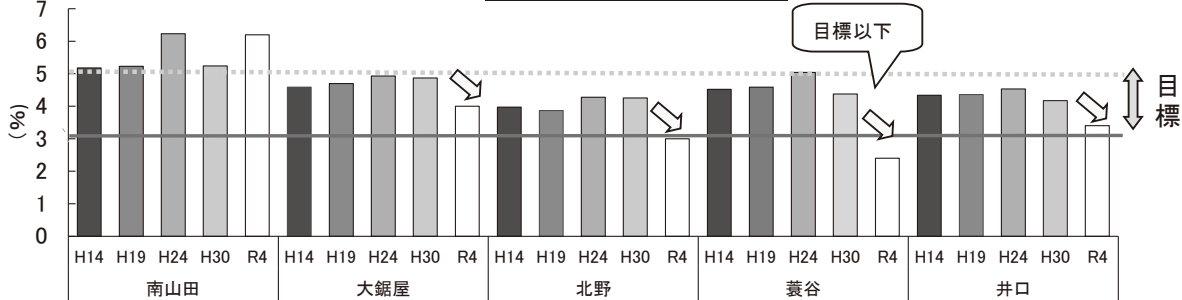


図1 腐植の推移

② 有効態リン酸 (P) の確保

- ・全地区で増加しており、目標値よりかなり多くなっている。

③ 置換性加里 (K) の急激な減少 …加里は流亡しやすい成分

- ・目標値を確保しているが、全地区で減少し、南山田地区を中心に不足しているほ場が多くなっている。

④ 有効態珪酸 (SiO) の減少

- ・前回よりさらに減少し、目標値よりかなり少なく、全地区で不足しているほ場がかなり多い。

⑤ pHの低下

- ・前回よりさらに低下し、目標値程度となり、南山田、蓑谷及び井口地区では目標値以下となった。

2 土づくりの取組み状況

(1) 土づくり資材の散布率の低下

⇒置換性加里・有効態珪酸の減少

- ・「パワーシリカ」などの珪酸や加里を含む資材の散布率は平成30年頃に低下し、50%程度となっている。

表2 土壌分析結果の推移(地区別)

地区	年次	腐植 (%)	有効態 リン酸 (mg/100g)	置換性 加里 (mg/100g)	有効態 珪酸 (mg/100g)	pH
南山田	R4	6.2	36.1	27.8	29.7	5.9
	H30	5.2	28.1	33.3	32.0	6.1
大鋸屋	R4	4.0	30.6	35.0	35.4	6.1
	H30	4.9	27.1	43.5	41.4	6.1
北野	R4	3.0	33.4	37.1	41.6	6.2
	H30	4.3	28.7	39.3	40.0	6.2
蓑谷	R4	2.4	27.8	27.3	37.2	5.9
	H30	4.4	21.2	39.1	41.7	6.1
井口	R4	3.4	27.3	26.8	42.1	6.0
	H30	4.2	21.3	33.8	39.1	6.2
平	R4	4.4	54.3	29.3	24.5	5.9
上平	R1	3.8	50.9	35.1	23.4	6.2

表3 目標値以下の地点率 (%)

地区	腐植	置換性 加里	有効態 珪酸	pH
南山田	9	29	83	71
大鋸屋	38	0	75	31
北野	56	0	56	25
蓑谷	93	7	64	71
井口	32	11	42	53

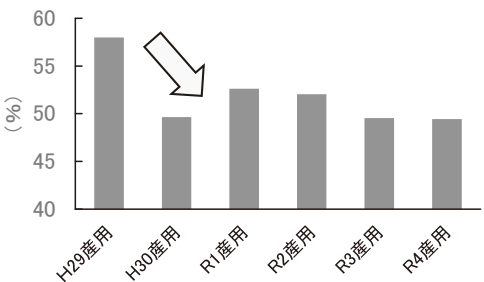


図2 土づくり資材(珪酸含有)の散布率
※「パワーシリカ」100kg/10aとして換算

(2) 牛ふんもみ殻堆肥の散布率の低下

⇒置換性加里・有効態珪酸の減少

- ・平成 26 年頃に減少したが、近年さらに減少し、散布面積は 170ha 程度で、散布率は 17%と低下した。

(3) 大麦作付時の磷酸資材の散布⇒有効態磷酸の増加

- ・近年、作付面積が拡大している大麦では、pH の矯正用のアルカリ資材として、磷酸を含む「シエルホス」や「粒状ようりん」の散布率が 83%(R 4 秋散布)とかなり高い。

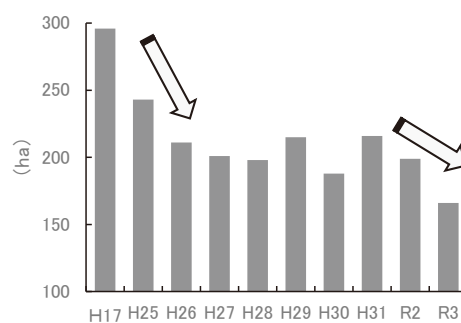


図3 牛ふん粗穀堆肥散布面積

3 今後の土づくり対策

改善項目	土づくり対策
珪酸の補給	・牛ふんもみ殻堆肥 (2 m³・1.1 t /10a) の施用 ・水稻作付前:「パワーシリカ」を 100kg/10a 以上施用
腐植の増加	・牛ふんもみ殻堆肥 (2 m³・1.1 t /10a) の施用 ・地力増進作物 (大麦跡クロタラリア等) の作付け
pH の改善 アルカリ分の補給	・水稻作付前:「パワーシリカ」を 100kg/10a 以上施用 ・大麦、大豆作付前:「苦土石灰」を 100kg/10a 以上施用
加里の補給 磷酸の補給※	・水稻作付前:「パワーシリカ」を 100kg/10a 以上施用 ・牛ふんもみ殻堆肥 (2 m³・1.1 t /10a) の施用 ・大豆作付前:「シエルホス」を 100kg/10a 以上施用

※有効態磷酸がかなり多い場合は、大麦作付前に「苦土石灰 (100kg/10a 以上)」のみを散布する。水稻・大麦肥料の磷酸成分量が減少しているので、今後も必ず土壤分析結果を確認する。

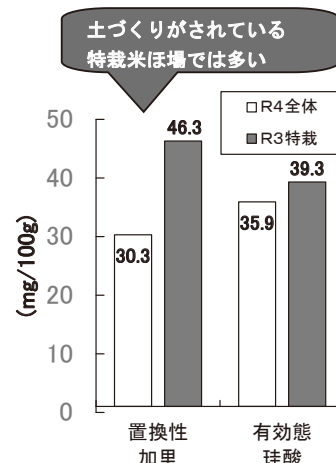


図4 特裁米ほ場の土壤分析結果との比較

＜JA なんと土づくりセンターの完熟堆肥成分分析結果＞(単位: %、副資材: もみ殻、R5. 3月測定)

	窒素	磷酸	加里	珪酸	炭素	pH	水分	C/N 比
JA なんと	0.66	0.60	0.81	9.8	18.4	7.8	49.6	27.9
県平均値※	0.6	0.9	1.0	-	12.2	8.6	63.9	20.8

※H9～20 富山県畜産研究所分析データ

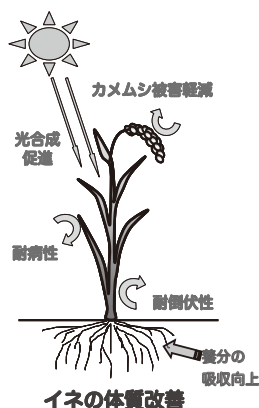
＜土づくり資材の成分量＞

資材名	成分量 (%)				施用量 (kg/10a)
	磷酸(P)	加里(K)	珪酸(SiO)	アルカリ分	
パワーシリカ	5	5	22	35	100
シエルホス	5	0	0	36	100
粒状ようりん	20	0	0	45	20
苦土石灰	0	0	0	55	100

4 土づくりの効果

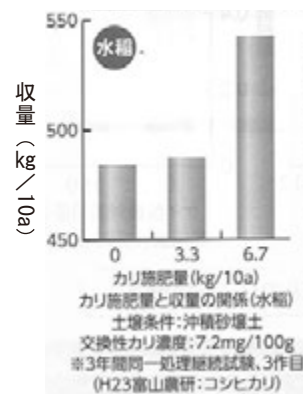
＜珪酸の効果＞

- ① 受光態勢が良く、光合成能力が高まり、登熟が向上する
- ② 倒伏しにくく、病気にも強くなる
- ③ 窒素の吸収率が高まり、稲体の活力を維持する
- ④ 籾割れを防ぎ、カメムシの被害を軽減する



＜加里の効果＞

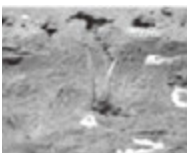
- ① 登熟向上による増収
 - ② 白未熟粒の発生防止
 - ③ 冷害や病害虫への抵抗力を高める
- ※大豆でも加里を増施することで収量が向上する



5. 直播栽培

栽培様式比較（コシヒカリの場合）

区 分	カルパーコーティング（土中直播）	鉄コーティング（表面直播）
特徴等	春に代掻きした水田に、カルパー（水中で酸素を種子に供給）をコーティングした種子を土中（1cm程度）に播種する方法	春に代掻きした水田に鉄粉（重しの役割）をコーティングした種子を土壌表面に播種する方法
メリット	・栽培技術が概ね確立している ・苗立率が高い	・農閑期にコーティング作業ができる ・資材費（コーティング剤含む種子代）が安い
デメリット	・春の農繁期にコーティング作業が必要 ・カルパーが剥がれて播種機が詰まることがある	・苗立率が低い ・倒伏しやすい ・除草剤の使用方法によっては、薬害の発生や雑草が多発
安定生産のための主な留意点	・出芽促進処理、播種後の田干しの徹底による苗立確保 ・適期の雑草防除	・鉄粉衣後の発熱に注意 ・必ず発芽率を播種前に確認する ・代かきは硬めに行う ・適期の雑草防除

比較項目	カルパーコーティング		鉄コーティング	
				
コーティング剤	カルパー粉粒剤16（酸素発生剤） 		鉄粉＋焼石膏 	
播種深度	土中直播（1cm程度）		表面直播（埋まらない）	
播種量（乾粒） kg/10a	2.5～3.0（コシヒカリ）		3.0～3.5（コシヒカリ）	
苗立率	65%程度		60%程度	
出芽揃（播種後）	約1週間		約2週間	
鳥 害	×～△		△（少ない）	
倒伏程度（対移植）	○～△（やや倒伏しやすい）		△（倒伏しやすい）	
収 量（対移植）	△（やや少ない）		△（カルパーよりやや少ない）	
その他	・播種後田干しで苗立安定		・播種時の田面は硬めとする	

6. 肥料の施肥設計

(1) 肥効調節型配合肥料の注意点

- ①圃場条件……………堆肥施用田や、転作跡田では肥料のコントロールが難しく過剰生育にならないように注意する。
 - ②田植時期……………肥料が積算気温で溶出するため、田植えが遅くなる場合は使用しない。
 - ③肥料散布……………側条施肥田植機を使用する場合は、一般の肥料に比べて比重がやや軽いため事前に施肥装置を調節して施肥量を確認してから施用する。
- ※ブロードキャスターや動力散布機は、被覆樹脂が破損する恐れがあるため使用しない。

(2) 緑肥あとの稲作

- クロタリリア 生育全般として2～5割減
 ヘアリーベッチ 生育初期を中心に2～10割減 栽培方法はP80・81

(3) 転作跡田、堆肥施用田の稲作

① 転作跡田・堆肥施用田の基肥量の目安

稲の生育が旺盛となり倒伏する事例が多いので、基肥量に十分注意する

前作物	基肥量（水田跡との比較）	品種選択について
大豆	・3割減 ・磷酸、加里の不足分としてPK化成40号で10～20kg/10a 施用 ・全層施肥の場合、早期追肥は基準どおり施用	・過剰生育による倒伏が懸念されるため、早生品種やてんこもり等の耐倒伏性品種を作付けする
大麦	・一般田では減肥する必要はないが、粘質で作土の深いほ場や大麦の作付回数が少ないほ場では地力窒素の発現が多いため、過去の転作跡水稲の状況を参考にし1～3割程度減肥	
牧草	・堆肥の連用により地力窒素の発現が多いため、<u>基肥は無施用</u>とする。 ・生育状況を見て追肥	

堆肥施用田	堆肥	肥効	減肥の目安
	牛ふん粉殻堆肥	生育後期を中心に発現	生育全般的に減肥する
	鶏ふん堆肥	生育初期から発現	基肥を中心に減肥する

② 栽培にあたっての注意

- ・地温上昇により田がわいてきた場合は、3～4日落水し、有害物質の発生を抑え、稲体の健全化に努める。
- ・穂肥等の施用は、稲の生育状況に応じて行う。

(4) 水管理と化学肥料の低減

適正な水管理を行い、肥料の利用効率を高めて、減肥に努めましょう。

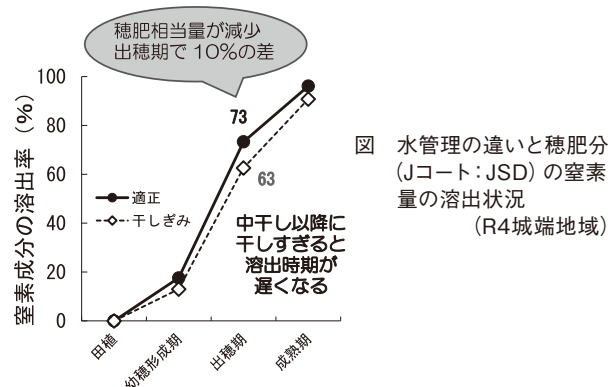
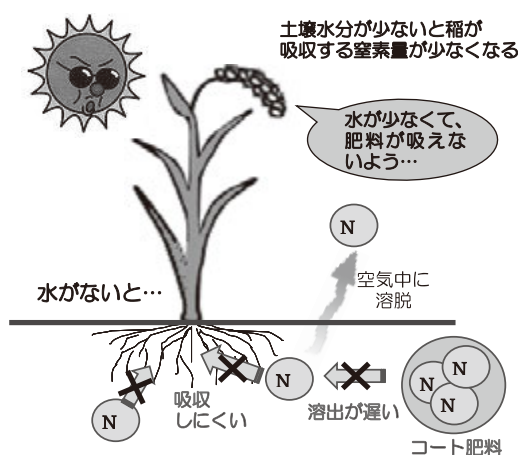


図 水管理の違いと穂肥分 (Jコート:JSD) の窒素量の溶出状況 (R4城端地域)

適正な水管理で1～2割程度減肥できます

○一般栽培米の施肥設計

地区	栽培方法	品 種	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥	
						肥料名	施肥量
城端・井口	移植	五百万石	側条	肥効調節型	100	LPs五百万石専用	35
			側条	分施	100	基肥206	30
		雄山錦	側条	肥効調節型	100	LPs五百万石専用	30
			側条	分施	100	基肥206	30
		山田錦	側条	分施	100	基肥206	30
			側条	分施	100	基肥206	30
		コシヒカリ	側条	※肥効調節型	100	Jコートコシヒカリ1号	30
			側条	分施	100	Jコートコシヒカリ2号	26
			側条	分施	100	基肥206	25
			全層	分施	100	基肥206	30
		てんこもり	側条	肥効調節型	100	LPss晩生専用	40
			側条	分施	100	基肥206	30
			全層	分施	100	基肥206	30
		新大正糯	側条	分施	100	基肥206	25
			全層	分施	100	基肥206	30
	直播	コシヒカリ	側条(カルバー)	肥効調節型	100	LPss直播コシヒカリ	30
			側条(鉄コーティング)	肥効調節型	100	LPss直播コシヒカリ	25
			側条	分施	100	基肥206	25
		てんこもり	側条	肥効調節型	100	LPss晩生専用	35
			側条	分施	100	基肥206	25
		山田錦	側条	分施	100	基肥206	20
平・上平	移植	てんたかく	側条	分施	100	基肥206	35
			全層	分施	100	基肥206	35
		コシヒカリ	側条	分施	100	基肥206	30
			全層	分施	100	基肥206	30

※ コシヒカリ(移植)の肥効調節型肥料は、
土壌地帯で使い分ける

1号	黒ボク、砂質田(川沿い)	30kg/10a
2号	壤質、粘質田(一般田)	26kg/10a

○特別栽培米(減農薬、減化学肥料)の施肥設計(城端・井口地区)

地区	栽培方法	品 種	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥	
						肥料名	施肥量
城端・井口	移植 直播	コシヒカリ	側条	分施	パワーシリカ100kg 稲わら 800kg 完熟堆肥 2m ³	なんと米有機基肥	移植 25~30 直播 15~20

追肥、穂肥の施用は葉色・生育量・天候に応じて調節

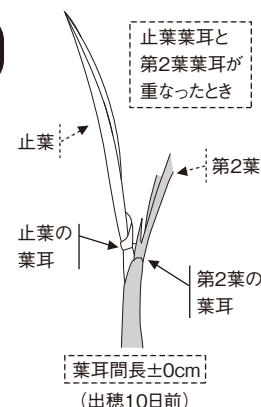
出穂前追肥の目安

品 種	出穂10日前(葉耳間長±0cm)	
	月 日※	目標の葉色
五百万石	7月8日頃	4.3~4.5
雄山錦	7月9日頃	4.2
コシヒカリ	7月23日頃	4.0
てんこもり	7月26日頃	4.3

※ 月日:「JAなんと」の平年値

葉色が淡い場合は追肥する (追肥3号) 施肥量(10a当り)
7~10kg
7kg
10kg

穂揃期(出穂90%)
目標の葉色
4.5~4.7
4.5
4.3~4.5
4.5



(単位：kg/10a)

早期追肥 (田植え7日後) (追肥3号)	穂肥 (追肥3号)			成分計 (土づくり資材含む)		
	1 回目	2 回目	(出穂前追肥)	N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
—	—	—	(10)	7.7 (9.2)	9.2 (9.5)	9.9 (11.4)
—	12	15	—	7.7	11.8	13.9
—	—	—	(10)	6.6 (8.1)	8.6 (8.9)	9.2 (10.7)
—	10	10	—	6.6	11.6	12.8
—	10	12	—	6.9	11.7	13.1
—	—	—	(7)	6.3 (7.4)	7.7 (7.9)	10.4 (11.5)
—	—	—	(7)	5.5 (6.6)	7.3 (7.5)	9.7 (10.8)
—	10	12	—	6.3	10.7	12.3
15	10	12	—	9.2	12.1	15.4
—	—	—	(10)	8.4 (9.9)	10.6 (10.9)	10.6 (12.1)
—	10	12	(7)	6.9 (8.0)	11.7 (11.9)	13.1 (14.2)
15	10	12	(7)	9.2 (10.3)	12.2 (12.4)	15.4 (16.4)
—	10	10	—	6.0	10.6	12.0
15	10	10	—	8.9	12.1	15.1
—	—	—	(7)	6.3 (7.1)	9.2 (9.4)	9.2 (10.3)
—	—	—	(7)	5.3 (6.4)	8.5 (8.7)	8.5 (9.6)
—	10	10	—	6.0	10.6	12.0
—	—	—	(10)	7.4 (8.9)	9.9 (10.2)	9.9 (11.4)
—	10	12	(7)	6.3 (7.4)	10.7 (10.9)	12.3 (13.4)
—	10	10	—	5.4	9.6	11.2
—	12	12	—	7.8	12.7	14.2
15	12	12	—	10.1	13.2	16.5
—	10	12	—	6.9	11.7	13.1
15	10	12	—	9.2	12.1	15.4

(単位：kg/10a)

穂肥 (なんと米有機穂肥)		成分計 (土づくり資材、堆肥等含む)		
1 回目	2 回目	N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
10	12～15	4.6～5.4	7.4～7.9	9.2～9.9
10	12～15	3.8～4.6	6.6～7.1	8.4～9.1

肥 料 名	内容量	成 分 量					仮比重
		N（窒素）			P （りん酸）	K （カリ）	
		速効性	つなぎ相当量	穂肥相当量			
LPs五百万石専用	15	9.9	－	4.0(LPs60), 8.1(LPs80)	12	14	0.87
Jコートコシヒカリ 1 号	15	7.3	2.1(LP30)	8.1(JSD), 3.5(JSE)	9	18	0.86
Jコートコシヒカリ 2 号	15	8.4	－	8.8(JSD), 3.8(JSE)	9	18	0.87
LPss晩生専用	15	6.3	4.2(LPs60)	10.5(LPss100)	14	14	0.84
LPss直播コシヒカリ	15	8.4	－	12.6(LPss直播用)	14	14	0.89
基肥206	20	12	－	－	20	16	0.94
追肥3号	20	15	－	－	3	15	0.93
なんと米有機基肥	20	8	－	－	8	8	0.74
なんと米有機穂肥	20	12	－	－	2	10	0.73

※ JSD：80日相当 JSE：100日相当

7. 水稻本田雑草防除対策

(1) 移植栽培

区 分		除 草 剤 名	雑草、限界葉齢(L)				使用時期及びノビエ効果	10a当り 使用量	総使用 回数
			ノビエ	ホタルイ	ウリカワ	藻 類			
体 系 処 理	初期 剤	マーシエット 1キロ粒剤	1.0L	発生 始期 まで	－	－	移植直後～ノビエ1.0葉期まで (但し、移植後30日まで)	1kg	1
	1 回 処 理 剤	カチボシ1キロ粒剤51	2.5L	2.0L	2.0L	発生前 まで	移植後5日～ノビエ2.5葉期まで (但し、移植後30日まで)	1kg	1
		ディオーレ1キロ粒剤	3.0L	3.0L	3.0L	－	移植後5日～ノビエ3.0葉期まで (但し、移植後30日まで)		
		ディオーレフロアブル	3.0L	3.0L	2.0L	－		40g×10個	
		ディオーレジャンボ	3.0L	3.0L	3.0L	－		250g	
		ワザアリ楽粒	3.0L	3.0L	3.0L	－			
		エンペラー豆つぶ250	3.0L	3.0L	3.0L	発生前 まで	移植直後～ノビエ3.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)		
	中期 剤	サンパンチ 1キロ粒剤	3.5L	4.0L	4.0L	発生 始期 まで	移植後15日～ノビエ3.5葉期まで (但し、収穫60日前まで)	1kg	1
		テッケン1キロ粒剤	4.0L	4.0L	5.0L	－	移植後15日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)		
中 後 期 剤		ウィードコア 1キロ粒剤	4.0L	4.0L	4.0L	－	移植後7日～ノビエ4.0葉期 (但し、収穫60日前まで)	1kg	1
		バイスコープ 1キロ粒剤	－	草丈 15cm まで	7.0L	－	移植後14～60日(イネ科を除く) (但し、収穫45日前まで)	1kg	
		ワイドパワー粒剤	5.0L	5.0L	4.0L	－	移植後20日～ノビエ5.0葉期 (但し、収穫60日前まで)	3kg	
残 草 処 理 剤		クリンチャー 1キロ粒剤	4.0L	－	－	－	移植後7日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫30日前まで)	1kg	2
			5.0L				移植後25日～ノビエ5.0葉期まで (但し、収穫30日前まで)	1.5kg	
		ヒエクリン 1キロ粒剤	4.0L				移植後15日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫45日前まで)	1kg	1
		クリンチャーバス ME液剤	5.0L	発生盛期～ 増殖中期まで		－	移植後15日～ノビエ5.0葉期まで (但し、収穫50日前まで)	1,000mℓ	2
		ヒエクリン バサグラン粒剤	4.0L	4.0L	4.0L	－	移植後15日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	3kg	1
		バサグラン粒剤	－	発生盛期～ 増殖中期まで		－	移植後15日～収穫45日前まで (イネ科を除く)	3～4kg	1
		バサグラン液剤	－	発生盛期～ 増殖中期まで		－		500～ 700mℓ	2

除草剤の使用上の注意

〔一回処理剤・初期剤〕

- 強風の日は避け均一散布を心掛ける。特にジャンボ剤、フロアブル剤はやや深水とし、藻類・表層剥離の発生前の散布に心掛ける。
- 散布後3～4日間は水を切らさないよう管理を徹底する。不足の場合は足し水をする。
- 前年にホタルイ、ウリカワ等の多年生雑草が発生した圃場では、草の発生に注意し遅れずに中期剤を散布するか、体系処理に変更する。

初期剤 使用時の 散布適期	散布後 3～4日間の 水の状態	ドローン 散布 適性	使 用 上 の 注 意
	水深3～5cm (湛水)	—	・原則として、初中期剤または中期剤との体系で使用する。 ・使用時期は代掻きから8日以内とする。
初期剤 散布後 7日～10日	水深3～5cm (湛水)	○	・雑草の発生前から発生初期までにかけて有効なのでノビエ2.5葉期までに時期を失ないように散布する。
		○	・使用時期は代掻きから10日以内とする。 ・補植を終えてから使用する。
		—	・散布時は圃場の水深を5cm以上にして実施すること。 ・散布時は圃場の水深を5cm以上にして実施すること。 ・小包装（パック）のまま10アール当り10個の割合で水田に均等に投げ入れる。
		○	・散布時は圃場の水深を5cm以上にして実施すること。 ・散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・藻や浮草が多発している水田や、水面浮遊物が多い場合は拡散が不十分となり、効果が劣る可能性がある。
	水深3～5cm (湛水)	○	・漏水の激しい水田、軟弱な苗を移植した圃場、極端な浅植え、植付け不良で根が田面に露出している圃場では使用を避ける。
		○	・原則として、前処理剤で防除できず残った雑草を枯殺する場合に使用する。 ・散布後7日間は湛水状態を保ち、田面を露出させたり水をきらしたりしない。
	水深3～5cm (湛水)	○	・散布後、7日間は湛水状態を保ち、田面を露出させないように注意すること。 ・散布後、多量の降雨が予想される場合は除草効果が低下することがあるので使用をさけること。
	湛水または ごく浅水	○	・散布後3日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないので晴天が続く日を選んで散布する。 ・散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・部分散布する場合はごく浅水で、散布面積に応じた使用量（1㎡あたり1g）を均一に散布する。
	落水又は 浅水	—	・できるだけ浅水状態にして、散布後少なくとも3日間以上そのままの状態を保つ。 ・散布後、7日間は降雨があっても落水しない。 ・スポット処理が可能。
	水深3～5cm (湛水)	○	・クリンチャー1キロ粒剤は残効性がないので注意する。 ・散布後3～5日間は湛水状態を保ち、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・散布後に多量の降雨が予想される場合は、除草効果が低下することがあるので使用を避ける。 ・砂質土壌の水田及び漏水田（減水深2cm／日以上）では使用を避ける。
	落水	—	・散布後2日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないので晴天が続く日を選んで散布する。 ・雑草の多発場所のみにスポット処理が可能である。 ・薬量1000mlを70～100ℓの水に希釈し、雑草茎葉散布又は全面散布する。 ・雑草に露がついている時間の散布は避ける。
	浅水	—	・ごく浅水で雑草が水面上に出る状態で散布し、水口・水尻を止め、少なくとも3日間はそのままの状態を保ち、その後、入水し、通常の湛水状態を保つ。 ・散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・散布後2日以内に大量の降雨があると効果が十分に発揮されないので晴天が続く日を選んで散布する。 ・万が一散布後に降雨があった場合は、落水せずそのままの状態を保つ。
	落水又は 浅水	—	・散布後2日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないので晴天が続く日を選んで散布する。 ・雑草の多発場所のみにスポット処理が可能である。 ・液剤は薬量500～700mlを70～100ℓの水に希釈し茎葉散布又は全面散布する。（液剤） ・雑草に露がついている時間の散布は避ける。（液剤） ・ごく浅水で散布する。（粒剤）

〔 中期・中後期剤 〕

○散布前に軽い田干しを行い、新しい水を入れてから散布する。

○必ず稲の葉齢を確認してから散布する。

〔 残草処理剤 〕

○使用農薬によって使用方法が異なるので、必ず確認してから散布する。

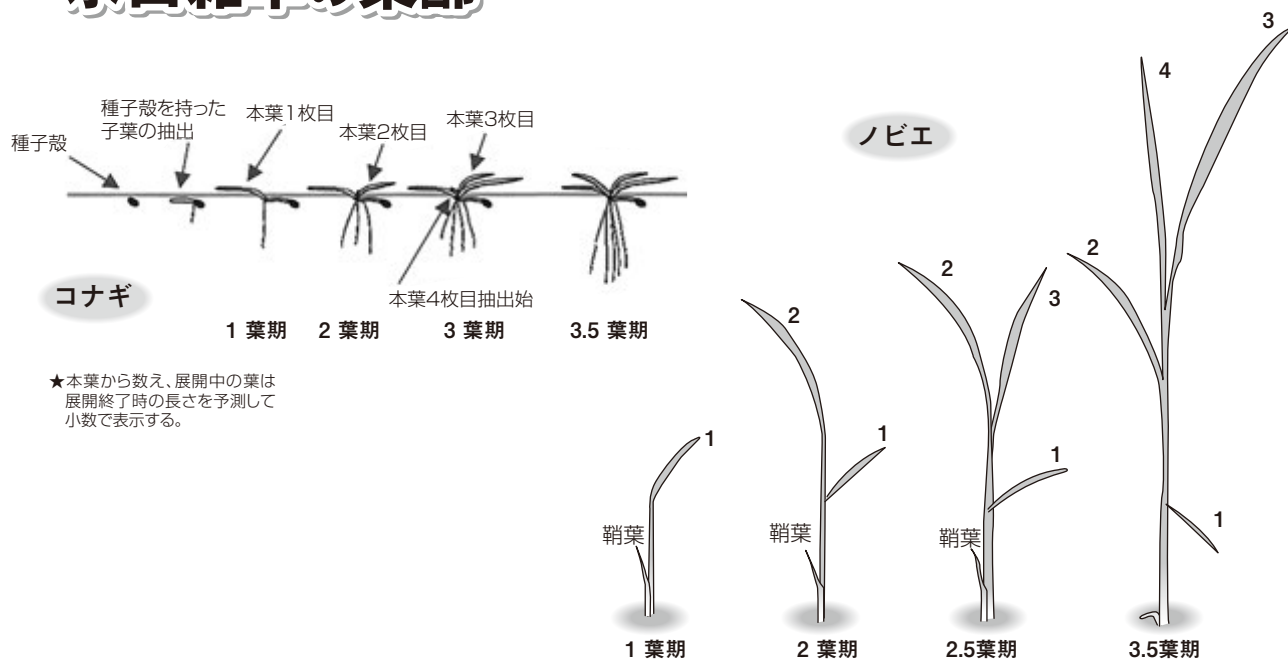
(2) 特別栽培米

区 分	除 草 剤 名	雑草、限界葉齢(L)				使用時期及びノビエ効果	10a当り 使用量	総使用 回数
		ノビエ	ホタルイ	ウリカワ	藻 類			
1回 処理剤	カチボシ 1キロ粒剤51	2.5L	2.0L	2.0L	発生前 まで	移植後5日～ノビエ2.5葉期まで (但し、移植後30日前まで)	1kg	1
残 草 処 理 剤	ヒエクリン 1キロ粒剤	4.0L	—	—	—	移植後15日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫45日前まで)	1kg	1
	ヒエクリン バサグラン粒剤	4.0L	4.0L	4.0L	—	移植後15日～ノビエ4.0葉期まで (但し、移植後60日まで)	3kg	
	バサグラン粒剤	—	発生盛期～ 増殖中期 まで		—	移植後15日～収穫45日前まで (イネ科を除く)	3～4kg	
	バサグラン液剤	—	発生盛期～ 増殖中期 まで		—		500～ 700ml	

※特別栽培米の残草処理剤は、カチボシ 1 キロ粒剤の補完除草剤とし必要に応じて散布する。

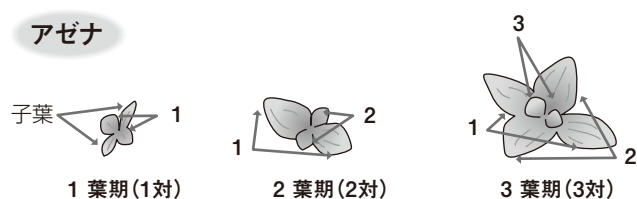
- ・ヒエクリンバサグラン粒剤は、本剤 1 回のみ散布可能。
- ・ヒエクリン 1 キロ粒剤及びバサグラン粒剤(液剤)は、各々 1 回のみ散布可能。

水田雑草の葉齢

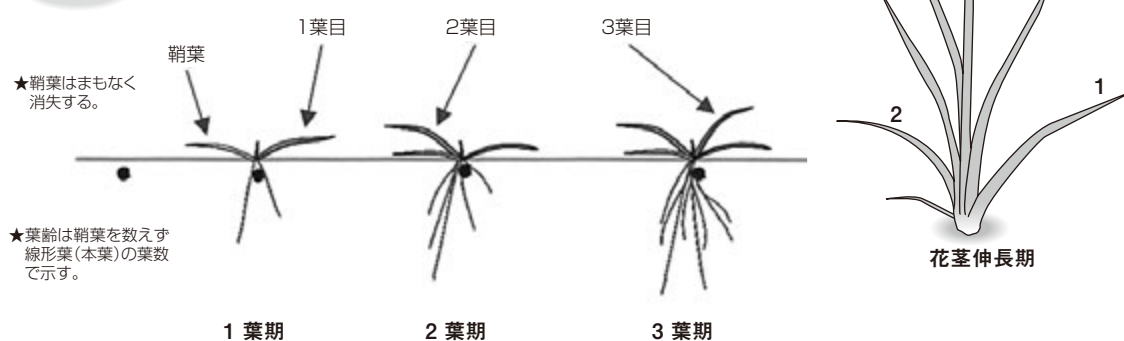


散布後 3～4日間の 水の状態	ドローン 散布 適性	使用上の注意
水深3～5cm (湛水)	○	・代掻き後10日以内に散布する。
水深3～5cm (湛水)	○	・砂質土壌の水田及び漏水田（減水深2cm／日以上）では使用を避ける。 ・ノビエの発生前から4葉期に有効なので時期を失しないように散布してください。
浅水	—	・雑草が水面上に出る状態での散布し、水口・水尻を止め少なくとも3日間はそのままの状態を保ち、その後、入水し、通常の湛水状態を保つ。 ・散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・散布後2日以内に大量の降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。 ・万が一散布後に降雨があった場合は、落水せずそのままの状態を保つ。
落水又は 浅水	—	・散布後2日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。 ・雑草の多発場所のみにスポット処理が可能である。 ・液剤は薬量500～700mlを70～100ℓの水に希釈し雑草茎葉散布又は全面散布する。（液剤） ・雑草に露がついている時間の散布は避ける。（液剤） ・ごく浅水で散布する。（粒剤）

アゼナ

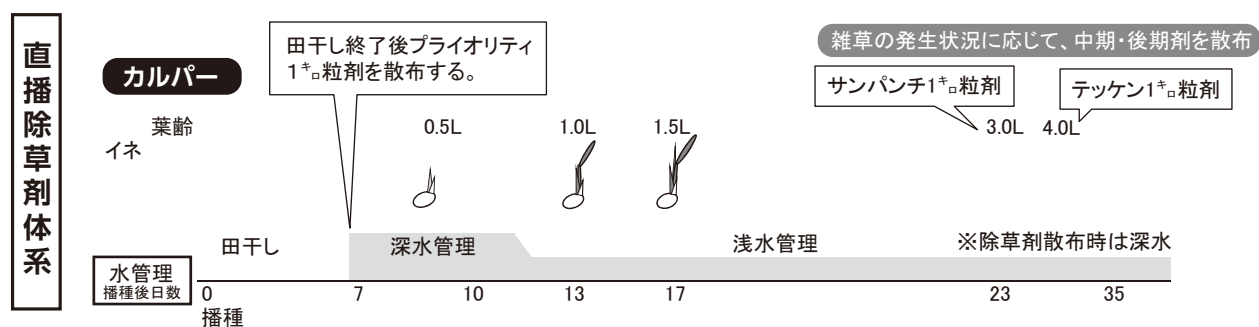


ホタルイ

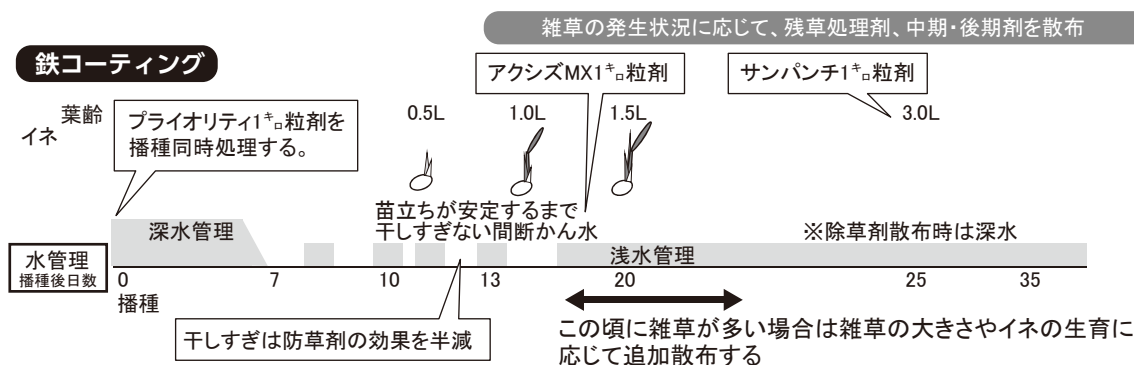


(3) 直播栽培

区 分		除 草 剤 名	雑草、限界葉齢 (L)				使 用 時 期	10a当り 使用量	総使用 回数
			ノビエ	ホタルイ	ウリカワ	藻 類			
体 系	初 中 期 剤	プライオリティ1キロ粒剤 (鉄コーティング)	3.5L	4.0L	4.0L	－	播種時	1kg	1
		プライオリティ1キロ粒剤 (カルパーコーティング)					田干し終了後～ノビエ3.5葉期まで (播種7～10日頃)		
処 理	中 期 剤	アクシズMX1キロ粒剤	4.0L	4.0L	4.0L	－	稲1.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫45日前まで)	1kg	1
		レブラスジャンボ	4.0L	20cm まで	3.0L	－	稲1.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	40g×10個	
		サンパンチ1キロ粒剤	3.5L	4.0L	4.0L	発生 始期 まで	稲3.0葉期～ノビエ3.5葉期まで (但し、収穫60日前まで)	1kg	
		テッケン1キロ粒剤	4.0L	4.0L	5.0L	－	稲4.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)		
中 後 期 剤		ウィードコア1キロ粒剤	4.0L	4.0L	4.0L	－	稲3.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	1kg	1
		バイスコープ1キロ粒剤	－	草丈 15cm まで	7.0L	－	稲3.0葉期～出芽60日(イネ科を除く) (但し、収穫45日前まで)	1kg	
		ワイドパワー粒剤	4.0L	4.0L	2.0L	－	稲4.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	3kg	
残 草 処 理 剤	ク リ ン チ ャ ー 1 キ ロ 粒 剤	3.0L	－	－	－	播種後10日～ノビエ3.0葉期まで (但し、収穫30日前まで)	1kg	2	
		4.0L				播種後25日～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫30日前まで)	1.5kg		
	ヒ エ ク リ ン 1 キ ロ 粒 剤	4.0L				稲3.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫45日前まで)	1kg	1	
	ク リ ン チ ャ ー バ ス M E 液 剤	5.0L	発生盛期～ 増殖中期まで		－	播種後10日～ノビエ5.0葉期まで (但し、収穫50日前まで)	1,000mℓ	2	
	ヒ エ ク リ ン バ サ グ ラ ン 粒 剤	4.0L	4.0L	4.0L	－	稲3.0葉期～ノビエ4.0葉期まで (但し、収穫60日前まで)	3kg	1	
	バ サ グ ラ ン 粒 剤	－	発生盛期～ 増殖中期まで		－	稲3.0葉期～収穫45日前まで (イネ科を除く)	3kg	1	
	バ サ グ ラ ン 液 剤	－	発生盛期～ 増殖中期まで		－	播種後35日～収穫45日前まで (イネ科を除く)	500～ 700mℓ	2	



散布後 3～4日間の 水の状態	ドローン 散布 適性	使 用 上 の 注 意
水深3～5cm (湛水)	—	・ 雑草の発生前から生育初期までにかけて有効なので、ノビエ3.5葉期までに時期を失しないように散布する。 ・ 稲が軟弱な場合、葉害が発生するおそれがあるので注意。 ・ 除草剤の効果発現が非常に遅いので注意。 ・ 除草剤散布後は田干しすると薬剤効果が失われるため、薬剤散布前にしっかりと田干しを行う。(カルパー)
水深3～5cm (湛水)	○	・ 雑草の発生前から生育初期までにかけて有効なので、ノビエ3.5葉期までに時期を失しないように散布する。
	—	・ 散布時は圃場の水深を5cm以上にして実施すること。 ・ 小包装(パック)のまま10アール当たり10個の割合で水田に均等に投げ入れる。
	○	・ 深水状態にして、散布後少なくとも3～5日間はそのままの状態を保つ。 ・ 散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。
水深3～5cm (湛水)	○	・ 原則として、前処理剤で防除できず残った雑草を枯殺する場合に使用する。 ・ 散布後7日間は湛水状態を保ち、田面を露出させたり水をさらしたりしない ・ 深水状態にして、散布後少なくとも3～5日間はそのままの状態を保つ。 ・ 散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。
	○	・ 散布後3日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。
	—	・ できるだけ浅水状態にして、散布後少なくとも3日間以上そのままの状態を保つ。 ・ 散布後、7日間は降雨があっても落水しない。・ スポット処理が可能。
水深3～5cm (湛水)	○	・ クリンチャー 1 キロ粒剤は残効性がないので注意する。 ・ 散布後3～5日間は湛水状態を保ち、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・ 散布後に多量の降雨が予想される場合は、除草効果が低下することがあるため使用を避ける。 ・ 砂質土壌の水田及び漏水田(減水深2cm/日以上)では使用を避ける。 ・ ヒエクリーンを初期剤(播種時)で使用了場合、残草処理では使用できないので注意すること。
落水	—	・ 散布後2日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。 ・ 雑草の多発場所のみにスポット処理が可能である。 ・ 薬量1000mlを70～100ℓの水に希釈し、雑草茎葉散布又は全面散布する。 ・ 雑草に露がついている時間の散布は避ける。
浅水		・ 雑草が水面上に出る状態の浅水で散布し、水口・水尻を止め少なくとも3日間はそのままの状態を保ち、その後、入水し、通常の湛水状態を保つ。 ・ 散布後、7日間は落水、かけ流しはしない。 ・ 散布後2日以内に大量の降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。 ・ 万が一散布後に降雨があった場合は、落水せずそのままの状態を保つ。
落水又は 浅水		・ 散布後2日以内に降雨があると効果が十分に発揮されないため晴天が続く日を選んで散布する。 ・ 雑草の多発場所のみにスポット処理が可能である。 ・ 液剤は薬量500～700mlを70～100ℓの水に希釈し落水状態で茎葉散布又は全面散布する。(液剤) ・ 雑草に露がついている時間の散布は避ける。(液剤)



水稻除草剤（中期剤・後期剤）の使用時期

◎移植

・刈取りが8月25日ならば、6月27日時点で収穫60日前
・刈取りが9月13日ならば、7月15日時点で収穫60日前

※収穫の目安
【早生：8月下旬　中生：9月中旬　晩生：9月下旬】

品名	10a当り 散布量	田植日				使用時期
		5/1	5/5	5/10	5/15	5/20
サンパンチ1キロ粒剤	1kg	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～ノビエ3.5葉期まで】 但し、収穫60日前まで
テッケン1キロ粒剤	1kg	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～ノビエ4.0葉期まで】 但し、収穫60日前まで
ウイードコア1キロ粒剤	1kg	5/8～	5/12～	5/17～	5/22～	5/27～ 【移植後7日～ノビエ4.0葉期】 但し、収穫60日前まで
バイスコープ1キロ粒剤	1kg	5/15～6/30	5/19～7/4	5/24～7/9	5/29～7/14	6/3～7/19 【移植後14日～60日】 但し、収穫45日前まで
ワイドパワー粒剤	3kg	5/21～	5/25～	5/30～	6/4～	6/9～ 【移植後20日～ノビエ5.0葉期まで】 但し、収穫60日前まで
クリンチャー1キロ粒剤	1kg	5/8～	5/12～	5/17～	5/22～	5/27～ 【移植後7日～ノビエ4.0葉期まで】 但し、収穫30日前まで
	1.5kg	5/26～	5/30～	6/4～	6/9～	6/14～ 【移植後25日～ノビエ5.0葉期まで】 但し、収穫30日前まで
ヒエクリーン1キロ粒剤	1kg	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～ノビエ4.0葉期まで】 但し、収穫45日前まで
クリンチャーババスME液剤	1000ml	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～ノビエ5.0葉期まで】 但し、収穫50日前まで
ヒエクリーンバサグラン粒剤	3kg	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～ノビエ4.0葉期まで】 但し、収穫60日前まで
バサグラン粒剤	3～4kg	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～ 【移植後15日～収穫45日前まで】 (イネ科を除く)
バサグラン液剤	500～ 700ml	5/16～	5/20～	5/25～	5/30～	6/4～

- ・使用前にラベルをよく読み、使用時期と使用量を必ず守り散布しましょう。
- ・容器、空き袋は圃場などに放置せず、適切に処理しましょう。

近年多発する水田雑草への対応策

	タイヌビエ	イヌホタルイ	オモダカ	コナギ	ウリカワ
					
特 徴	一年生雑草 最も代表的な雑草で、発生多しと穂数不足により減収する。代掻き後1週間程度で発生し始め、7～9月に大きな穂をつける。	多年生または一年生雑草 難防除雑草の一つ。水田では主に種子から発芽し、種子発生の葉は線形で、波状に屈曲することが多い。	多年生雑草 水田では塊茎から発生し、葉は矢じり形で30～60cmの長い葉柄がある。塊茎は1株当り50～150個で、翌年これから発生する。	一年生雑草 水田1年生広葉雑草の代表種で発生量が多い。幼苗はウリカワ、ヘラオモダカに似るが、4～5葉からはハート型の葉がつく。	多年生雑草 水田での発生量が多く、ほとんどが塊茎から発生する。発生が多い場合は、稲の葉色の低下や茎数、穂数の減少により減収する。
除草のポイント	・適期を逃さず、早めの除草剤を散布する。 ・種子は6～8年間水田土壌で生存するので、種子が落ちる前に除草する。	・適期を逃さず、早めの除草剤を散布する。 ・種子の生産量が多い上、寿命が10年以上と長いため、種子が落ちる前に除草する。	・塊茎の寿命は1年程度なので、1年間防除を適切に行えば次年度以降の発生は少なくなる。 ・発生時期のばらつきや再生があるため有効な薬剤の体系処理が有効。	・適期を逃さず、早めの除草剤を散布する。 ・代かき時の均平を十分に行う。	・塊茎は乾燥や低温に弱いため、秋起しや2～3年の田畑輪換を行う。
有効な薬剤	・通常の初期除草剤 ・初中期一発除草剤 ・中後期除草剤 ・クリンチャー1キロ粒剤 ・クリンチャーバスマE液剤 ・ヒエクリーン1キロ粒剤	・通常の初期除草剤 ・初中期一発除草剤 ・中後期除草剤 ・バサグラン粒剤・液剤 ・ワイドバワー粒剤	・中後期除草剤 ・バサグラン粒剤・液剤 ・ワイドバワー粒剤	・通常の初期除草剤 ・初中期一発除草剤 ・中後期除草剤 ・バサグラン粒剤・液剤 ・ワイドバワー粒剤	・通常の初期除草剤 ・初中期一発除草剤 ・中後期除草剤 ・バサグラン粒剤・液剤 ・ワイドバワー粒剤

	セリ	ミズガヤツリ	イボクサ	クサネム	表層剥離	藻類 (アオミドロ)
						
特 徴	多年生雑草 越冬株やほふく茎により畦畔や水路から入り込み増殖する。	多年生雑草 水田多年生雑草の代表的なもので、水田では主に塊茎から発芽する。	一年生雑草 調整水田後や直播を繰り返した水田等で多く発生する。畦畔際に多く、耕起による切断片から広がる。	一年生雑草 葉は羽状複葉で、裏面は白粉色。荒地、水田のあぜに多く生育するが、水田に入り重なる。種子は、玄米に混入して品質を落とす原因となる。	代かき後微細な土壌粒子に珪藻類が付着・凝集して薄膜が形成され水面に浮く。	水田に多く発生すると太陽熱を遮断して水温、地温を下げ稲の生育に害を及ぼす。
除草のポイント	・代かきによって水田中に完全に埋没した場合は、再生が抑制されるので浅水での代かきに心がける。 ・生育期の除草剤散布は効果が劣るので、発生前～発生初期に散布する。	・湛水状態では土壌表層からしか出芽せず、死滅も早い代かきを丁寧に行う。 ・秋起しを行い低温乾燥状態にすることが塊茎の減少に有効。	・本田内に入ると防除が困難となるため耕起前の畦畔防除が有効。 ・代かきを丁寧に行い、種子を埋没させることにより発芽を抑制する。	・適期を逃さず、早めの除草剤を散布する。 ・除草効果を高めるため、代かき時の平均を十分に行う。 ・種子で繁殖するため、種子が落ちる前に手取り除草を実施する。	・田干しや水の交換を行う。 ・適期を逃さず、早めの除草剤散布を行う。フロアブル、ジャンボ剤等の拡散を妨げるので、使用を控える。	
有効な薬剤	・初中期一発除草剤 ・サンパンチ1キロ粒剤	・通常の初期除草剤 ・初中期一発除草剤 ・中後期除草剤 ・バサグラン粒剤・液剤 ・ワイドバワー粒剤	・サンパンチ1キロ粒剤 ・ロイヤント乳剤 ・ウィードコア1キロ粒剤 ・バイスコープ1キロ粒剤	・ロイヤント乳剤 ・ウィードコア1キロ粒剤 ・バイスコープ1キロ粒剤	・モゲトン粒剤 ・カチボシ1キロ粒剤51 ・サンパンチ1キロ粒剤	

8. 畦畔除草剤

使用上の注意

- ・水田作物の畦畔は、出穂期以降の除草剤散布は禁止します。
- ・風の強い時、または散布後に降雨が予想される場合は使用しないで下さい。
- ・特栽米の畦畔は、除草剤を散布しないで下さい。
- ・違った作物が隣接する畦畔には、両方に登録のある除草剤を使用下さい。
- ・同類成分剤（※1）（※2）の畦畔散布は、合わせて2回までとします。

※大豆ほ場の雑草防除については、p71を参照下さい。

除草剤名	適用雑草	使用量 (10a 当たり)	水稻畦畔	大豆畦畔	大麦畦畔	摘 要
(※1) バスタ液剤	1 年生雑草	500ml (水量100～150ℓ)	○ 2 回以内	○ 3回以内 (収穫28日前まで)	○ 3回以内 (収穫7日前まで)	●雑草の茎葉全体に均一に散布する。 ●土壌表面への散布は効果がない。 ●展着剤の加用は不要。
(※1) ザクサ液剤	1 年生雑草	500ml (水量100～150ℓ)	○ 2 回以内	○ 3回以内 (収穫28日前まで)	×	
ダイロンゾル	1 年生雑草	200ml (水量100ℓ)	○ 1 回以内	○ 1回以内 (収穫30日前まで)	×	●ザクサ液剤と混用して使用。 ●雑草の発生を抑える効果がありザクサと組み合わせることで効果が長く続く。
(※2) ラウンドアップ マックスロード	1 年生雑草	200～500ml 少量散布 (水量25～50ℓ) 通常散布 (水量50～100ℓ)	○ 3 回以内	○ 2 回以内 (収穫前日まで)	○ 3 回以内 (収穫前日まで)	●崩れやすい畦畔では使用しない。 ●散布前に雑草の地上部は刈り払わない。 ●散布後に効果が出るまで7～14日を要するため、この期間内に刈り払ったり再散布しない。
(※2) サンフーロン	1 年生雑草	250～500ml (水量50～100Lℓ)	○ 2 回以内	×	×	
グラスショート 液剤	1 年生雑草 多年生雑草 雑草の生育抑制による刈り払い作業の軽減	300～500ml 少量散布 (水量25ℓ) 通常散布 (水量50～100ℓ)	○ 3 回以内	×	×	●雑草の生育期に茎葉全体に均一にかかるよう散布する。(草丈10cm程度) ●低温下での散布は発現が遅れる。 ●水稻に直接かからないように散布する。
2,4-D アミン塩 (日本芝、 センチピードグラス にも登録あり)	1 年生 広葉雑草 多年生 広葉雑草	100 g (水量100ℓ)	○ 3 回以内	×	×	●薬剤が水稻にかからないようにする。 ●噴霧器などで雑草の茎葉に十分散布する。 ●芝が完全に生え揃った後に散布する。
MCPソーダ塩 (日本芝にも登録あり)	1 年生 広葉雑草 多年生 広葉雑草 スギナ	200～300 g (水量100ℓ)	○ 3 回以内	×	○ 1 回以内 (収穫45日前まで)	●薬剤が水稻にかからないようにする。 ●噴霧器などで雑草の茎葉に十分散布する。 ●芝が完全に生え揃った後に散布する。

畦畔の雑草管理方法

分類	被覆植物 (カバープランツ)	被覆資材 (防草シート・ネット)	除草剤と 生育抑制剤の混用
手法	・センチピードグラス (ティフブレア芝生)、シバザクラ等、植物で畦畔を覆う。	・被覆資材によって光を遮断し雑草の発生、伸長を抑える。	・ <u>ザクサ液剤</u> (除草剤) <u>ダイロンゾル</u> (生育抑制剤) 2剤の組み合わせによる散布。 ・ 土にもかかるようにゆっくりと散布する。
長所	・ 植物で覆うため、景観が損なわれない。 ・ 畦が崩れるのを防ぐ。 ・ カメムシの生息密度を下げる。	・ 被覆後、長期間草刈りや除草剤散布の必要がなくなり、作業面の省力化が図れる。	・ 除草剤による枯死効果、その後生育する雑草の生育抑制効果が1回の作業で行える。 ・ 生育抑制剤は長い有効性があるので、その後の畦畔管理作業の省略化が計れる。 ・ 畦畔除草剤を使っている方なら導入が簡単。
短所	・ 移植してから2～3年は除草作業と並行しなければならない。 ・ その後もある程度の除草管理が必要。 ・ 畦畔除草剤を使用する場合、薬剤に限られる。	・ 初期にかかるコストが大きい。 ・ 被覆後、雑草が生育しないので内部で畦畔が崩れる恐れがある。 ・ 資材が劣化すると、張替えまたは補修が必要になってくる。	・ <u>※特別栽培米の畦畔には使用不可。</u> ・ 生育抑制剤の使用は1回なので、雑草の生育が旺盛な時期にあわせて散布する。 ・ 散布後、強い降雨があると効果が劣る。



センチピードグラス (ティフブレア芝生)

9. 水稻病虫害防除基準 (p 41参照)

(1) 苗箱施薬

全地区

区分	使用農薬	対象品種	対象病虫害	使用時期	使用量
一般	Cs.オリゼリディア 箱粒剤	コシヒカリ 新大正糯	穂枯れ(ごま葉枯れ病菌) いもち病 イネミズゾウムシ イネドロオイムシ ウンカ類 ツマグロヨコバイ イネツトムシ ニカメイチュウ イナゴ類	移植時 移植3日前 ～移植時	50g/箱 高密度に 播種する場合は 50～100g/箱
	ヨーバルプライムEV 箱粒剤	五百万石 雄山錦 山田錦 てんこもり てんたかく	穂枯れ(ごま葉枯れ病菌) 白葉枯病 内穎褐変病 いもち病 紋枯病 イネドロオイムシ イネミズゾウムシ ツマグロヨコバイ ニカメイチュウ コブノメイガ イネツトムシ フタオビコヤガ イナゴ類 イネヒメハモグリバエ	播種時 (覆土前) ～移植当日	
特別 栽培米	フェルテラ 箱粒剤	特別栽培米	ツマグロヨコバイ イネヒメハモグリバエ	移植当日	
			ニカメイチュウ コブノメイガ フタオビコヤガ イネツトムシ イネドロオイムシ イネミズゾウムシ	播種時 (覆土前) ～移植当日	

(2) 本田基本防除

○一般作付・直播栽培区

区分	散布時期	
	1回目	2回目
	早生・中生：穂揃期 晩生：出穂直前	早生・中生：傾穂期 晩生：穂揃期
粉 剤 区	ラブサイドスタークル粉剤DL 4kg/10a (収穫7日前まで)	キラップ粉剤DL 4kg/10a (収穫14日前まで)
液 剤 区	ラブサイドスタークルフロアブル 500倍 150ℓ/10a (収穫7日前まで)	キラップフロアブル 1000倍 150ℓ/10a (収穫14日前まで)
無人航空機区	ラブサイドスタークルフロアブル 4倍 0.8ℓ/10a (収穫7日前まで)	キラップフロアブル 16倍 0.8ℓ/10a (収穫14日前まで)
対 象 虫 病 害 虫	●いもち病 ●カメムシ類 ●ウンカ類	●ウンカ類 ●カメムシ類

○山田錦栽培区

散布時期 区 分	幼穂形成期 7 日後 (穂ばらみ期)	2 回目 出穂10日前 (1 回目の 5 日後)
粒剤・粉剤区	Zボルドー粉剤DL 4 kg/10a (出穂10日前まで)	フジワンラップ粒剤※1 3 kg/10a (収穫30日前まで)
対 象 病 害 虫	● 稲こうじ病 ● 墨黒穂病	● いもち病 ● ウンカ類 ● カメムシ類 ● ニカメイチュウ

※1 フジワンラップ粒剤の注意点

薬剤の効果を
最大限発揮する

1 湛水状態（3cm程度）で田面に均一に散布し、4～5日間は湛水状態を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしない。

散布時期 区 分	1 回目 穂ばらみ期 (幼穂形成期10日後)	2 回目 出穂直前	3 回目 穂揃期
無人航空機区	トライフロアブル 8倍 0.8ℓ/10a (収穫14日前まで)	ラブサイドスタークルフロアブル 4倍 0.8ℓ/10a (収穫7日前まで)	キラップフロアブル 16倍 0.8ℓ/10a (収穫14日前まで)
対 象 病 害 虫	● 稲こうじ病 ● いもち病 ● 穂枯れ	● いもち病 ● ウンカ類 ● カメムシ類	● ウンカ類 ● カメムシ類

○特別栽培米区

散布時期 区 分	穂揃期～傾穂期 (※穂揃期前に散布しない)
粉 剤 区	ラブサイドスタークル粉剤DL 4 kg/10a (収穫7日前まで)
液 剤 区	ラブサイドスタークルフロアブル 500倍 150ℓ/10a (収穫7日前まで)
無人航空機区	ラブサイドスタークルフロアブル 4倍 0.8ℓ/10a (収穫7日前まで)
対 象 病 害 虫	● いもち病 ● ウンカ類 ● カメムシ類

・紋枯病が出た場合は『バリダシン粉剤DL・バリダシン液剤5・バリダシンエアー』が使用可能

(3) 本田随時防除

※パダン粒剤4の引渡には印鑑が必要です。

対象病害虫	使用農薬	使用時期	使用量	収穫前日数
イネミズゾウムシ イネゾウムシ イネドロオイムシ	トレボン粒剤	5月下旬～6月上旬	3kg/10a	21日前まで 3回以内
ニカメイチュウ	パダン粒剤4※ (劇物)	6月中旬	3～4kg /10a	30日前まで 6回以内
いもち病	ビーム粉剤DL	葉いもち：発生がみられたらすぐに	4kg/10a	7日前まで 3回以内
紋枯病	バリダシン粉剤DL	穂ばらみ期 早生 7月初旬 中生 7月中旬 晩生 7月下旬	4kg/10a	14日前まで 5回以内
稲こうじ病	Zボルドー粉剤DL	穂ばらみ期 (出穂10～20日前まで)	4kg/10a	(出穂10日前まで)
フタオビコヤガ(イネアオムシ) カメムシ類 ウンカ類	トレボン粉剤DL	7月下旬～8月上旬 穂揃期～傾穂期 7月下旬～8月上旬	3kg/10a	7日前まで 3回以内

◎水稲病害虫防除効果を高める方法

- 紋枯病、ウンカ、カメムシ類の防除は、薬剤が根元まで付着するように散布する。
- 液剤は、希釈倍率と散布薬量をしっかりと守る。
- 粒剤は散布後4～5日間湛水状態を保ち、7日間は落水や掛け流ししない。

◎農薬散布作業の注意点

- 散布液の調整や散布時は、マスク、手袋、メガネ、帽子等の防護具を着用する。
- 薬液は散布面積に応じて必要量に調整し、作業後残らないようにする。
- 散布作業は日中の暑い時は避けて、朝夕の涼しい時に行う。
- 散布中の喫煙、飲食は行わない。やむを得ない場合は、手や顔を十分洗い、うがいを
する。
- 作業中に頭痛、めまい等体調に異常を感じたら、ただちに作業をやめる。
- 作業後、必ず手や足はもちろん、全身を石鹸でよく洗う。作業に用いた衣類は他の洗濯物と区別して洗濯する。
- 作業した当日は飲酒を控え、早く就寝する。

水稻の主要病害虫

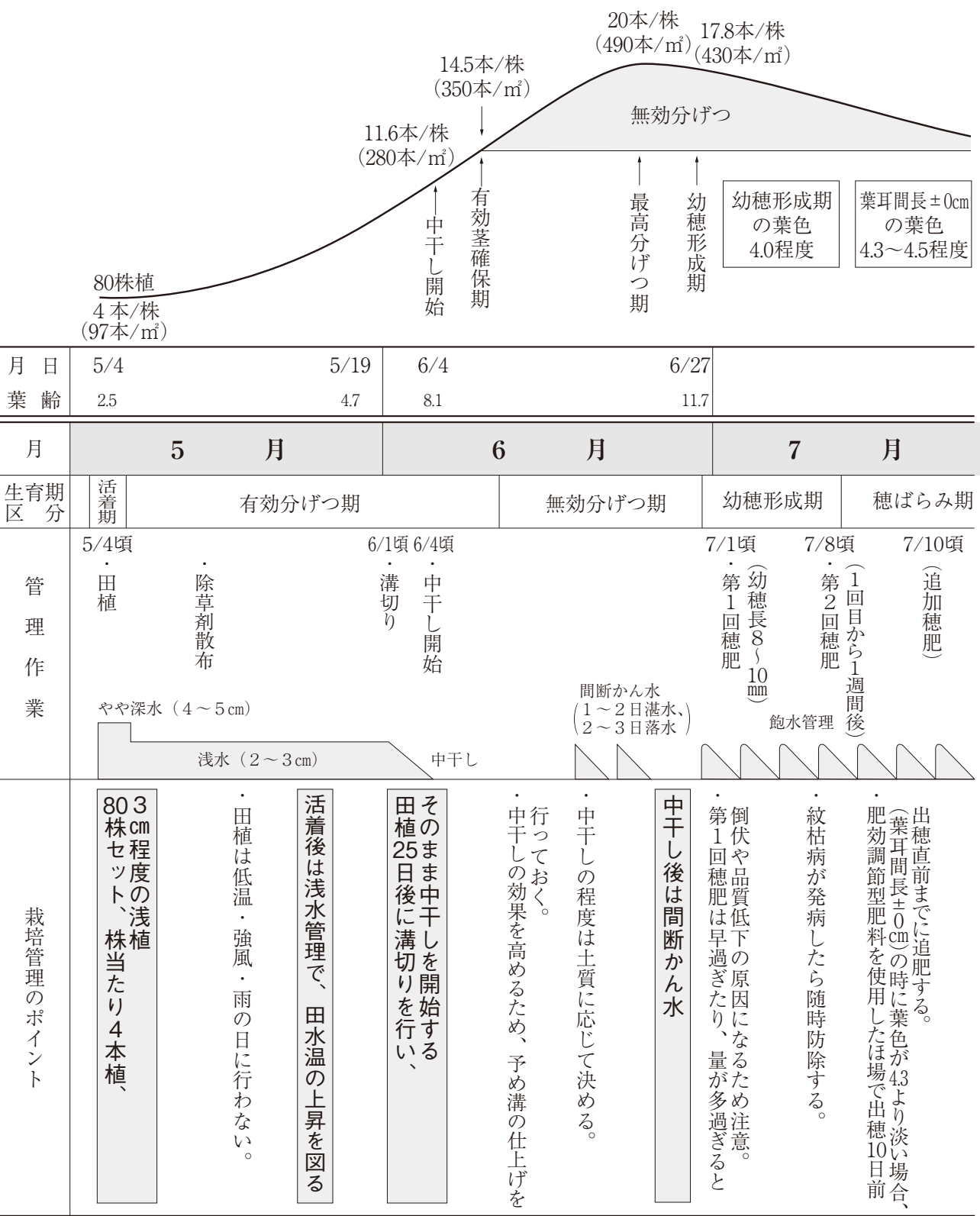
	いもち病		紋枯病	稲こうじ病
				     
特徴	夏期に低温や曇雨天が頻くと発生しやすい。発病部位によって苗いもち、葉いもち、穂いもち、枝梗いもちなどと呼ばれている。葉いもちの病斑は褐色、紡錘形で、発生が多いと罹病株から周囲へ広がる「すり込み」状になる。出穂期以降は、白穂や稔実不良になる。		幼穂形成期頃より発生し、高温年に多い。窒素過多の栽培で茎数が多い、株間の湿度が高まると発生しやすい。前年多発した場合は発生しやすい。病斑は周辺部が黒褐色、内部が淡褐色～灰色の円形で、最初下部の葉鞘にでき、上位へと進展する。ひどくなると葉や穂も枯らし、収量・品質が低下する。	出穂期にかけて低温、日照不足の年や風通しの悪い所、遅植え、晩生種に発生が多い。乳熟期頃から黄緑色の小さな塊が現れ、大きくなると緑黒色になり粉全体を被う。発生が多いと品質低下を招く。
	イネゾウムシ		フタオビコヤガ (イネアオムシ)	ニカメイチュウ (ニカメイガ)
			 	 
特徴	体長：5mm(イネゾウムシ成虫) 3～4mm(イネミズゾウムシ成虫) イネゾウムシの成虫は田植後の葉に大きな穴をあけ、イネミズゾウムシの食害痕は白い筋状となる。幼虫は根を食害する。		体長：20mm (老齢幼虫) 加害部位：葉 年2～4回発生 / 蛹越冬 稲わら中で蛹で越冬し、6～7月に最も多く発生する。シャクトリムシのように歩き、中齢以降の幼虫は葉縁からハサミで切ったように食害する。	体長：20～25mm (老齢幼虫) 加害部位：葉、茎 年2回発生 / 幼虫越冬 年2回の発生で、幼虫が茎に食入する。第1世代幼虫の被害はざや枯れ、流れ葉、心枯れとなる。第2世代では出すくみ、白穂となる。
	アカスジカスミカメ		アカヒゲホソミドリカスミカメ	クモヘリカメムシ
			 	
特徴	体長：4.5～6mm 加害部位：頂部、側部 (割れ粉) 年4～5回発生 / 卵越冬 成虫はよく飛翔し、稲、とうもろこし、イネ科牧草を吸汁加害する斑点米カメムシ類の重要種。開花期から開順後間もない時期の穂と割れ粉を加害する。		体長：5～6mm 加害部位：頂部 (玄米)、側部 (割れ粉) 年4～5回発生 / 卵越冬 成虫はよく飛翔し、夏場に発生する第2世代成虫が出穂期の穂と割れ粉を加害する。斑点米を発生させるカメムシ類の重要種。	体長：15～17mm 行動：活発に飛翔する 加害部位：全面 年2回発生 / 成虫越冬 エノコログサ、メヒシバおよびヒエなどのイネ科雑草を好む。イネの穂を吸汁して斑点米を発生させる。

近年
山際で
増加

稲・大豆・大麦編

10. 城端・井口地区の品種別栽培基準

(1) 五百万石



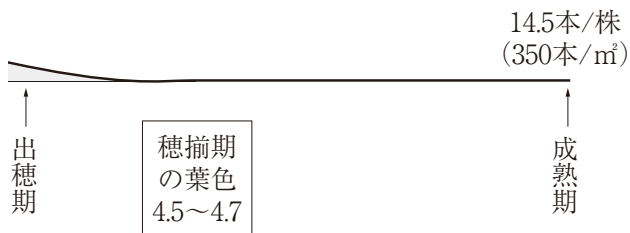
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥（追肥3号）	
					肥料名	施肥量	1回目（幼穂8～10mm）	2回目（1週間後）
五百万石	移植	側条	肥効調節型	100	LPs五百万石専用	35	—	—
		側条	分施	100	基肥206	30	12	15

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	510kg
m ² 当たり穂数	350本
1 穂粒数	73粒
m ² 当たり粒数	25,600粒
登熟歩合	75%
玄米千粒重	26.6 g



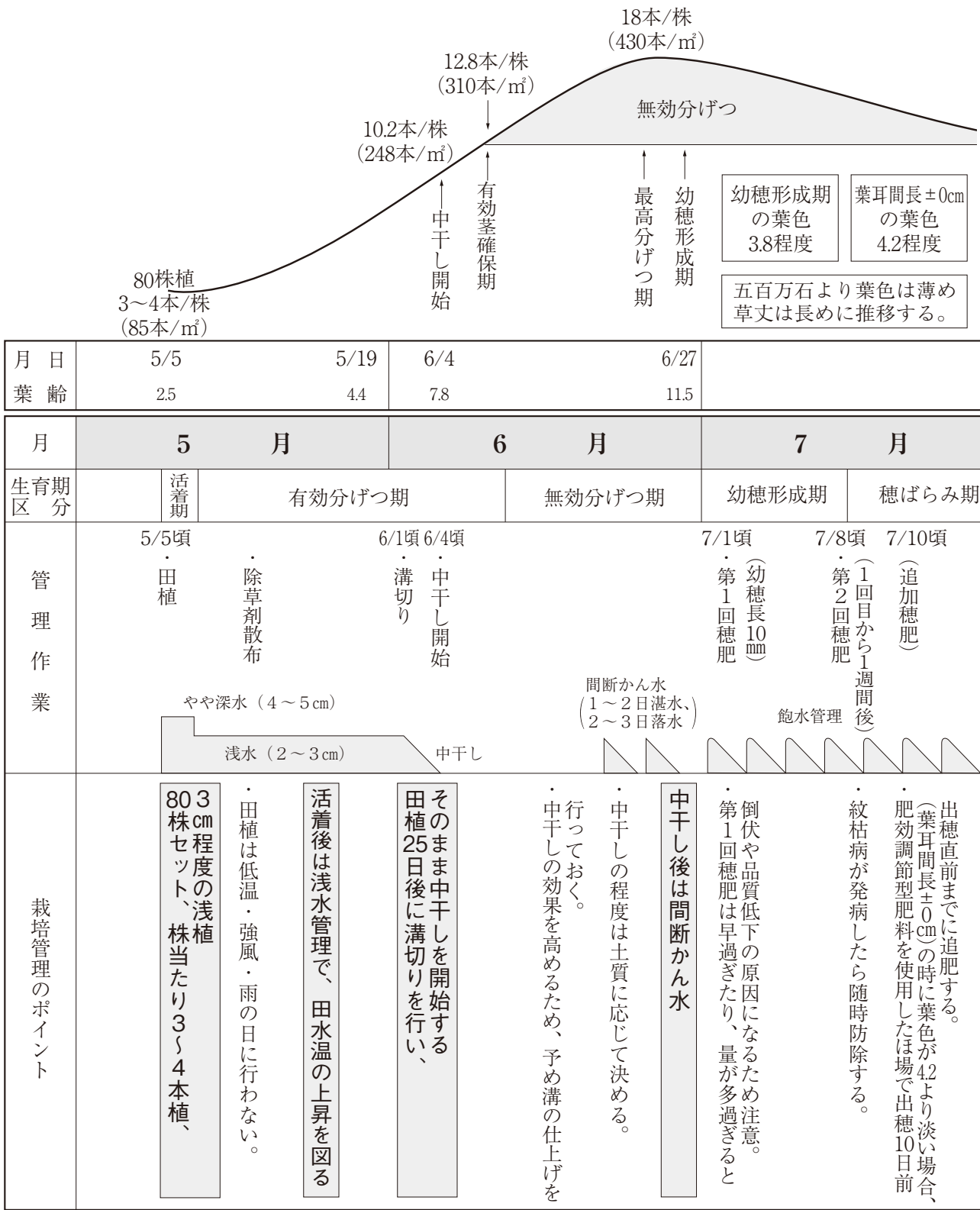
7/17 14.1	8/23		
	8 月		9 月
	登 熟 期		
7/23頃 (穂揃期)	7/30頃 (傾穂期)	刈取り	・ 耕起 ・ 土づくり資材散布
・ スタークル粉剤DL ・ ラブサイド	・ キラップ粉剤DL	・ 間断かん水	
湛水管理			
・ 稲の生育状況を確認し、必要に応じて水管理を行う。 ・ 高温下での登熟のため、刈遅れると胴割米が発生する。 ・ 稲の黄化率85%程度が刈取適期 ・ 2回の基本防除でいもち病・斑点米の防止 ・ 出穂期から20日間は水を切らず、湛水状態を保つ ・ 刈取り5～7日前までは、間断かん水を行う ・ 稲ばらみ期から穂揃期までは水分不足に注意。			

(単位：kg/10a)

穂肥(追肥3号)	成分計 (土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
(10)	7.7 (9.2)	9.2 (9.5)	9.9 (11.4)
—	7.7	11.8	13.9

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

(2) 雄山錦



施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥（追肥3号）	
					肥料名	施肥量	1回目（幼穂10mm）	2回目（1週間後）
雄山錦	移植	側条	肥効調節型	100	LPs五百万石専用	30	－	－
		側条	分施	100	基肥206	30	10	10

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	550kg
m ² 当たり穂数	310本
1 穂 粒 数	75粒
m ² 当たり粒数	23,300粒
登 熟 歩 合	82%
玄 米 千 粒 重	28.5 g



7/18	8/24		
13.9			
	8 月	9 月	
	登 熟 期		
7/24頃 (穂揃期)	7/31頃 (傾穂期)		
・ スタークル粉剤DL ラブサイド	・ キラップ粉剤DL		
湛水管理		間断かん水	
出穂期から20日間は水を切らず、湛水状態を保つ		刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う	
2回の基本防除でもち病・斑点米の防止		籾の黄化率85%程度が刈取適期	
特に入水。特にフェーン現象が予想される場合は早め穂ばらみ期から穂揃期までは水分不足に注意。		が發生する。 高温下での登熟のため、刈遅れると胴割米	
		・ 土づくり資材散布	

(単位：kg/10a)

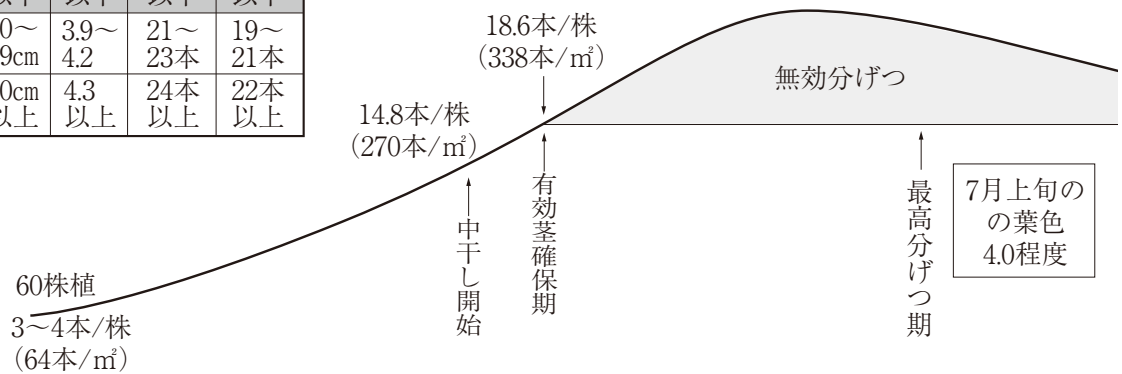
穂肥(追肥3号)	成分計 (土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
(10)	6.6 (8.1)	8.6 (8.9)	9.2 (10.7)
—	6.6	11.6	12.8

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

(3) 山田錦

<幼穂形成期生育量の目安>

	草 丈	葉 色	株当たり茎数	
			60株値	70株値
適 正	80cm以下	3.8以下	20本以下	18本以下
やや旺盛	80～89cm	3.9～4.2	21～23本	19～21本
過 剰	90cm以上	4.3以上	24本以上	22本以上



月 日	5/10		5/28	6/10			
葉 齢	2.5		5.2	7.7			
月	5 月			6 月		7 月	
生育期区分	活着期	有効分げつ期			無効分げつ期		
管 理 作 業	5/10頃 ・田植 ・除草剤散布		6/2頃 6/10頃 ・溝切り ・中干し開始				
	やや深水（4～5cm） 		間断かん水 (1～2日 湛水 2～3日 落水) 				
栽培管理のポイント	603cm程度の浅植 株セツト、株当たり3ゝ4本植、 ・田植は低温・強風・雨の日に行わない。		活着後は浅水管理で、田水温の上昇を図る		そのまま中干しを開始する 田植25日後に溝切りを行い、 ・中干しの効果が高めるため、予め溝の仕上げを行っておく。 ・中干しの程度は土質に応じて決める。		
					中干し後は間断かん水 葉色が4.0より淡い場合は、追肥する。 ・7月上旬頃まで葉色4.0を維持。		

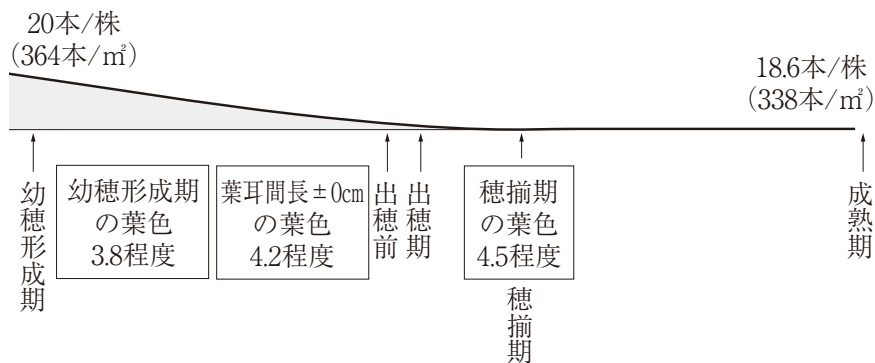
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥（追肥3号）	
					肥料名	施肥量	1回目(15mm)	2回目(1週間後)
山田錦	移植	側条	分施	100	基肥206	30	10	12

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	400kg
m ² 当たり穂数	338本
1 穂 粒 数	55粒
m ² 当たり粒数	18,600粒
登 熟 歩 合	75%
玄 米 千 粒 重	28.5 g



7/26	8/17	10/2
13.5	15.5	

8 月	9 月	10 月
-----	-----	------

幼穂形成期	穂ばらみ期	登 熟 期	
-------	-------	-------	--

8/2頃 8/5頃 8/7頃 8/12頃 (出穂前) ・Zボルドー粉剤DL 飽水管理	8/7頃 (幼穂長15mm) ・第1回穂肥 ・フジワラップ粒剤	8/12頃 (1回目から1週間後) ・第2回穂肥	刈取り ・土づくり資材散布
湛水管理		落水を急がないように	

稲こうじ病・防除

と倒伏や品質低下の原因になるため注意。
・第1回穂肥は早過ぎたり、量が多過ぎる

基本防除でいもち病・斑点米の防止

早めの入水。
特にフェーン現象が予想される場合は
・穂ばらみから穂揃期までは水分不足に注意

湛水状態を保つ
出穂期から20日間は水を切らず、

刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う

籾の黄化率85%〜90%程度が刈取適期

(単位 : kg/10a)

成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
6.9	11.7	13.1

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

※倒伏しやすい圃場は減肥する

基肥 206	25〜30 kg /10a
--------	---------------

(4) 直播栽培山田錦

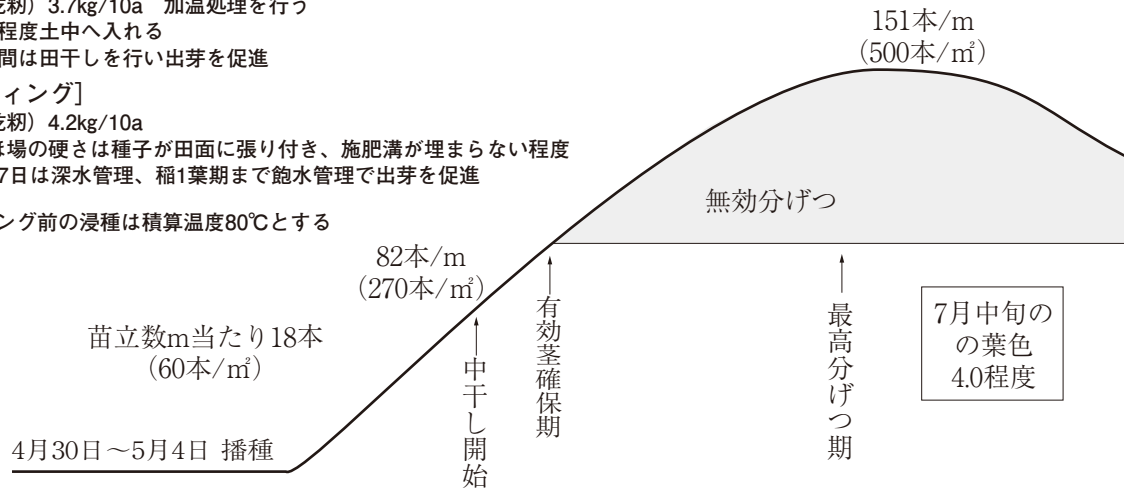
※1 [カルパーコーティング]

- ・播種量（乾籾）3.7kg/10a 加温処理を行う
- ・種子は1cm程度土中へ入れる
- ・播種後1週間は田干しを行い出芽を促進

※2 [鉄コーティング]

- ・播種量（乾籾）4.2kg/10a
- ・播種時のほ場の硬さは種子が田面に張り付き、施肥溝が埋まらない程度
- ・播種後5～7日は深水管理、稲1葉期まで飽水管理で出芽を促進

※コーティング前の浸種は積算温度80℃とする



月 日	5/4	5/27	6/11	
葉 齢		3.4	7.0	
月	4 月	5 月	6 月	7 月
生育期区分	播種期	出芽苗立期	有効分げつ期	無効分げつ期
管 理 作 業	5/4頃 ・播種 ・コーティング	鉄コ （初期除草剤） ・フライオリティ1キロ粒剤 カルパー ・除草剤散布 （フライオリティ1キロ粒剤） 浅水（2～3cm）	6月上旬・中旬 ・中干し開始 ・溝切り 6/20頃 （オリゼメート1キロ粒剤）	間断かん水 （1～2日湛水、 2～3日落水）
栽培管理のポイント	・代掻きはねりすぎないように均平に仕上げる。 播種は上記 ※1、※2参照	・水管理および除草剤体系はP32、33を参照	・中干しに入る ・目標茎数（82本/m）になったら速やかに6月上旬に溝切りを行う。	・オリゼメート1キロ粒剤で、葉いもちの予防コーティング時に塗沫処理をしていない場合は、 中干し後は間断かん水 ・葉色が4.0より淡い場合は、追肥する。 ・7月中旬までは葉色4.0を維持。

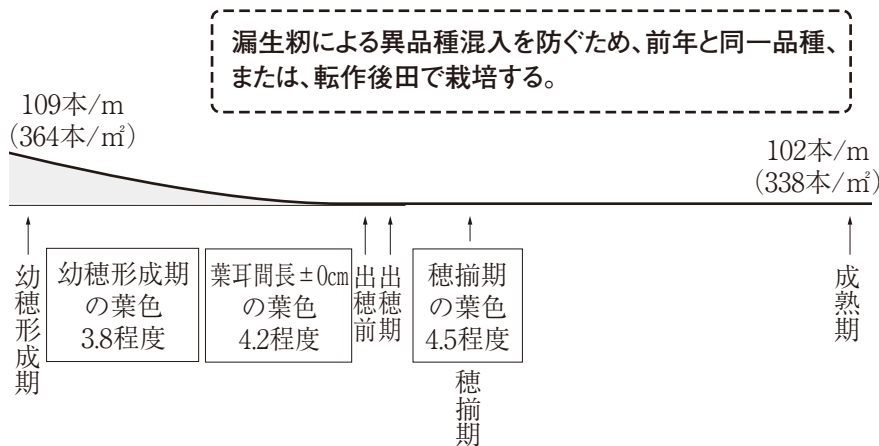
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥（追肥3号）	
					肥料名	施肥量	1回目(幼穂15mm)	2回目(1週間後)
山田錦	直播	側条	分施	100	基肥206	20	10	10

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目安
10 a 当たり収量	360kg
m ² 当たり穂数	338本
1 穂粒数	55粒
m ² 当たり粒数	18,600粒
登熟歩合	67%
玄米千粒重	29.0 g



8/2	8/25		10/10
13.0	14.7		

8 月	9 月	10 月
-----	-----	------

幼穂形成期	穂ばらみ期	登熟期	
-------	-------	-----	--



稲こうじ病・防除 ・倒伏や品質低下の原因になるため注意。 ・第1回穂肥は早過ぎたり、量が多過ぎると	基本防除でいもち病・斑点米の防止 ・特にフェーン現象が予想される場合は早めの入水。 ・穂ばらみ期から穂揃期は、水分不足に注意。	湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、	刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う	籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期
---	---	-------------------------------------	-----------------------------	---------------------------

(単位：kg/10a)

成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
5.4	9.6	11.2

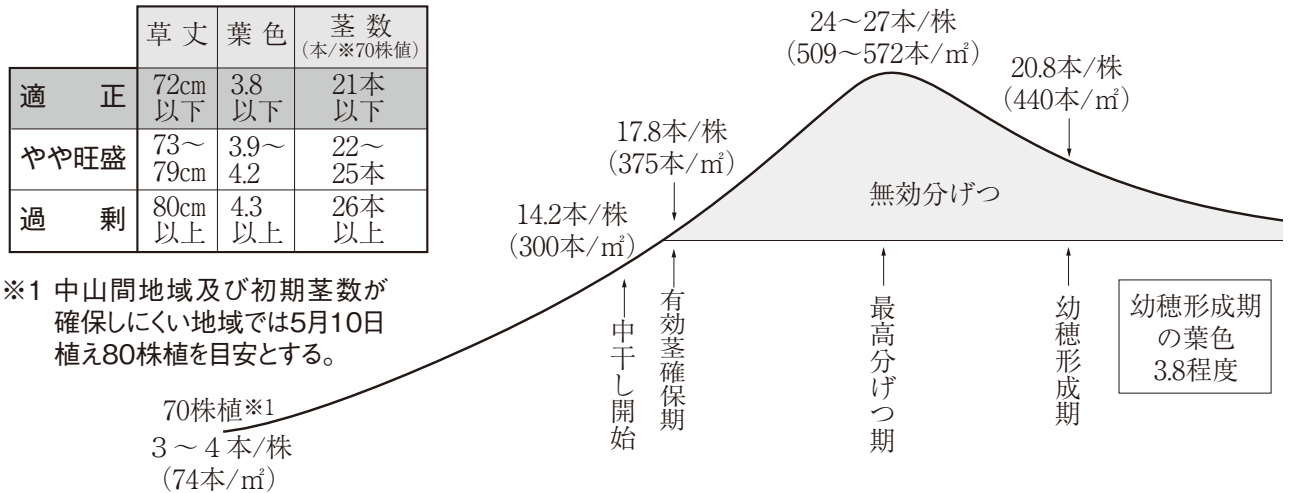
※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

(5) コシヒカリ

<幼穂形成期生育量の目安>

	草 丈	葉 色	茎 数 (本/※70株値)
適 正	72cm 以下	3.8 以下	21本 以下
やや旺盛	73～ 79cm	3.9～ 4.2	22～ 25本
過 剰	80cm 以上	4.3 以上	26本 以上

※1 中山間地域及び初期茎数が
確保しにくい地域では5月10日
植え80株植を目安とする。



月 日	5/11		5/29		6/11		7/10	
葉 齢	2.5		5.4		7.7		12.0	
月	5 月				6 月		7 月	
生育期 区 分		活 着 期	有効分げつ期			無効分げつ期		幼穂形成期
管 理 作 業	5/11頃※1		6/9頃 6/11頃			7/17頃		
	・田植 ・早期追肥 ・除草剤散布		・溝切り ・中干し開始			・第1回穂肥 (幼穂長15mm)		
栽培管理のポイント	やや深水（4～5cm）		中干し			間断かん水 (1～2日湛水、 2～3日落水)		飽水管理
	浅水（2～3cm）							
栽培管理のポイント	3cm程度の浅植 70株セット、株当たり3～4本植、		活着後は浅水管理で、田水温の上昇を図る ・田植は低温・強風・雨の日に行わない。 田植後は5月15日頃を中心に			そのまま中干しを開始する 田植25日後に溝切りを行い、 中干しの効果は高めるため、予め溝の 仕上げを行っておく。 ・中干しの程度は土質に応じて決める。		ため注意。 ぎると倒伏や品質低下の原因になる 第1回穂肥は早過ぎたり、量が多過
						中干し後は間断かん水		

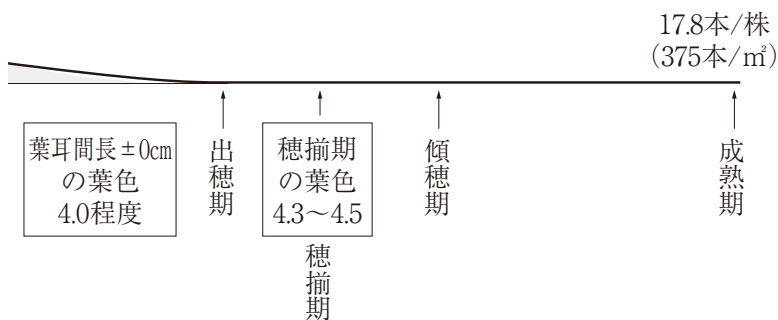
施肥設計

品 種	栽培 方法	施肥 方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		早 期 追 肥 (追肥3号)	穂肥 (追肥3号)	
					肥料名	施肥量		1回目 (幼穂15mm)	2回目 (1週間後)
コシヒカリ	移植	側条	※2 肥効調節型	100	Jコートコシヒカリ1号	30	—	—	—
				100	Jコートコシヒカリ2号	26	—	—	—
		側条	分施	100	基肥206	25	—	10	12
		全層	分施	100	基肥206	30	15	10	12

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	540kg
m ² 当たり穂数	375本
1 穂粒数	75粒
m ² 当たり粒数	28,100粒
登熟歩合	85%
玄米千粒重	22.7 g



		8/1	8/6	8/13	9/8		
		14.0					
		8月			9月		10月
穂ばらみ期		登熟期					
7/24頃 ・第2回穂肥 (1回目から1週間後)		8/6頃 (穂揃期) ・スタール粉剤DL ・ラブサイド	8/13頃 (傾穂期) ・キラップ粉剤DL		・刈取り		・耕起 ・土づくり資材散布
				間断かん水			
		湛水管理					
早めの入水。 特にフェーン現象が予想される場合は に注意。 ・穂ばらみ期から穂揃期までは水分不足 出穂直前までに追肥する。 (葉耳間長±0㎝)の時に葉色が4.0より淡い場合、 肥効調節型肥料を使用したほ場で出穂10日前		2回の基本防除でもち病・斑点米の防止		湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、 刈取り5～7日前までは、間断かん水 を行う		籾の黄化率85～90%程度が刈取適期 ・過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・水分14.5～15.0%に仕上げる。	

(単位：kg/10a)

穂肥(追肥3号)	成分計 (土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
(7)	6.3 (7.4)	7.7 (7.9)	10.4 (11.5)
(7)	5.5 (6.6)	7.3 (7.5)	9.7 (10.8)
—	6.3	10.7	12.3
—	9.2	12.1	15.4

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

- ・早期追肥は、田植7日後に散布する。
- ・昨年秋又は今年春にパワーシリカを散布しない場合は、6月25日頃にエスアイ加里らくだを15kg/10 a 散布する。

※2 コシヒカリ (移植) の肥効調節型基肥は、土壌地帯で使い分ける

1号	黒ボク、砂質田 (川沿い)	30kg/10a
2号	壤質、粘質田 (一般田)	26kg/10a

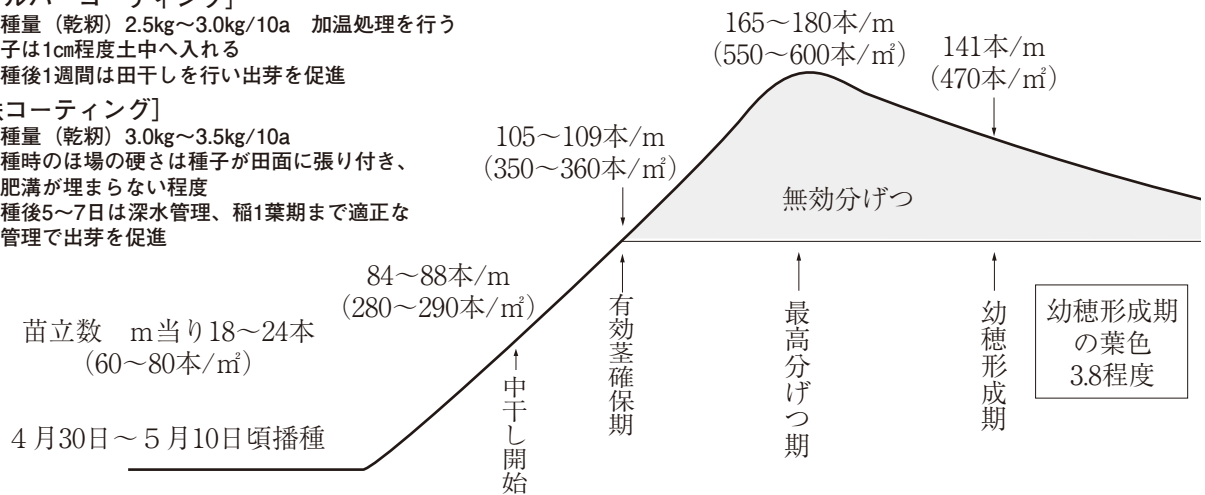
(6) 直播栽培コシヒカリ

※1 [カルパーコーティング]

- ・播種量(乾籾) 2.5kg~3.0kg/10a 加温処理を行う
- ・種子は1cm程度土中へ入れる
- ・播種後1週間は田干しを行い出芽を促進

※2 [鉄コーティング]

- ・播種量(乾籾) 3.0kg~3.5kg/10a
- ・播種時のほ場の硬さは種子が田面に張り付き、施肥溝が埋まらない程度
- ・播種後5~7日は深水管理、稲1葉期まで適正な水管理で出芽を促進



月 日	5/1		5/26		6/9		7/13						
葉 齢			3.6		6.7		11.8						
月	4 月	5 月		6 月		7 月							
生育期区分		播種期	出芽苗立期	有効分げつ期	無効分げつ期		幼穂形成期						
管 理 作 業	5/1頃 ・播種 ・コーティング	鉄コ (ブライオリティ1キロ粒剤) 初期除草剤	カルパー (ブライオリティ1キロ粒剤) ・除草剤散布	6月上旬 ・溝切り ・中干し開始	6月中旬 ・中期剤散布	6/20頃 (オリゼメート1キロ粒剤)	7/22頃 (幼穂長15mm) ・第1回穂肥						
							間断かん水 (1～2日湛水、 2～3日落水) 飽水管理						
			浅水 (2～3cm)										
栽培管理のポイント	・代掻きはねりすぎないように均平に仕上げる。 播種は上記 ※1、※2参照			・速やかに中干しに入る。 ・目標茎数(84～88本/m)又は6.7葉齢になったら 6月上旬に溝切りを行う。		オリゼメート1キロ粒剤で、葉いもちの予防 コーティング時に塗沫処理をしていない場合は、 中干し後は間断かん水		・生育が旺盛な場合は幼穂長20ミリとする。					
	・水管理および除草剤体系は P32、33を参照							<幼穂形成期の目安> <table><tr><td>草 丈</td><td>葉 色</td><td>茎 数 本/m² (本/m)</td></tr><tr><td>70cm 以下</td><td>3.7 以下</td><td>470 (141) 以下</td></tr></table>	草 丈	葉 色	茎 数 本/m ² (本/m)	70cm 以下	3.7 以下
草 丈	葉 色	茎 数 本/m ² (本/m)											
70cm 以下	3.7 以下	470 (141) 以下											

施肥設計

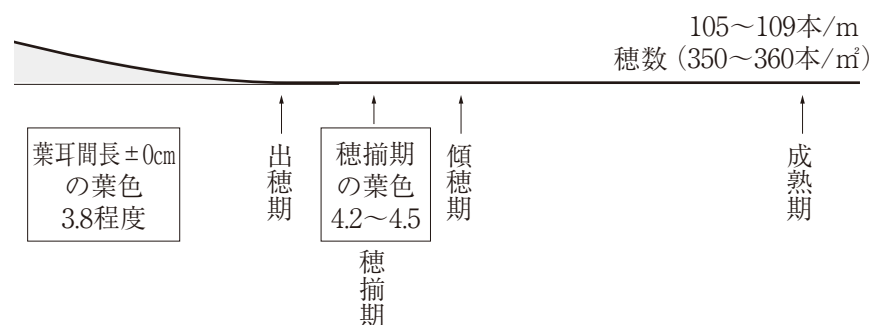
品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥(追肥3号)	
					肥料名	施肥量	1回目 (幼穂15mm)	2回目 (1週間後)
コシヒカリ	直播	側条(カルパー)	肥効調節型	100	LPss直播コシヒカリ	30	—	—
		側条(鉄コーティング)	肥効調節型	100	LPss直播コシヒカリ	25	—	—
		側条	分施	100	基肥206	25	10	10

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目 標 値	
	カルパー	鉄コ
10a当たり収量	510kg	470kg
m ² 当たり穂数	360本 (m間109本)	350本 (m間105本)
1 穂 粒 数	75粒	75粒
m ² 当たり粒数	27,000粒	26,300粒
登 熟 歩 合	84%	80%
玄米千粒重	22.5 g	22.5 g

漏生籾による異品種混入を防ぐため、前年と同一品種、または、転作後田で栽培する。



	8/3 13.7	8/7	8/14	9/15	
	8 月			9 月	10 月
	穂ばらみ期	登 熟 期			
7/29頃 ・第2回穂肥 (1回目から1週間後)	8/7頃 (穂揃期) ・スタークル粉剤DL ・ラブサイド	8/14頃 (傾穂期) ・キラップ粉剤DL	・刈取り	・土づくり資材散布	
間断かん水					
湛水管理					
出穂直前までに追肥する。 (葉耳間長±0cm)の時に葉色が3.8より淡い場合、 ・肥効調節型肥料を使用した場合は出穂10日前 ・特にフエーン現象が予想される場合は早めの入水。 ・穂ばらみ期から穂揃期は、水分不足に注意。 湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、 2回の基本防除でもち病・斑点米の防止 刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う 籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期 ・過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・水分14.5〜15.0%に仕上げる。					

(単位: kg/10a)

穂肥(追肥3号)	成分計(土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N(窒素)	P(りん酸)	K(カリ)
(7)	6.3(7.1)	9.2(9.4)	9.2(10.3)
(7)	5.3(6.4)	8.5(8.7)	8.5(9.6)
—	6.0	10.6	12.0

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

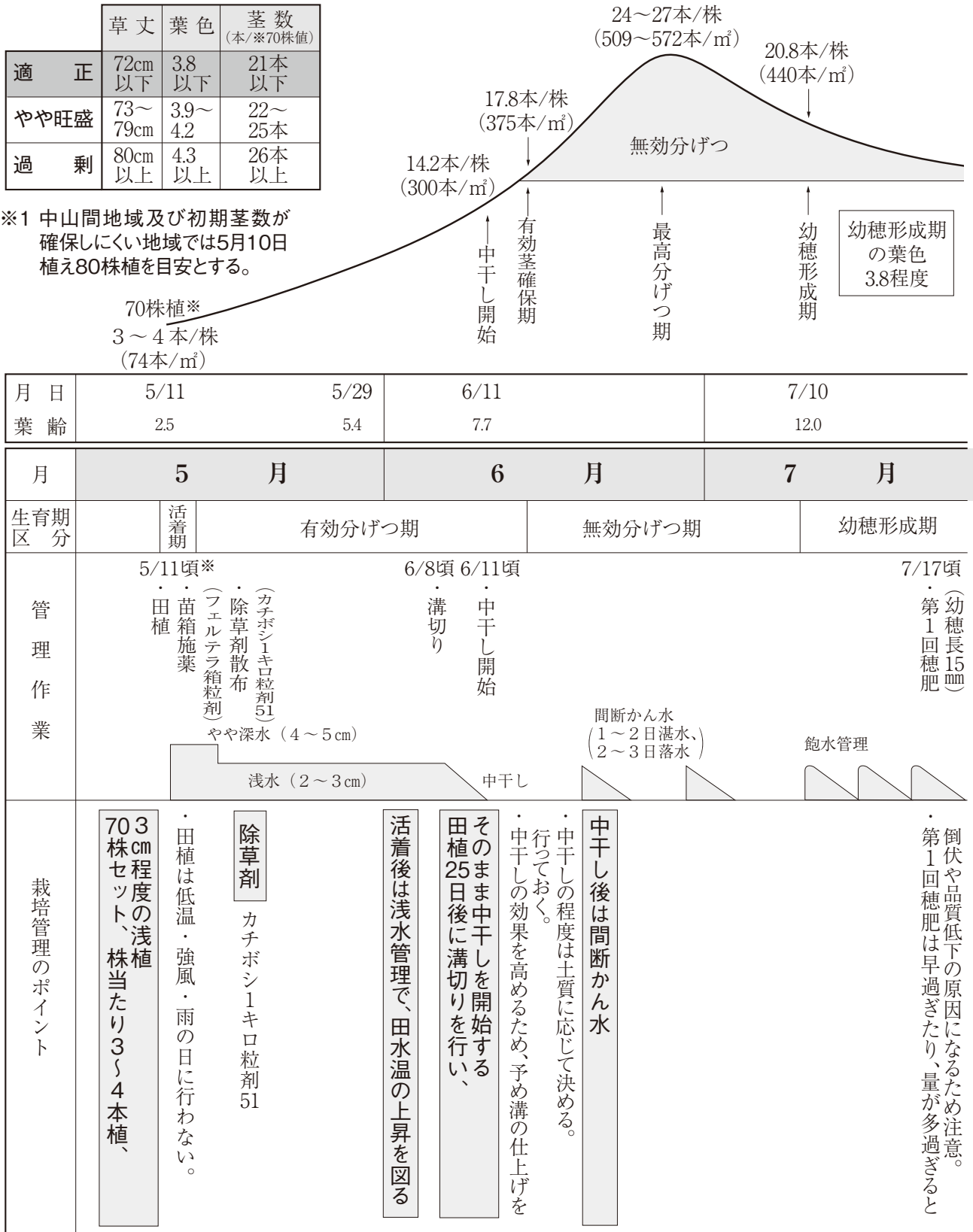
・昨年秋又は今年春にパワーシリカを散布しない場合は、
6月28日頃にエスアイ加里らくだを15kg/10a散布する。

(7) 特別栽培米(減農薬、減化学肥料)

<幼穂形成期生育量の目安>

	草 丈	葉 色	茎 数 (本/※70株値)
適 正	72cm 以下	3.8 以下	21本 以下
やや旺盛	73～ 79cm	3.9～ 4.2	22～ 25本
過 剰	80cm 以上	4.3 以上	26本 以上

※1 中山間地域及び初期茎数が
確保しにくい地域では5月10日
植え80株植を目安とする。



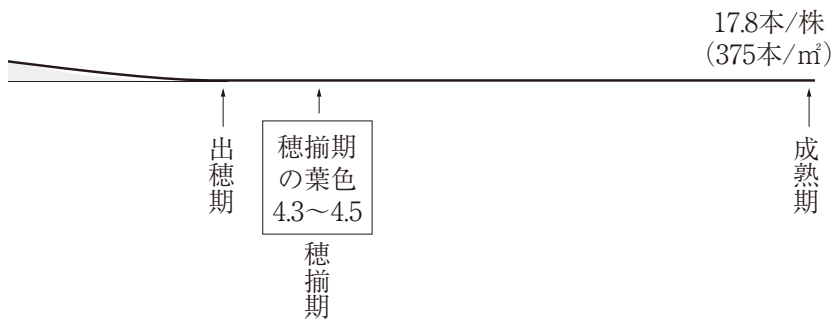
施肥設計

品 種	栽培 方法	施肥 方法	施肥体系	土づくり資材	基 肥		穂肥 (なんと米有機穂肥)	
					肥料名	施肥量	1回目(幼穂15mm)	2回目(1週間後)
特別栽培米 コシヒカリ	移植	側条	分施	パワーシリカ100kg 稲わら 800kg 完熟堆肥 2m³	なんと米有機基肥	25～30	10	12～15

コシヒカリ【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	540kg
m ² 当たり穂数	375本
1 穂粒数	75粒
m ² 当たり粒数	28,100粒
登熟歩合	85%
玄米千粒重	22.7 g



		8/1 14.0	8/6	9/8		
		8月		9月		10月
穂ばらみ期		登熟期				
7/24頃 ・ 1回目から1週間後 ・ 第2回穂肥		8/6頃 (穂揃期) ・ スタークル粉剤DL ・ ラブサイド		・ 刈取り		・ 耕起 ・ 土づくり資材散布 ・ 堆肥散布(2㎡)
		湛水管理				
の 入水。 特にフェーン現象が予想される場合は早め穂ばらみ期から穂揃期までは水分不足に注意。		基本防除でいもち病・斑点米の防止		湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、		刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う
				籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期		広域カントリーへ全量出荷

(単位：kg/10a)

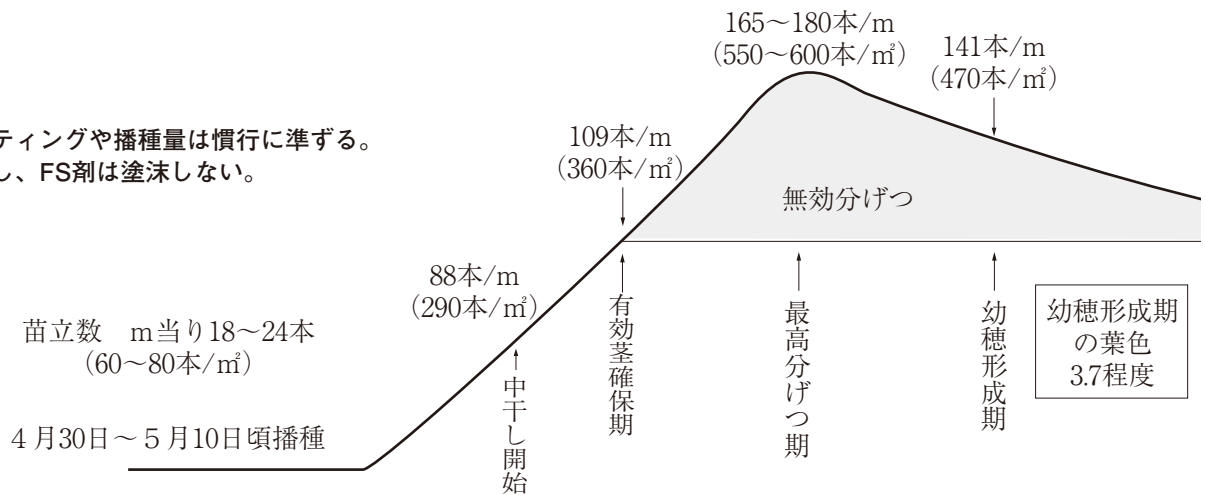
成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
4.6～5.4	7.4～7.9	9.2～9.9

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

・ 畔畦には除草剤を使用しない。

(8) 直播特別栽培米(減農薬、減化学肥料)

※コーティングや播種量は慣行に準ずる。
ただし、FS剤は塗沫しない。



月 日	5/1		5/26	6/9	7/13	
葉 齢			3.6	6.7	11.8	
月	4 月	5 月		6 月		7 月
生育期 区 分		播種期	出芽苗立期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期
管 理 作 業	5/1頃 ・播種 ・コーティング		6月上旬 ・中干し開始 ・溝切り		7/22頃 ・第1回穂肥 (幼穂長15mm)	
			(カチボシ1キロ粒剤51) 除草剤散布		間断かん水 (1～2日湛水、 2～3日落水) 飽水管理	
栽培管理のポイント	浅水（2～3cm）					
	・代掻きはねりすぎないように均平に仕上げる。		速やかに中干しに入る。 ・目標茎数（88本／㎡）又は6.7葉齢になったら ・6月上旬に溝切りを行う。 散布後は深水とし、7日間は止水とする。 ※稲1葉期以降散布 除草剤 カチボシ1キロ粒剤51		中干し後は間断かん水 生育が旺盛な場合は幼穂長20ミリとする。 ヒエクリーンバサグラン粒剤散布 ・草が残った場合は、イネ3葉期以降に	

施肥設計

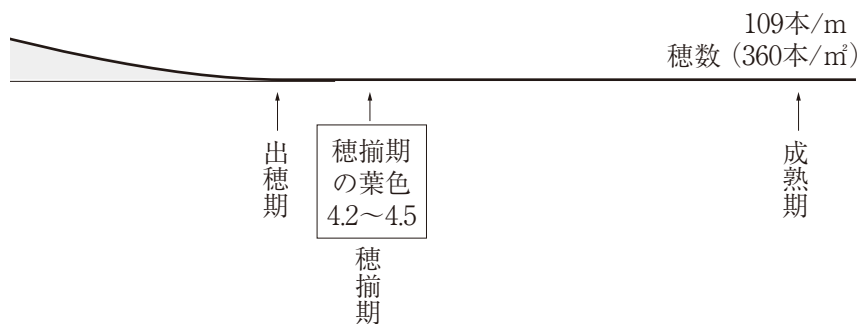
品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材	基 肥		穂肥 (なんと米有機穂肥)	
					肥料名	施肥量	1回目(幼穂15mm)	2回目(1週間後)
特別栽培米 コシヒカリ	直播	側条	分施	パワーシリカ100kg 稲わら 800kg 完熟堆肥 2m³	なんと米有機基肥	15~20	10	12~15

コシヒカリ【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	510kg
m ² 当たり穂数	360本 (m間109本)
1 穂 粒 数	75粒
m ² 当たり粒数	27,000粒
登 熟 歩 合	84%
玄 米 千 粒 重	22.5 g

漏生籾による異品種混入を防ぐため、前年と同一品種、または、転作後田で栽培する。



	8/3	8/7	9/15	
	13.7			
	8 月		9 月	10 月
	穂ばらみ期	登 熟 期		
	7/29頃 ・ 1回目から1週間後 ・ 第2回穂肥	8/7頃 (穂揃期) ・ スタークル粉剤DL ・ ラブサイド	・ 刈取り	・ 耕起 ・ 土づくり資材散布
	湛水管理		間断かん水	
・ 紋枯病が発病したら随時防除する。	・ 特にフエーン現象が予想される場合は早めの入水。 ・ 穂ばらみ期から穂揃期は、水分不足に注意。		基本防除でいもち病・斑点米の防止	湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らさず、
			刈取り5～7日前までは、間断かん水を行う	籾の黄化率85～90%程度が刈取適期
				広域カントリーへ全量出荷

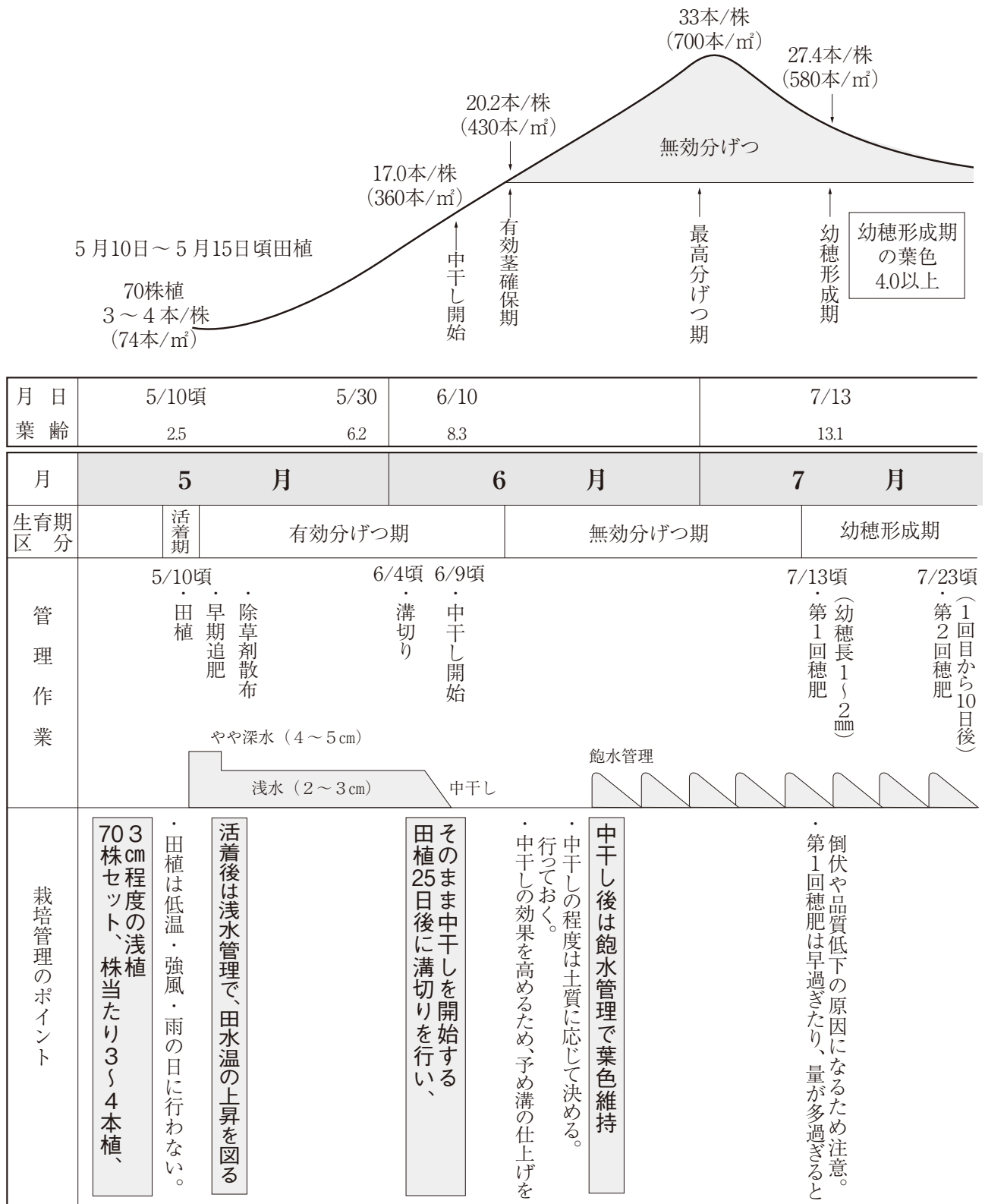
(単位：kg/10a)

成分計（土づくり資材含む）		
N（窒素）	P（りん酸）	K（カリ）
3.8～4.6	6.6～7.1	8.4～9.1

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

・ 畔畦には除草剤を使用しない。

(9) てんこもり



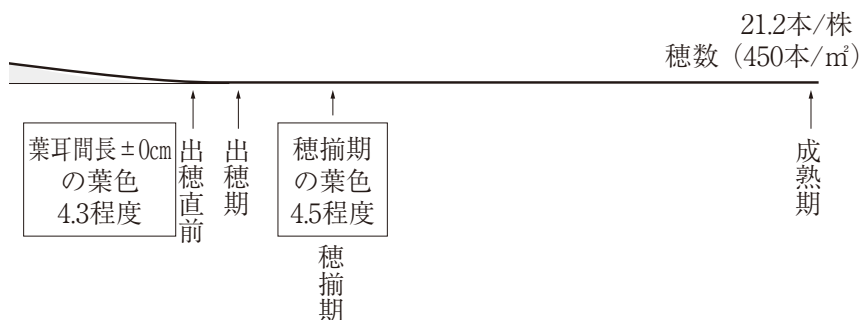
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		早期追肥 (追肥3号)	穂肥 (追肥3号)	
					肥料名	施肥量		1回目(幼穂1~2mm)	2回目(10日後)
てんこもり	移植	側条	肥効調節型	100	LPss晩生専用	40	—	—	—
		側条	分施	100	基肥206	30	—	10	12
		全層	分施	100	基肥206	30	15	10	12

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	600kg
m ² 当たり穂数	450本
1 穂粒数	70粒
m ² 当たり粒数	31,500粒
登熟歩合	85%
玄米千粒重	22.5 g



	8/2 8/5 8/9	9/19	
	14.9		
	8 月	9 月	10 月
穂ばらみ期	登 熟 期		
8/2頃 (出穂直前)	8/9頃 (穂揃期)	刈取り	・ 耕起 ・ 土づくり資材散布
・ スタークル粉剤DL ・ ラブサイド	・ キラップ粉剤DL		
	湛水管理	間断かん水	
・ 紋枯病が発病したら随時防除する。	出穂直前までに追肥する。 (葉耳間長±0cm)の時に葉色が4.3より淡い場合、 肥効調節型肥料を使用したほ場で出穂10日前 特にフエーン現象が予想される場合は早めの入水。 穂ばらみ期から穂揃期までは水分不足に注意。	2回の基本防除でいもち病・斑点米の防止	湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らさず、
		刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う	籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期
			・ 過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・ 水分14.5〜15.0%に仕上げる。

(単位：kg/10a)

穂肥(追肥3号)	成分計(土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N(窒素)	P(りん酸)	K(カリ)
(10)	8.4(9.9)	10.6(10.9)	10.6(12.1)
(7)	6.9(8.0)	11.7(11.9)	13.1(14.2)
(7)	9.2(10.3)	12.2(12.4)	15.4(16.4)

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

- ・ 早期追肥は、田植7日後に散布する。
- ・ 幼穂形成期時は、葉色4.0以上を維持する。

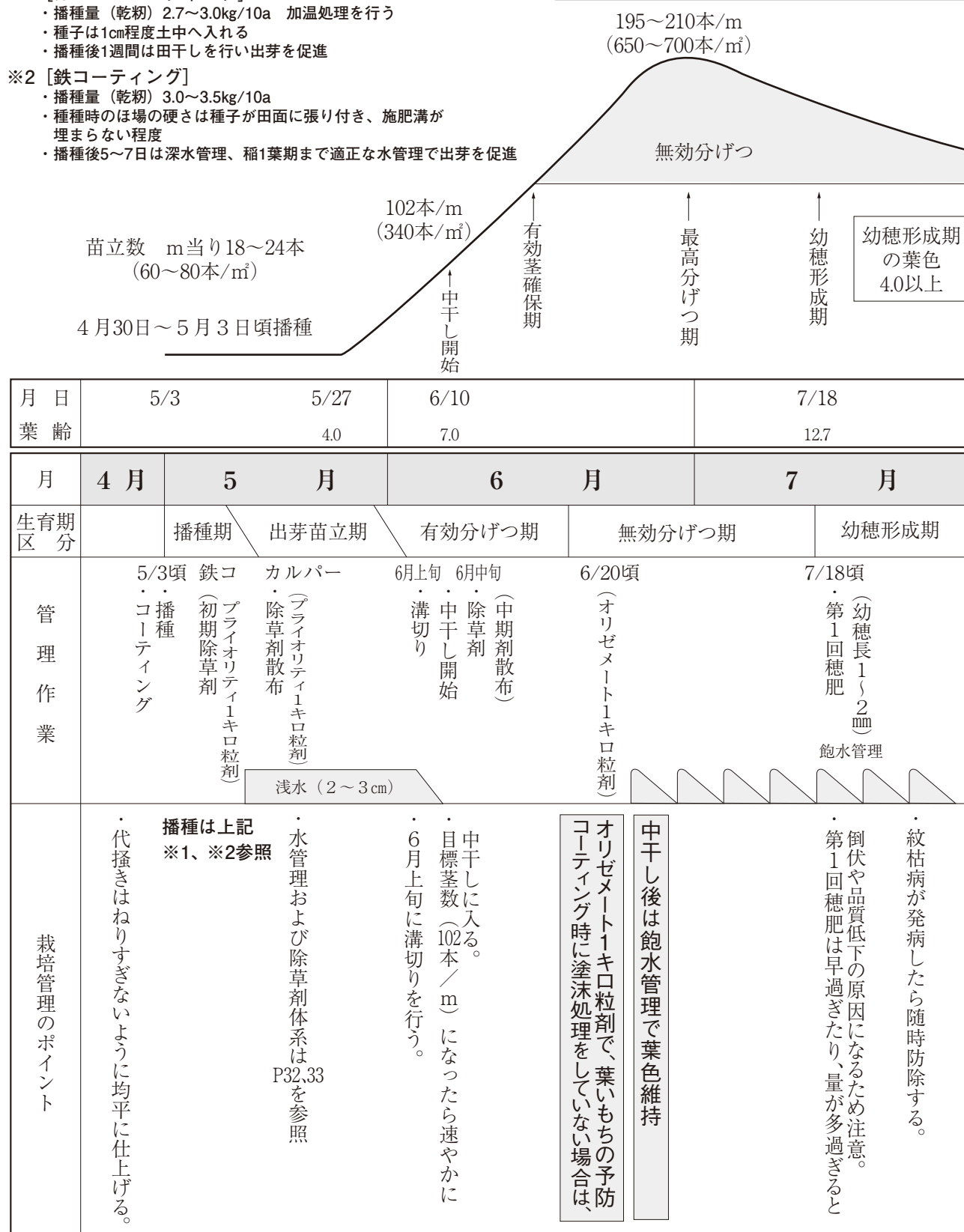
(10) 直播栽培てんこもり

※1 [カルパーコーティング]

- ・播種量（乾籾）2.7～3.0kg/10a 加温処理を行う
- ・種子は1cm程度土中へ入れる
- ・播種後1週間は田干しを行い出芽を促進

※2 [鉄コーティング]

- ・播種量（乾籾）3.0～3.5kg/10a
- ・播種時の土の硬さは種子が田面に張り付き、施肥溝が埋まらない程度
- ・播種後5～7日は深水管理、稲1葉期まで適正な水管理で出芽を促進



施肥設計

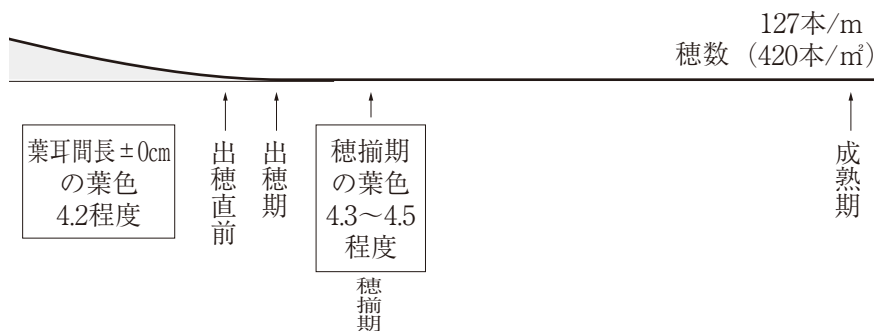
品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		穂肥（追肥3号）	
					肥料名	施肥量	1回目(幼穂1～2mm)	2回目(10日後)
てんこもり	直播	側条	肥効調節型	100	LPss晩生専用	35	—	—
		側条	分施	100	基肥206	25	10	12

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	570kg
m ² 当たり穂数	420本 (m間127本)
1 穂粒数	75粒
m ² 当たり粒数	31,500粒
登熟歩合	80%
玄米千粒重	22.5 g

漏生籾による異品種混入を防ぐため、前年と同一品種、または、転作後田で栽培する。



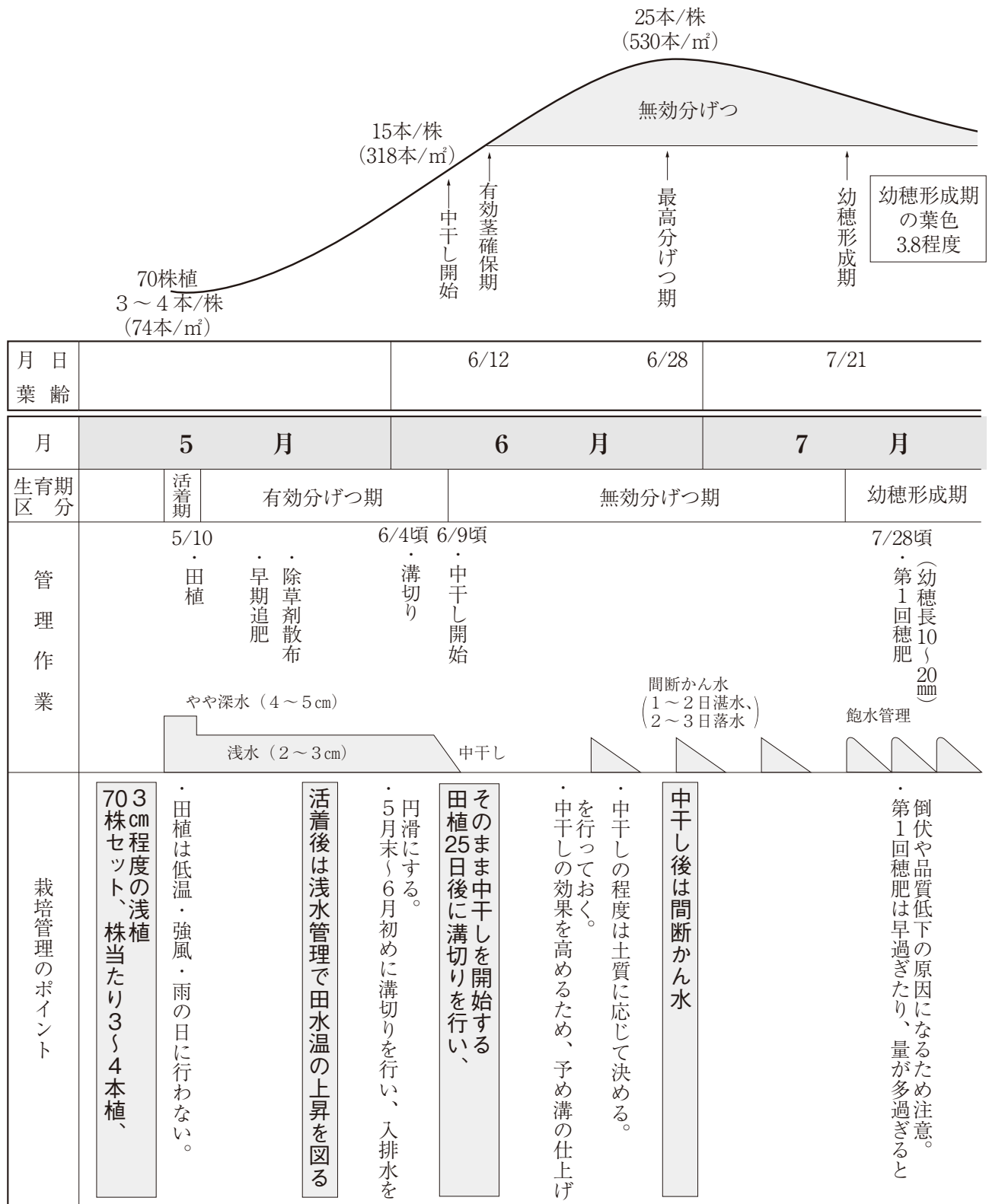
	8/4 8/8 8/12	9/21	
	14.5		
	8 月	9 月	10 月
穂ばらみ期	登 熟 期		
7/28頃 (1回目から10日後) ・第2回穂肥	8/4頃 (出穂直前) ・スタークル粉剤DL ・ラブサイド	8/12頃 (穂揃期) ・キラップ粉剤DL	・耕起 ・土づくり資材散布 ・刈取り
	間断かん水		
	湛水管理		
特にフェーン現象が予想される場合は早めの入水。 穂ばらみ期から穂揃期は、水分不足に注意。	出穂直前までに追肥する。 (葉耳間長±0cm)の時に葉色が4.2より淡い場合、 肥効調節型肥料を使用した場合は出穂10日前	湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、	2回の基本防除でもち病・斑点米の防止
		刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う	籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期
			過乾燥・胴割米を絶対出さない。 水分14.5〜15.0%に仕上げる。

(単位: kg/10a)

穂肥(追肥3号)	成分計 (土づくり資材含む)		
(出穂前追肥)	N(窒素)	P(りん酸)	K(カリ)
(10)	7.4 (8.9)	9.9 (10.2)	9.9 (11.4)
(7)	6.3 (7.4)	10.7 (10.9)	12.3 (13.4)

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照
・幼穂形成期は、葉色4.0以上を維持する。

(11) 新大正糯



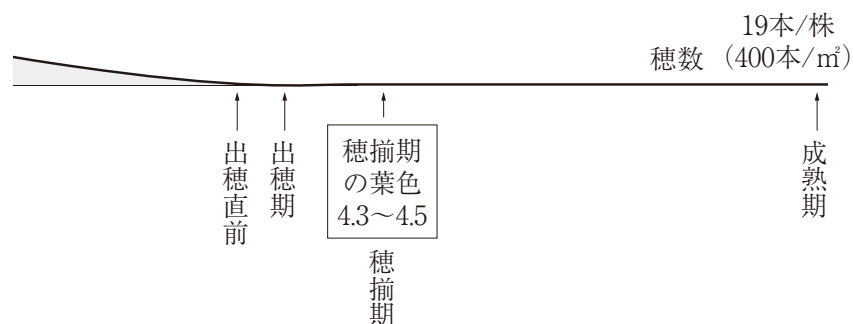
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		早期追肥 (追肥3号)	穂肥 (追肥3号)	
					肥料名	施肥量		1回目(幼穂10〜20mm)	2回目(1週間後)
新大正糯	移植	側条	分施	100	基肥206	25	—	10	10
		全層	分施	100	基肥206	30	15	10	10

【JA米生産基準】

収量構成の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	480kg
m ² 当たり穂数	400本
1 穂粒数	70粒
m ² 当たり粒数	28,000粒
登熟歩合	80%
玄米千粒重	21.5 g



	8/8 8/11	8/15	9/20
	8 月		9 月
穂ばらみ期	登 熟 期		10 月
8/1 ・Zボルドー粉剤DL	8/4頃 ・第2回穂肥	8/8頃 (出穂直前) ・スタークル粉剤DL ・ラブサイド	8/15頃 (穂揃期) ・キラップ粉剤DL
		間断かん水	・耕起 ・土づくり資材散布 ・刈取り
湛水管理			
・特にフェーン現象が予想される場合は早めの入水。 ・穂ばらみから穂揃期までは水分不足に注意。	湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、	2回の基本防除でもち病・斑点米の防止	刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う
			適期刈取りに努める ・過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・水分14.5〜15.0%に仕上げる。 ・穂発芽しやすいため、倒伏・刈遅れに注意。

(単位：kg/10a)

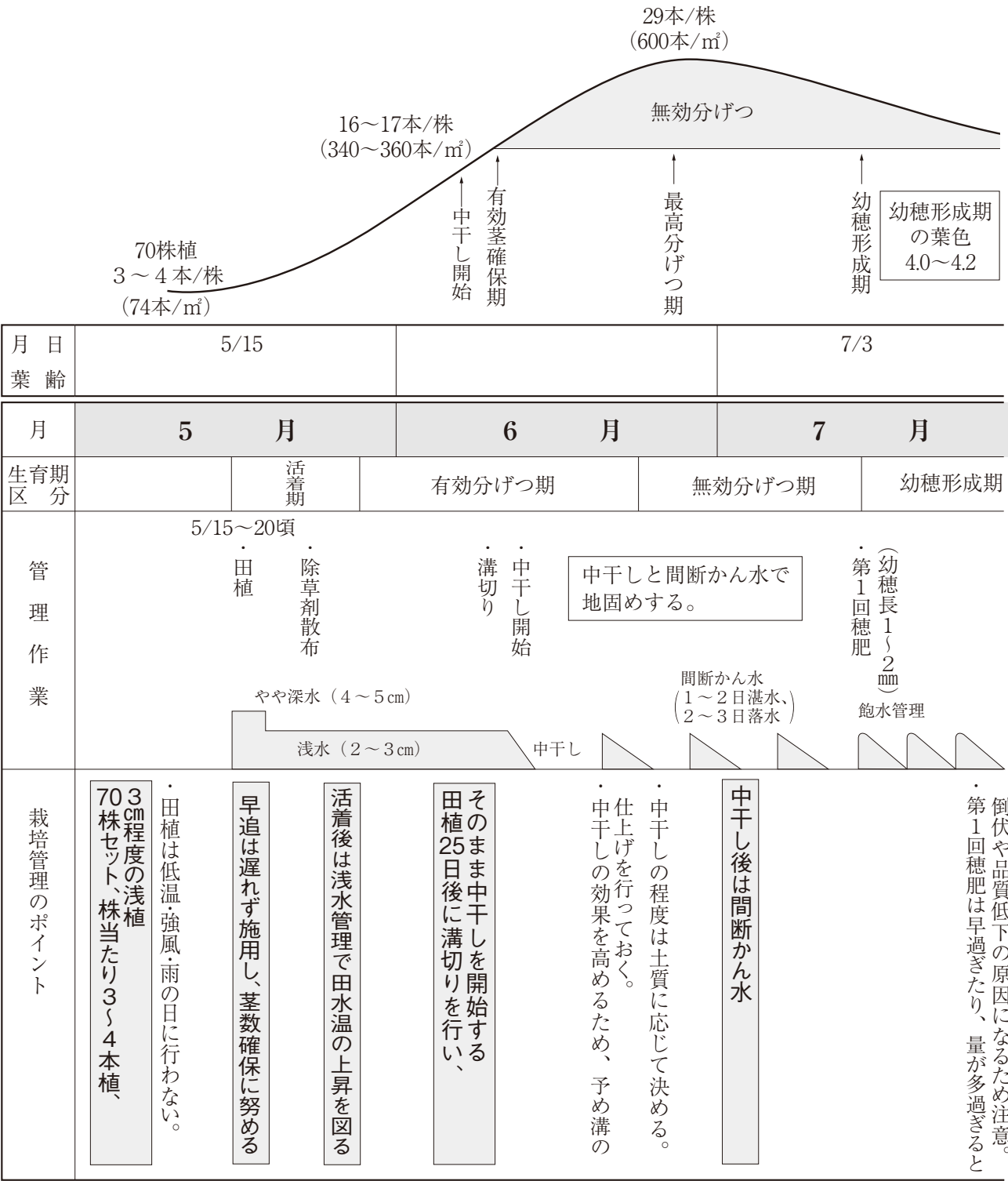
成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
6.0	10.6	12.0
8.9	12.1	15.1

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

- ・早期追肥は、田植7日後に散布する。
- ・昨年秋又は今年春にパワーシリカを散布しない場合は、7月5日頃にエスアイ加里らくだを15kg/10a 散布する。

11. 平・上平地区の品種別栽培基準

(1) てんたかく



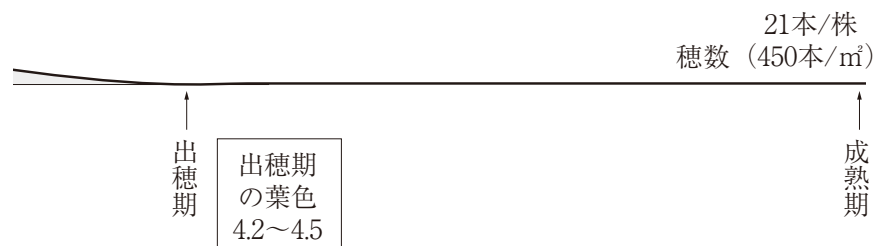
施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		早期追肥 (追肥3号)	穂肥（追肥3号）※2	
					肥料名	施肥量		1回目(幼穂1～2mm)	2回目(12日後)
てんたかく	移植	側条	分施	100	基肥206	35	－	12	12
		全層	分施	100	基肥206	35	15	12	12

【JA米生産基準】

収量構成要素の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	540kg
m ² 当たり穂数	450本
1 穂粒数	65粒
m ² 当たり粒数	29,300粒
登熟歩合	80%
玄米千粒重	23.2 g



7/26		9/6	
	8 月	9 月	10 月
穂ばらみ期	登熟期		
・第2回穂肥 (1回目から12日後)	8/1頃 (穂揃期) ・スタークル粉剤DL ・ラブサイド	8/8頃 (傾穂期) ・キラップ粉剤DL ・刈取り ・間断かん水	・耕起 ・土づくり資材散布
・紋枯病が発病したら随時防除する。 ・特にフェーン現象時はあらかじめ入水する。 ・穂ばらみから穂揃期までは水分不足に注意。	・湛水状態を保つ ・出穂期から20日間は水を切らず、 ・2回の基本防除でいもち病・斑点米の防止	・刈取り5~7日前までは、間断かん水を行う ・籾の黄化率85~90%程度が刈取適期	・稔実を良くするため極端な早刈りはさける。 ・過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・水分14.5~15.0%に仕上げる。

(単位：kg/10a)

成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
7.8	12.7	14.2
10.1	13.2	16.5

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

- ・早期追肥は、田植7日後に散布する。
- ・昨春秋または今年春にパワーシリカを散布しない場合は、6月下旬にエスアイ加里らくだを15kg/10 a 散布する。

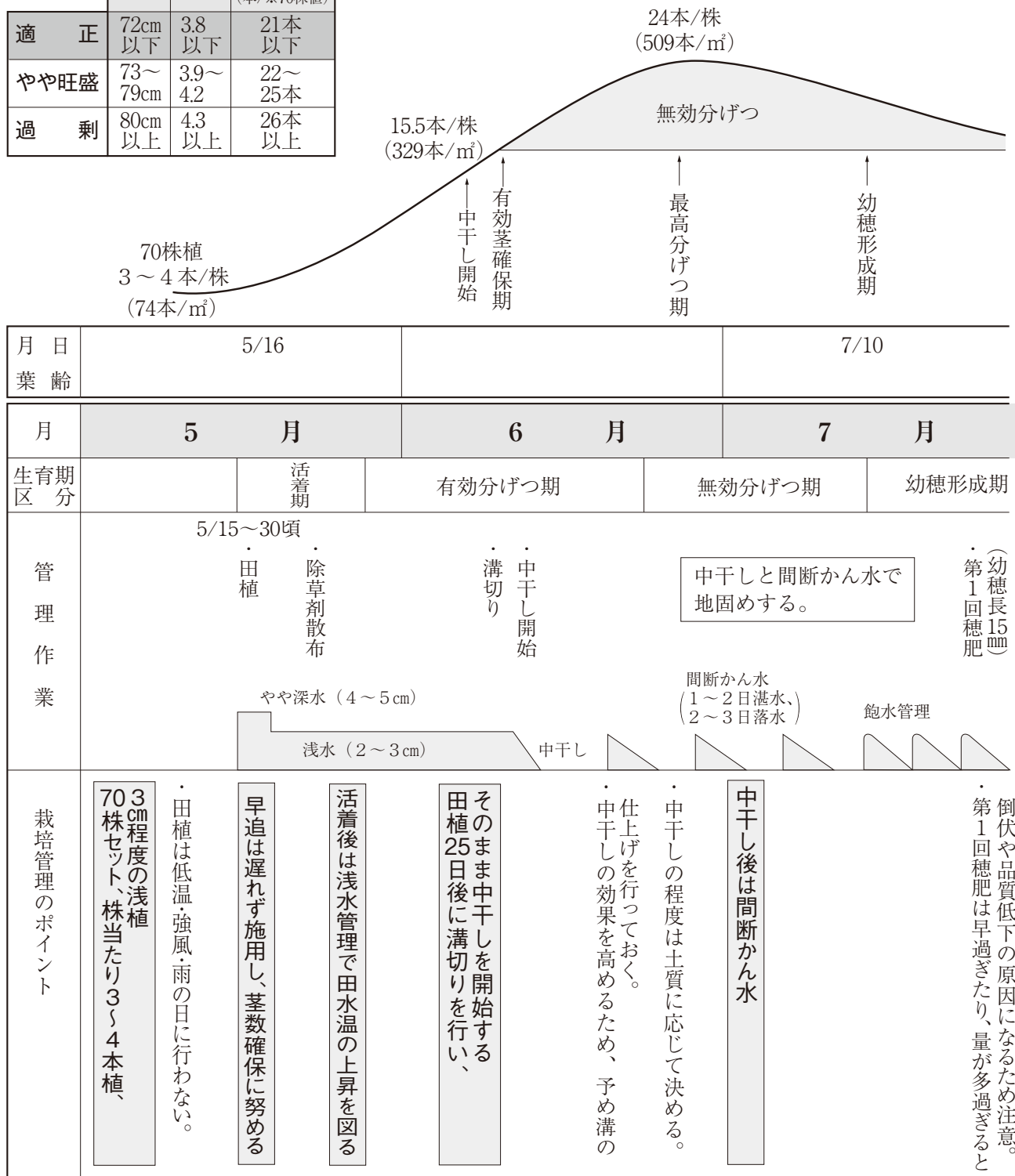
(2) コシヒカリ

<幼穂形成期生育量の目安>

移植

コシヒカリ

	草 丈	葉 色	茎 数 (本/※70株値)
適 正	72cm 以下	3.8 以下	21本 以下
やや旺盛	73～ 79cm	3.9～ 4.2	22～ 25本
過 剰	80cm 以上	4.3 以上	26本 以上



施肥設計

品 種	栽培方法	施肥方法	施肥体系	土づくり資材 (パワーシリカ)	基 肥		早期追肥 (追肥3号)	穂肥 (追肥3号)	
					肥料名	施肥量		1回目 (幼穂15mm)	2回目 (1週間後)
コシヒカリ	移植	側条	分施	100	基肥206	30	—	10	12
		全層	分施	100	基肥206	30	15	10	12

【JA米生産基準】

収量構成要素の目安

構成要素	目標値
10 a 当たり収量	540kg
m ² 当たり穂数	411本
1 穂粒数	70粒
m ² 当たり粒数	28,800粒
登熟歩合	83%
玄米千粒重	22.5 g



	8/2	9/13	
	8 月	9 月	10 月
穂ばらみ期	登 熟 期		
・第2回穂肥 (1回目から1週間後)	8/5頃 (穂揃期) ・スタークル粉剤DL ・ラブサイド	8/12頃 (傾穂期) ・キラップ粉剤DL	・刈取り ・耕起 ・土づくり資材散布
	間断かん水		
	湛水管理		
・特にフェーン現象時はあらかじめ入水する。 ・穂ばらみから穂揃期までは水分不足に注意。	2回の基本防除でもち病・斑点米の防止 湛水状態を保つ 出穂期から20日間は水を切らず、		刈取り5〜7日前までは、間断かん水を行う 籾の黄化率85〜90%程度が刈取適期 ・稔実を良くするため極端な早刈りはさける。 ・過乾燥・胴割米を絶対出さない。 ・水分14.5〜15.0%に仕上げる。

(単位：kg/10a)

成分計 (土づくり資材含む)		
N (窒素)	P (りん酸)	K (カリ)
6.9	11.7	13.1
9.2	12.1	15.4

※転作跡田、堆肥施用田の場合はP25参照

- ・早期追肥は、田植7日後に散布する。
- ・昨年秋または今年春にパワーシリカを散布しない場合は、6月下旬にエスアイ加里らくだを15kg/10a散布する。

12. 農作物の鳥獣被害防止対策

近年、鳥獣による農作物被害が増加しています。
まずは、集落の現状を確認してみましょう。

◎対策のポイント

1. よくあるこんな光景が、鳥獣たちへの餌付けとなっています！

まずは、近寄らないように、草刈等でかくれるところをなくしましょう。

鳥獣にとってエサ場としての価値を低くなるように、集落環境を改善していくこと（生息環境管理）が重要です。

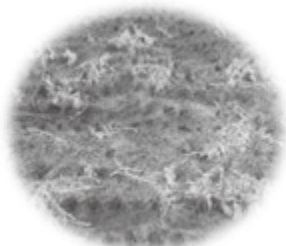


イノシシによる水稻の踏み倒し



耕作放棄地などが周辺に
ありません？

**草刈で見晴らしを
良くする！**



野菜ゴミ等を田畑に
捨てていませんか？

田畑に捨てない！



収穫後、そのままにして
いませんか？

**秋耕して落穂や
2番穂はすき込む！**



収穫しない果樹や野菜が
放置されていませんか？

すべて回収する！

2. 田畑への侵入を防ぎましょう！（被害防除）

一度、農作物の味を覚えた鳥獣は、田畑への侵入を繰り返します。

農作物を加害している鳥獣の種類に応じた対策（電気柵や防鳥ネットの設置など）で、田畑への侵入を防ぎましょう。



電気柵による侵入防止の取組

3. 加害鳥獣を退治しましょう！（捕獲）

農作物被害を減らすには、加害鳥獣の数を減らすことも重要ですが、捕獲には狩猟免許の取得が必要となります。

また、箱わなによる捕獲では、エサまき等の毎日の管理が必要であり、集落の協力が不可欠です。



箱わなによるイノシシ捕獲

4. イノシシ被害田（水稻・大豆）の出荷について

イノシシが侵入したほ場及びヌタウチによる倒伏被害があるほ場については、早急に農協・南砺市への連絡を必ずお願いします。



イノシシに侵入された水田

◎農作物被害をおこす主な鳥獣

	イノシシ	ハタネズミ（野鼠）	ハクビシン
鳥獣名			
特 徴	●生息地は広葉樹林、竹林、耕作放棄地など ●雑食性 ●年1回、4～5頭を出産 ●人に見つからない環境では昼夜を問わず行動する ●警戒心が強く臆病であるが、慣れると大胆になる ●学習能力が高い	●生息地は畦畔、田畑、草地、林地。穴を掘ったり、モグラなどの穴を利用し、地下にトンネル網を作り動き回る ●植物食性 ●繁殖期は春・秋で、3～5頭/回を出産。繁殖期に2～3回出産することもある	●鼻筋が白いのが特徴的 ●木登りが得意で樹上をよく利用する ●夜行性で、昼間は樹洞や岩穴あるいは人家の屋根裏などをねぐらとする ●雑食性 ●出産期は3～12月で、1～4頭を出産
主な被害	●水稻、野菜、イモ類、マメ類、タケノコなどの食害 ●ヌタウチによる水稻の倒伏 ●畦畔などの掘り起し、崩壊	●根菜類、穀類、果樹木、水稻の食害	●果実やトウモロコシなどの食害 ●人家や納屋への侵入 ●糞尿による生活環境被害
被害防止対策	●柵（電気柵など）を張る ●餌場をなくす ●隠れ家をなくす（藪の草刈） ●捕獲（狩猟免許が必要）	●畑や畦畔を除草する ●殺鼠剤を施用する	●柵（電気柵など）を張る ●餌場をなくす ●建物への侵入口をふさぐ ●捕獲（狩猟免許が必要）

	タヌキ	カラス	スズメ
鳥獣名			
特 徴	●夜行性で里山や人家周辺に生息する ●雑食性 ●年1回、春に3～5頭を出産 ●一定の場所に糞をする「ため糞」の習性がある	●全国に留鳥として生息する ●昼行性で、夜間はねぐらで眠る ●雑食性 ●繁殖期は春から夏。子育て中は神経質で攻撃的になる ●頭が良く、記憶力も高い	●全国に留鳥として生息する ●生息地は都市、農村、里などの人の居住域付近 ●イネ科を中心とした植物の種子や虫を食べる ●繁殖期は2～9月。年に1～3回繁殖する
主な被害	●野菜や果実の食害 ●ため糞の悪臭による生活環境被害	●野菜や果実の食害 ●水稻苗の抜き取り、踏倒し	●籾や野菜出芽苗の食害
被害防止対策	●柵（電気柵など）を張る ●餌場をなくす ●隠れ家をなくす（藪の草刈） ●捕獲（狩猟免許が必要）	●防鳥ネットで囲う ●目玉風船や防鳥テープ、爆音機などの追払い道具を設置する ※ただし数日～数週間慣れてしまうので、頻繁に変更が必要 ●団地で栽培し、被害を分散させる ●捕獲（狩猟免許が必要）	

13. 大豆栽培のかなめ

(1) 令和6年産大豆の生育概況

- ・ 栽植本数は確保され、開花期以降の数日おきの降雨により莢数は確保されたが、高温の影響で大粒比率は低くなった。しわ粒、莢ずれ粒、カメムシによる被害粒、刈遅れによる腐敗粒が散見された。
- ・ 製品単収は76kg/10aと平年より少なくなった(表1)。

表1 収量および検査結果 (JAなんと)

年次	製品単収 (kg/10a)	検査結果 (%)	
		3等	合格
R6	76	16	84
R5	85	17	83
R4	105	21	79
H25~R5	120	—	—

(2) 病害虫の発生状況と対策

ウコンノメイガ

- ・ 7月下旬頃から葉巻が見られたが、被害拡大は例年より遅く、8月上旬頃から葉巻数が多くなり、随時防除が実施された。

対策

1本あたり平均葉巻数6以上になったら、遅れずに随時防除

カメムシ

- ・ 7月下旬頃から平年よりかなり多いカメムシ類が確認され、おおむね適期に防除が実施された。追加防除が実施されたほ場ではカメムシの発生量を要防除水準未満に抑えることができた。

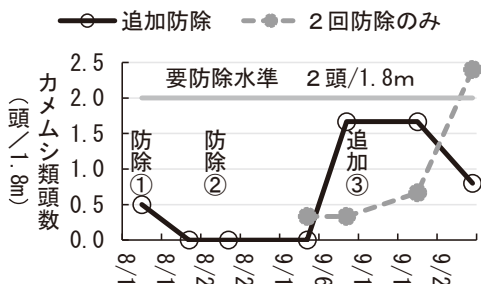


図1 追加防除実施ほ場のカメムシ発生量

青立ち

- ・ 開花期以降の高温により黄葉、落葉は遅れたが、莢数が確保されたことで、青立ち程度は少なくなった。一方、山際地域では、莢数不足による青立ちが散見された。

対策

6月以降の播種、適正な基肥量、栽植本数の確保
カメムシの適期防除、畦間かん水

葉焼病

- ・ 7月下旬頃から管内全域で葉焼病が散見され(写真1)、光合成能力低下により小粒化を助長したとみられる。

対策

7月下旬頃の発生状況に応じて防除する



写真1 葉焼病の病斑

(参考) 刈遅れと腐敗粒

- ・ 刈遅れほ場(成熟期+1週間)の腐敗粒は適期収穫ほ場の約3倍となった(表2)。

表2 刈遅れと腐敗粒 (粒数%)

	腐敗粒
刈遅れ	5.4
適期収穫	1.8

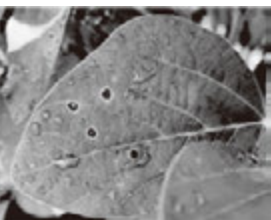
黒根腐病

- ・ 開花期以降、数日おきに降雨があり、8月上旬頃から黒根腐病の発生がみられた(写真2)。黒根腐病株は9月頃から落葉し、10月上旬には株全体が褐色になり、根量はかなり少なくなった。
- ・ 健全株に比べて黒根腐病株の稈実莢数、稈実粒数はかなり少なく、百粒重はかなり小さく、子実重はかなり少なくなった。品質はしわ粒が79.3%とかなり多く、整粒は4.5%とかなり少なくなった(表3)。

表3 黒根腐病株の収量構成要素と品質

	稈実莢数 (莢/m ²)	稈実粒数 (粒/m ²)	百粒重 (g)	子実重 (g/m ²)	整粒 (%)	か被害粒 (%)	しわ粒 (%)	腐敗粒 (%)	その他 (%)
黒根腐病株	714	1,252	23.0	283	4.5	6.6	79.3	8.3	1.4
健全株	870	1,543	29.0	444	22.6	19.4	45.6	5.4	7.0

写真2 黒根腐病発生初期の病斑



対策 排水対策の徹底、発生履歴を残し、菌を拡大させない管理の実施(図2)

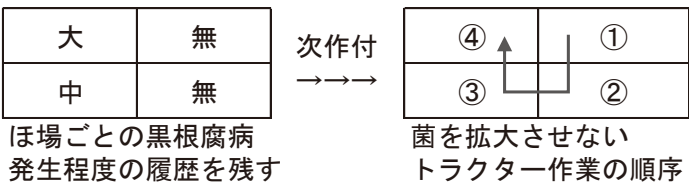


図2 黒根腐病菌拡大防止のためのほ場管理

(3) 令和7年産大豆の重点技術対策

播 種

- ～6月からの播種で、青立ち株の発生防止～
- ・耕起～砕土～整地～播種～除草剤散布の一連の作業は1日で終える。
- ・砕土率を高めるため、耕うん作業は速度を落とし、丁寧に行う。
- ・播種の作業スピードは0.5m/秒程度(3連播種機: 約70分/30a)とし、播種精度を高める。
- ・過剰な基肥や追肥は青立ちの発生を助長するため、施肥量は基準量とする。
- ・播種作業時は播種量や播種深度を随時確認する。

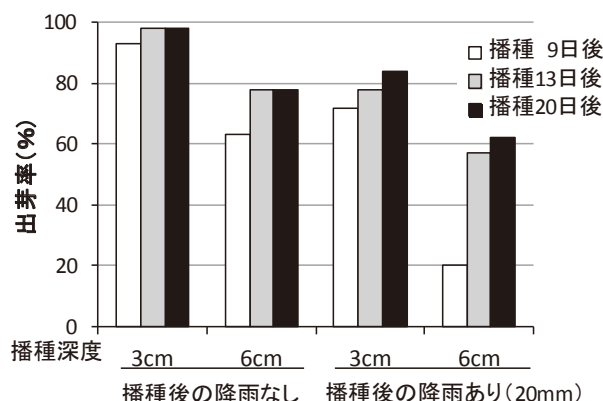


図3 播種深度、降雨と出芽率の関係 (H11 農業試験場機械営農課) 注) 降雨: 播種後に20mm かん水

除 草

<播種時>

薬 剤 名	適用雑草	使用時期	使用方法	散布量 (10a当たり)	総使用 回数
トリアリサト [®] 粒剤2.5	1年生雑草 (ツクサ、カヤツリガサ、キク、 アブナ科を除く)	播種後発芽前	全面土壌散布	4～6kg	1回
トリアリサト [®] 乳剤				200～300ml (水100ℓ)	

<追加散布剤> 1回目培土後、2回目培土前に雑草が見られる場合や降雨で培土が遅れる時など

ポルトフロアブル ^{※1}	1年生イネ科雑草 (スズメノカタビラを除く)	イネ科雑草3～10葉期 (収穫30日前まで)	全面散布	200～300ml (水100ℓ)	2回
大豆バサグラン液剤 ^{※1}	1年生雑草 (イネ科雑草を除く)	大豆2葉期～開花前まで (雑草の生育初期～6葉期) (収穫45日前まで)	全面散布	100～150ml (水100ℓ)	1回
バスタ液剤	1年生雑草	雑草生育期 (収穫28日前まで)	畦間散布 <u>※大豆にかか らないように する</u>	300～500ml (水100～150ℓ)	3回 以内
ザクサ液剤					
ダイロンゾル ^{※2}	1年生雑草	生育期(畦間、株間処理: 5葉期以降、雑草生育期) (収穫30日前まで)		100～200ml (水100ℓ)	1回

※1 ポルトフロアブルと大豆バサグラン液剤は混用することができます。

※2 ダイロンゾルはザクサ液剤またはバスタ液剤を混用することで抑草期間が長くなります(混用の際はダイロンゾルを先に水に溶かす)。

近年、県内で帰化アサガオ類などの難防除雑草が目立つようになり、JAなんと管内でも、「マルバルコウ」が道路わきや用水路沿いなどで確認されている。早期発見に努め、ほ場に入らないよう種子ができる前に防除(手取り、刈払い、除草剤散布など)を徹底する。

花の直径: 約1.5～2cm

マルバルコウ



本田防除

～カメムシと紫斑病の適期防除～

- ・8/10～15と8/24～8/29の2回の基本防除を適期に実施し、紫斑病とカメムシの被害を防ぐ。
- ・ウコンノメイガによる葉巻き(7月下旬頃)やダニによる葉の黄化が見られたら、防除を行い、被害の拡大を防ぐ。
- ・9月上旬にカメムシが多発している場合は追加防除を行う。

収 穫

～適期収穫～

- ・収穫前に雑草や青立ち株を取り除き、子実水分22%から刈取りを開始し適期に収穫する。
- ・コンバイン収穫作業は刈取高さ10cm程度とし、土のかきこみを防ぎ、収穫ロスの低減に努める。

<えんれいのそらの特徴>

- ・「エンレイ」に難裂莢性を付与し、莢がはじけにくい。
- ・成熟期は「エンレイ」より5日程遅い。
- ・施肥、栽植本数、防除等の管理は「エンレイ」と同じ。

大豆(えんれいのそら)

[大豆の生育と栽培管理]

排水対策・土づくり期間		栄 養 生 長 期 間																																											
4～5 月		6 月		7 月																																									
生育と農作業	○土づくり ○圃場排水 ○種子消毒 ○種子の準備 ○施肥 ○整地・畦立 耕うん・碎土 1日で終える	○播種期 ○除草剤の散布 出芽期 ○1回目培土	○2回目培土																																										
	雑草が発生している場合は除草剤を散布する。 (播種後30～35日頃) ・本葉4～5枚の頃、初生葉が埋まる程度。 ・培土後の溝と排水口を連結する。 (播種後20～25日頃) ・本葉2～3枚の頃、子葉が埋まる程度。 (除草効果を高めるため、土の湿っている播種直後にまく。) ・トレファノサイド粒剤2.5を散布する。 ・播種後の溝や額縁排水溝を手直しし、排水口へ連結する。 ・播種は6月上旬以降に実施する。 ・土塊を細かくする。(出芽揃い及び除草効果を高める) 塗沫処理する(JAで実施)。 ・紫斑病・タネバエ・フタスジヒメハムシ予防のクルーザーMAXXを サブソイラー等により透水性を改善する。 ・排水条件をよくするため額縁排水溝を設置する。																																												
栽培の留意点	第1回 第2～3本葉 初生葉 子葉 第2回 第4～5本葉 初生葉 子葉																																												
	土づくり (10aあたり) <table><tr><th>品 名</th><th>10a当り 施用量</th></tr><tr><td>シェルホス</td><td>100kg</td></tr><tr><td>又は</td><td></td></tr><tr><td>苦土石灰</td><td>100kg</td></tr><tr><td>+ ※ 粒状ようりん</td><td>40kg</td></tr><tr><td>堆 肥</td><td>2～3 m³</td></tr></table> 播種量 ※百粒重 大粒33g 中粒27g、苗立率90% <table><tr><th rowspan="2">時 期</th><th colspan="2">種子量 (kg/10a)</th><th rowspan="2">栽植本数 (本/10a)</th><th colspan="2">スプロケット</th></tr><tr><th>大粒</th><th>中粒</th><th>目皿側</th><th>車輪側</th></tr><tr><td>5月30日～ 6月上旬</td><td>5.5</td><td>4.5</td><td>16,000</td><td>10～11</td><td>13</td></tr><tr><td>6月中旬</td><td>6.3</td><td>5.0</td><td>18,000</td><td>9～10</td><td>14</td></tr></table> 施肥量 (kg/10a) ※目皿はB2を使用する <table><tr><th rowspan="2">体 系</th><th>基 肥</th></tr><tr><th>基肥555 (15-15-15)</th></tr><tr><td>単 作</td><td>15～20</td></tr><tr><td>麦 跡</td><td>20～25</td></tr></table> ※土壌中のリン酸が目標値以上の場合には施用しなくてよい。					品 名	10a当り 施用量	シェルホス	100kg	又は		苦土石灰	100kg	+ ※ 粒状ようりん	40kg	堆 肥	2～3 m³	時 期	種子量 (kg/10a)		栽植本数 (本/10a)	スプロケット		大粒	中粒	目皿側	車輪側	5月30日～ 6月上旬	5.5	4.5	16,000	10～11	13	6月中旬	6.3	5.0	18,000	9～10	14	体 系	基 肥	基肥555 (15-15-15)	単 作	15～20	麦 跡
品 名	10a当り 施用量																																												
シェルホス	100kg																																												
又は																																													
苦土石灰	100kg																																												
+ ※ 粒状ようりん	40kg																																												
堆 肥	2～3 m³																																												
時 期	種子量 (kg/10a)		栽植本数 (本/10a)	スプロケット																																									
	大粒	中粒		目皿側	車輪側																																								
5月30日～ 6月上旬	5.5	4.5	16,000	10～11	13																																								
6月中旬	6.3	5.0	18,000	9～10	14																																								
体 系	基 肥																																												
	基肥555 (15-15-15)																																												
単 作	15～20																																												
麦 跡	20～25																																												

良質大豆生産のポイント

の栽培基準

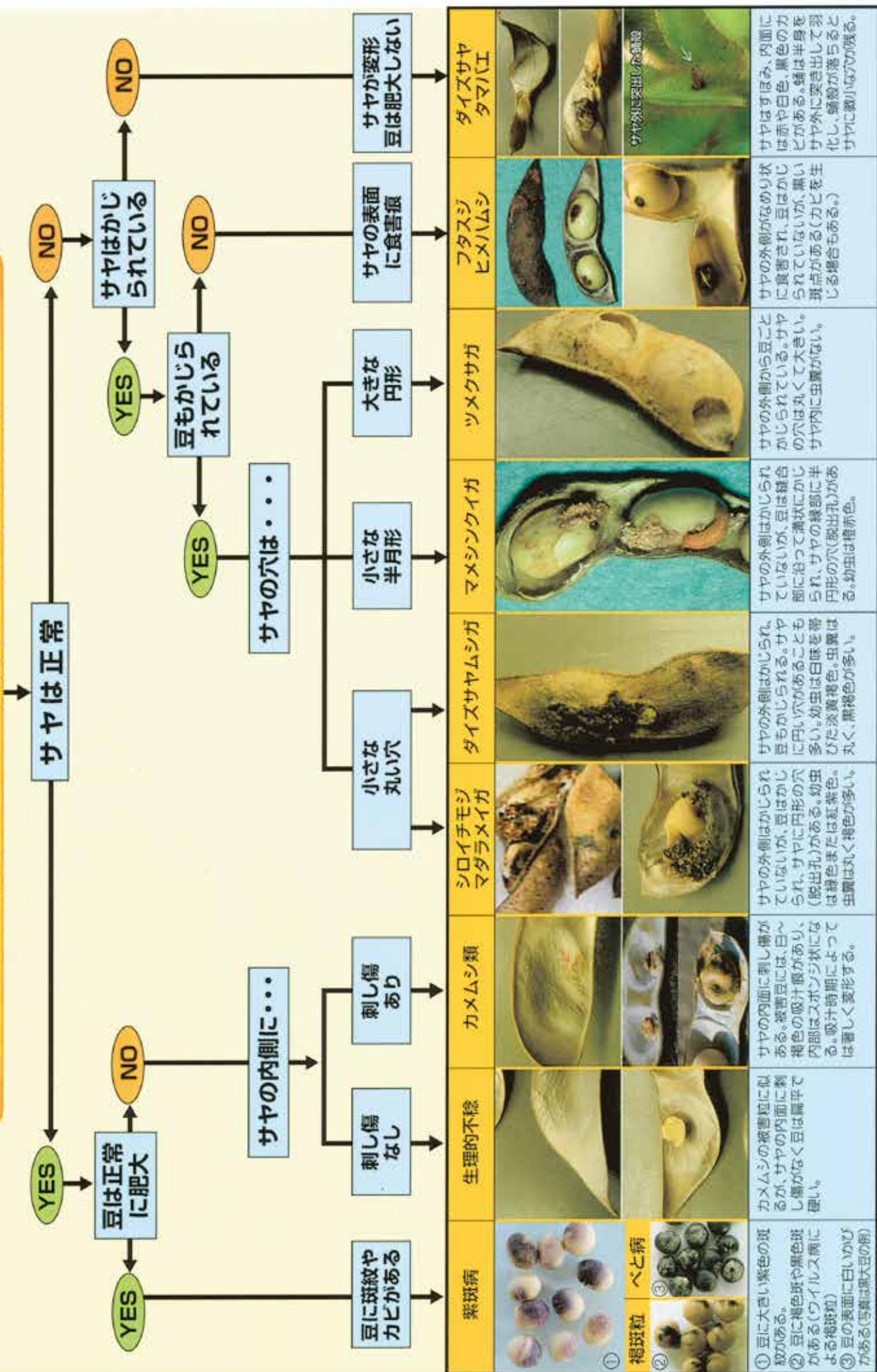
- ◎ 排水の良いほ場づくり(排水の徹底)
- ◎ 適正な栽植本数
- ◎ 適正な播種
- ◎ 雑草防除
- ◎ 施肥量の遵守
- ◎ 的確な中耕培土
- ◎ 乾燥時の畦間かん水
- ◎ 病害虫の適期防除
- ◎ 適期収穫

生殖生長期(登熟期間)			
	8 月	9 月	10 月
開花期	莢伸長期 ○基本病害防除① (莢が伸びきった頃)	黄葉期 (莢がパンパンになった頃) ○基本病害防除② 子実肥大期	成熟期(収穫) 乾燥調製施設へ ○脱粒 ○乾燥・調製
畦間かん水			
・かん水は短時間で行い、水が全体に行き渡ったら、すみやかに込まれる場合は、その都度かん水する。(開花後40日間まで) ・開花期から蒸散が活発になるので、晴天が3日程度続くと見排水する。 ・ウコンノメイガによる葉巻が多い場合は追加防除する。 ・8月24～29日 トライトレボン粉剤DLを散布する。 ・8月10～15日 Zボルドー粉剤DLとダントツH粉剤DLを散布する。 ・カメムシ類の発生が多い場合は追加防除する。			
乾燥及び選別は農協の施設で行う。 ・刈取高さは地表から10cm程度とし、絶対に土を入れない。中へ入れない。 ・青立ち株や大きい雑草はあらかじめ除去し、絶対コンバインの収穫作業は効率的に行い、収穫適期内で終了する。 コンバイン収穫 なつた頃)になったら刈り取りする。 ・落葉し、子実水分が22%以下(子実が球形で固く、莢の90%が褐色に抜き取る。 ・収穫時期が近づいたら、青立ち株や草丈の大きい雑草を圃場から抜き取る。			

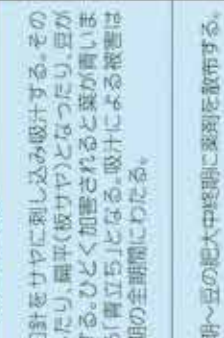
病害虫防除

区分	体系	防除時期	対象病害虫	使用農薬・10a当たり散布量	収穫前日数	使用総回数
基本防除	粉剤	1回目 8月10～15日	紫斑病	Zボルドー粉剤DL 3kg	－	－
		2回目 8月24～29日	カメムシ類	ダントツH粉剤DL 4kg	21日前	4回以内
	無人航空機	1回目 8月10～15日	紫斑病・カメムシ類	トライトレボン粉剤DL 3kg	14日前	2回以内
		2回目 8月10～15日	紫斑病	トライフロアブル 8倍 0.8L	14日前	2回以内
		2回目 8月24～29日	カメムシ類	スミチオン乳剤 8倍 0.8L	21日前	4回以内
随時防除	粉剤	7月下旬から8月上旬	ウコンノメイガ	ダントツH粉剤DL 4kg	7日前	3回以内
		8月下旬	アブラムシ類			
	無人航空機	8月中旬から9月中旬	カメムシ類・マメシクイガ	プレバソフフロアブル5 32倍 0.8L	7日前	2回以内
		7月下旬から8月上旬	ウコンノメイガ			
		8月中旬から9月中旬	マメシクイガ・ハスモンヨトウ	スミチオン乳剤 8倍 0.8L	21日前	4回以内
		9月上旬から中旬	カメムシ類			
	液剤	7月下旬から	ハダニ類	ニッソラン水和剤 2,000～3,000倍 150L	7日前	2回以内

豆の被害とその原因の見分け方



大豆の主要病害虫と防除

紫斑病	べと病	葉焼病	茎疫病	黒根腐病	白絹病
					
葉に褐色～やや紫色を帯びた濃褐色の病斑ができ、その周囲に狭い黄白色の病斑が生える。豆に白い菌糸体が見え、紫斑病の発生は品質が低下する。	葉に黄白色の斑点ができ、その裏に白色～灰色のかびが生える。豆に白い菌糸体が見え、紫斑病の発生は品質が低下する。	葉に黒褐色の小さな斑点が多数でき、融合して褐色の病斑になる。根口等から腐敗する。台風の後の雨に多発し、早期落葉して減収することもある。	地際部から茎の基部に褐色の病斑を作り、幼虫期には茎立ち不良を起す。生育後期には立ち枯れや早期枯死になる。大雨や長雨後に多発する。	生育後期に葉が短期に黄化したり、葉脈間に黄褐色の斑点を形成したりする。地際部には赤褐色～黒褐色になり、赤褐色の菌糸が見られ、根腐が腐敗し抜けやすくなる。	株全体が黄化枯死し、地際部の茎を白くした幼虫が共生菌とともにより発生。サヤは肥大せず、奇形になる。
健全種子を用いる。開花2～3週間後に薬剤を散布する。	健全種子を用いる。密植を避け、整果過多に注意する。発病初期に薬剤を散布する。	生育中期以降に薬剤を散布する。風雨が予想される場合にはその前に散布する。	抵抗性品種を利用する。排水を良くして高畝栽培する。種子粉衣または若い時期に薬剤を散布する。	連作を避け、排水を良くして高畝栽培する。	連作を避け、多発地は田畑輪換する。前作の刈り藁は土中に深く埋める。定植前、発芽初期、土寄せ前に薬剤を散布する。
防除	防除	防除	防除	防除	防除
ハスモンヨトウ	シロイチモジマダラメイガ	ダイズサヤシガ	マメシクイガ	フタスジヒメハムシ	ダイズサヤタマバエ
					
成虫 体長16～20mm 幼虫 体長10～20mm 老熟幼虫 体長10～20mm	成虫 体長15～20mm 幼虫 体長10～20mm	成虫 体長7～10mm 幼虫 体長10mm内外	成虫 体長10mm内外 幼虫 体長10mm内外	成虫 体長4mm 幼虫 体長4mm	成虫 体長8～10mm 幼虫 体長8～10mm
葉裏の卵塊から孵化した幼虫は集団で葉を食べ、白く透けた「白化葉」となる。その後、幼虫は分散して食害を続ける。	ふ化幼虫はサヤに侵入して豆を食害する。蛹になる前にサヤに丸い穴を開けて脱出する。	幼虫が茎葉とサヤを絡み合せて食害し、豆と同時にサヤもかじられる。被害は口穴だけとなる。	サヤに産み付けられた卵から孵化した幼虫は、サヤに侵入して豆を食害する。蛹になる前にサヤに半円形の穴を開けて脱出する。	成虫は茎葉・花の他、サヤ表面をナメクジ状に食害し、豆に黒斑ができる。幼虫は根の根粒を食害し生育が抑制される。	サヤ内に産み付けられた卵から孵化した幼虫が共生菌とともにより発生。サヤは肥大せず、奇形になる。
白化葉のピーク時と7～10日後に薬剤を散布する。	産卵食入の多い豆の肥大初・中期に薬剤を散布する。	サヤ伸長終期に薬剤を散布する。	産卵食入の多いサヤ伸長中・後期に薬剤を散布する。	は種時に薬剤を種子塗抹する。	開花後期～サヤ伸長初期に薬剤を散布する。
防除	防除	防除	防除	防除	防除
ホソヘリカメムシ	アオクサカメムシ	イチモンジカメムシ	フチビゲカメムシ	カメムシ類	
					
成虫 体長14～17mm 幼虫 体長14～17mm	成虫 体長11～17mm 幼虫 体長11～17mm	成虫 体長9mm 幼虫 体長9mm	成虫 体長13mm 幼虫 体長13mm	成虫 体長13mm 幼虫 体長13mm	成虫 体長13mm 幼虫 体長13mm
成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。	成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。	成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。	成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。	成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。	成虫・幼虫ともに口針をサヤに刺し込み吸汁する。そのため、サヤが落下したり、扁平(板サヤ)となったり、豆が変形、変色したりする。ひどく加害されると葉が黄いまま残って、いわゆる「青立ち」となる。吸汁による被害はサヤ伸長期～収穫期の全期間にわたる。
防除	防除	防除	防除	防除	防除
サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。	サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。	サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。	サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。	サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。	サヤ伸長期～豆の肥大中・後期に薬剤を散布する。

14. 大麦栽培のかなめ

- 令和6年産は、苗立ちや初期生育が良好で、穂数は多くなったが、くず麦が多く、収量は平年並みとなった（表1）。
- 令和7年産は、苗立ちは良かったが、降雨が多く、茎数は少なく、葉色は淡い。排水対策を徹底し、収量を確保する。

表1 出荷単収 (kg/10a)

年次	なんと	富山県
R6	280	316
R5	322	366
H26～R5	287	305

1. ほ場準備と排水対策

①耕起前の排水対策（図2）

- ・排水条件の良いほ場を中心に団地化する。
- ・原則、早生品種の作付あととする。
- ・稲刈後、直ちにスクリーオーガ等で額縁排水溝と長辺方向に7～8m間隔の排水溝を設置し、ほ場の排水に努める。
- ・サブソイラによる心土破碎や弾丸暗渠の実施により排水性を高める。

②播種時の排水対策

- ・播種同時の作溝により、畦幅は3m以内で、溝幅30cm・溝深さ20cm以上の溝を設置し、額縁排水溝・排水口と連結する。

③生育期間中の排水対策

- ・排水溝の手直しを随時行う。特に、積雪前と融雪後に溝の崩れ等がないか確認し、排水性を確保する。

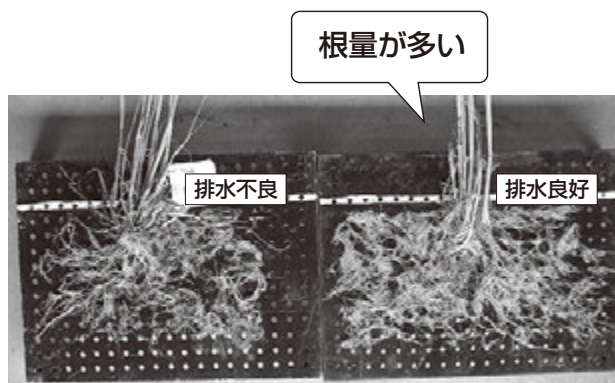


図1 排水状況と根域の発達状況（出穂期）
（H21 南砺市内）

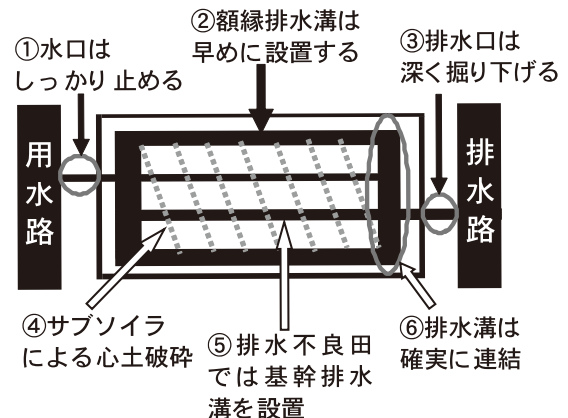


図2 排水対策の概要

2. 土づくり、基肥

①石灰質資材の散布

- ・pH6.0以上を目標にシェルホスまたは苦土石灰を100kg/10a以上施用する。また、堆肥（2 m³/10a）等の有機物を施用する。

②基肥

- ・倒伏がみられたほ場では減肥する（表2）。

表2 基肥量（10a当り）

肥料名	施用量
エコ大麦44号	側条 40～45kg
基肥555	側条 30kg
	全層 35kg

3. 耕起～播種

- ①ほ場の乾きを確認し、耕起～播種～作溝（畦立）までの一連の作業は1日で行う。碎土率（直径2cm以下の土塊率）は60%以上を目標とし、出芽・苗立率の向上を図る。
- ②年内生育量を確保するため、播種は9月25日頃から計画的に行い、遅くとも10月中旬までに播き終える。また、播種時期に応じた播種量を厳守する（表3）。
- ③雑草が多いほ場では除草剤を適切に使用し、生育量を確保する（ドリル播）。

表3 播種時期と播種量の目安

播種時期	目標苗立数 (本/㎡)	播種量 (kg/10a)	
		ドリル播	表面散播
9月25日～30日	140	6.0	6.5
10月1日～10日	150	6.5	7.0
10月11日～20日	200	8.5	9.0

特に9月播きは
播種量を厳守する

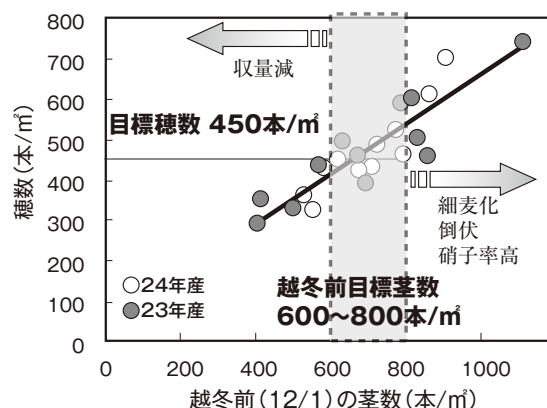


図3 越冬前の茎数と穂数（H23・24）

4. 追肥

※基肥に一発肥料（エコ大麦44号）を使用した場合は原則追肥しない

- ①年内追肥 播種後1ヶ月頃
 - ・硫安20kg/10a施用する。
 - ・12月初めの茎数が少なく、葉色がさめている場合は硫安10kg/10a以内の追肥を行う。
- ②消雪後追肥
 - ・茎数・穂数確保のため、消雪直後に遅れずに施用する。施用量は硫安20kg/10a以内とするが、茎数が過剰なほ場では減肥する。
- ③止葉展開期追肥
 - ・施用量は硫安10kg/10a以内とする。
 - ・葉色が濃く、茎数が多い場合は減肥する（表4）。

表4 止葉展開期追肥の目安

葉色 (SPAD値)	予想穂数 (本/㎡)	施用量 (硫安:10a当り)
5未満 (45未満)	500本未満	10kg
	500本以上	5～10kg
5以上 (45以上)	500本未満	5kg
	500本以上	追肥しない (ムラ直し程度)

5. 赤かび病等の適期防除

- ・開花始め（穂揃期）とその7日後の2回の防除を行う。
- ・定められた剤を使用し、周辺作物への飛散防止に努める。

6. 適期収穫

- ・穂軸、茎葉が完全に黄化し、子実水分が30%以下になった頃に収穫する。
 - ・ほ場内に発生したカラスノエンドウは、収穫前に除去する。
 - ・収穫後4時間以上堆積すると、熱損粒等の発生により品質が低下するため、直ちに乾燥機へ搬送し、通風する。
- ※麦、米が相互に混入しないように、麦用に登録されたコンバインを使用する。

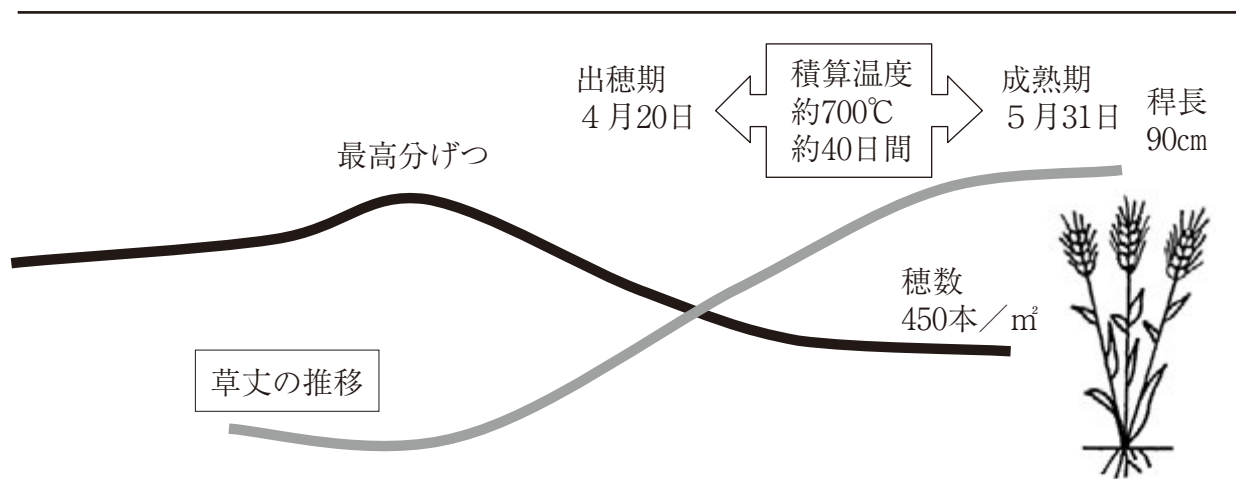
大麦あとはほ場はカメムシの発生源とならないように適正に管理する

- ①大麦あとの有効活用:大豆、地力増進作物等の作付
- ②雑草防除:モアによる草刈り、耕起等

大麦(ファイバースノウ)

生育ステージ	良質大麦生産のポイント ◎排水対策の徹底 ◎土づくりの実践 ◎適正な播種量 ◎生育に応じた追肥(分施) ◎赤かび病適期防除 ◎適期収穫 収量目標 400kg/10a 穂数 450本/㎡ 1穂着粒数 30粒 千粒重 35g 登熟歩合 85% 茎数の推移 根雪前 600～800本/㎡ 苗立本数 150本/㎡ (10月上旬播種)													
	時期	9月下旬～10月	11月～12月											
	生育期	播種準備～播種・発芽期	分けつ期											
主な作業内容	額縁排水溝と基幹排水溝の設置 サブソイラーによる透水性の改善 土づくり ○排水の良いほ場  根張りが良く最後までしっかり稲る! 根が多い→ 根が深くまで伸びる!! 種子消毒 ○土づくり(10a当たり) <table><tr><th>資材名</th><th>施用量</th></tr><tr><td>シェルホス</td><td>100kg</td></tr><tr><td>または 苦土石灰</td><td>100kg</td></tr><tr><td>+ 粒状ようりん※</td><td>40kg</td></tr><tr><td>堆肥</td><td>2㎡(1t)</td></tr></table> ※土壌中のリン酸が目標値以上の場合は施用しない。 播種作業 ・排水溝を補修する ・畦がカマボコ型になるように手直しするに連結する ・幅30cm、深さ20cmの溝を掘り、額縁排水溝 ・畦幅は3m以内にする ・碎土はできるだけ細かく行う ・耕起から播種まで1日で完了する 年内追肥① (硫安20kg/10a) ・播種1ヶ月後(本葉3~4葉期)施用 年内追肥② (硫安10kg以内/10a) ・12月上旬に色ざめが見られたら行う			資材名	施用量	シェルホス	100kg	または 苦土石灰	100kg	+ 粒状ようりん※	40kg	堆肥	2㎡(1t)	
	資材名	施用量												
	シェルホス	100kg												
または 苦土石灰	100kg													
+ 粒状ようりん※	40kg													
堆肥	2㎡(1t)													
○種子量(10a当たり) <table><tr><th></th><th>9月25日～</th><th>10月上旬</th><th>10月中旬</th></tr><tr><td>ドリル播</td><td>6kg</td><td>6.5kg</td><td>8.5kg</td></tr><tr><td>表面散播</td><td>6.5kg</td><td>7kg</td><td>9kg</td></tr></table>				9月25日～	10月上旬	10月中旬	ドリル播	6kg	6.5kg	8.5kg	表面散播	6.5kg	7kg	9kg
	9月25日～	10月上旬	10月中旬											
ドリル播	6kg	6.5kg	8.5kg											
表面散播	6.5kg	7kg	9kg											
○種子消毒の方法 <table><tr><td>薬剤粉衣</td><td>ベンレートT水和剤20を種子重量の0.5%の割合で均一に粉衣(乾燥種子10kgに対し水200ml、薬剤50g)</td></tr><tr><td rowspan="2">温湯消毒</td><td>風呂湯</td><td>42℃の風呂湯に浸漬し、1時間に1℃下がるようにフタをし、10時間後に取り出す</td></tr><tr><td>循環式催芽器</td><td>45℃の湯に入れ、2時間30分浸漬する</td></tr></table>			薬剤粉衣	ベンレートT水和剤20を種子重量の0.5%の割合で均一に粉衣(乾燥種子10kgに対し水200ml、薬剤50g)	温湯消毒	風呂湯	42℃の風呂湯に浸漬し、1時間に1℃下がるようにフタをし、10時間後に取り出す	循環式催芽器	45℃の湯に入れ、2時間30分浸漬する					
薬剤粉衣	ベンレートT水和剤20を種子重量の0.5%の割合で均一に粉衣(乾燥種子10kgに対し水200ml、薬剤50g)													
温湯消毒	風呂湯	42℃の風呂湯に浸漬し、1時間に1℃下がるようにフタをし、10時間後に取り出す												
	循環式催芽器	45℃の湯に入れ、2時間30分浸漬する												

の栽培基準



3 月 ～ 4 月	5 月 ～ 6 月
草 丈 伸 長 期	出 穂 期 ～ 収 穫 期

←-----→ 根雪期間 - 排水溝を補修して湿害を防止 - 消雪直後に野そ駆除の実施	消雪後追肥 (硫安 15 ～ 20 kg / 10 a) 消雪直後に速やかに	排水溝の手直し	4/9 止葉展開期追肥 (硫安 5 ～ 10 kg / 10 a) 止葉展開期に茎数と葉色に応じて施用	4月下旬 赤かび病防除 穂揃期とその7日後の2回防除	刈 取 子実水分30%以下になったら行う	異種穀粒の混入防止 刈取前には場内のカラスノエンドウを除去	麦、米相互の混入を防ぐため、コンバインの清掃を徹底

※一発肥料（エコ大麦44号）を使用した場合は追肥しない

○赤かび病防除

	1 回目（穂揃期）	2 回目（1 回目から7 日後）
粉剤区	トップジンM粉剤DL 4 kg / 10 a 収穫14日前まで	ワークアップ粉剤DL 3 kg / 10 a 収穫7日前まで
液剤区	トップジンM水和剤 1000倍液 150 ℓ / 10 a 収穫30日前まで	ワークアップフロアブル 2000倍液 150 ℓ / 10 a 収穫7日前まで
無人 航空機区	トップジンMゾル 8 倍液 0.8 ℓ / 10 a 収穫21日前まで	ワークアップフロアブル 16倍液 0.8 ℓ / 10 a 収穫7日前まで

15. 地力増進作物

地力増進作物は、「土壌を肥沃化する目的で栽培され、堆肥のようにふ熟させずに土にすき込む作物」で、「緑肥作物」ともいわれます。土壌の理化学性を改善し、保肥力を向上させ肥料成分の流亡を防ぎ、微生物相を豊かに保つことができます。

また、大麦跡に地力増進作物を栽培することにより、カメムシの増殖を抑制する効果もあります。

地力増進作物の特徴と栽培方法

作物名	クロタラリア	
生育特性	マメ科の1年生作物（普通種または広葉種）	
	普通種（細葉）  は種後約60日で草丈は、1.5～2mに達する。	広葉種  草丈は1.0～1.5m程度で普通種より生育量は小さいが、茎が軟らかくすき込みやすい。
排水対策	畑作物なので排水の良否が生育の良否を決める！ 額縁排水溝	
基肥	肥料は特に必要なし	
品種	クロタラリア・ネマコロリ	ネマックス・ネマキング・ネマクリーン
は種時期	6月～7月	6月～7月
は種量	5～8kg/10a	5～9kg/10a
は種方法	土壌が乾燥した状態で耕起し、碎土率を高める。 散播：耕起からは種、作溝の一連の作業を1日のうちに終える。播種後に浅耕条播：ドリルシーダーを使用し深さ3cm程度には種する。 条播が安定します。	
栽培期間中	排水が悪い場合は、手直しを実施する程度で、基本的には何もしない。	
すき込み方法	すき込みはフレールモアで細断後にロータリーで行うか、プラウや	
時期	草丈1.5m前後 (は種50～70日後：開花始め頃)	広葉種は播種60～80日後を目安
注意点	すき込みが遅れると木質化し、茎がフレールモアに絡んで作業に支障をきたす。	普通種は草丈1m、広葉種は0.5m程度で牛糞堆肥1t分の炭素量（肥料を蓄える効果）が得られます。

は種とすき込み時期の目安

	5月	6月	7月	8月	9月
クロタラリア	大麦 ▶ は種 — 排水溝の手直し(随時) —▶ すき込み				
ひまわり	は種 — 排水溝の手直し(随時) —▶				
ヘアリーベッチ	水稻作				
	大豆作				

大麦跡にクロタラリアを作付することで、土づくりになり、カメムシの発生も少なくなる。

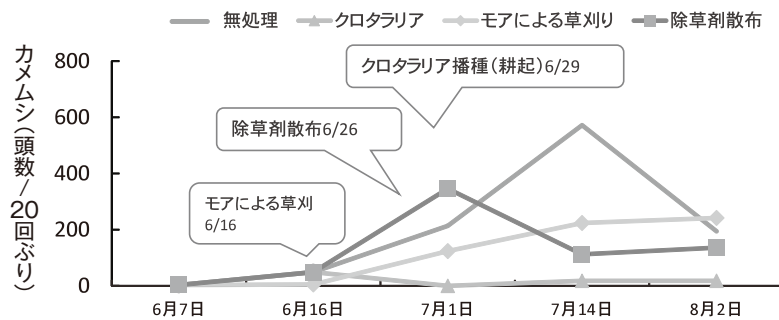


図 大麦跡の雑草処理方法とカメムシの発生量

ヒマワリ	ヘアリーベッチ	
キク科作物	マメ科の越年性作物	
	水稲への利用  (立毛間は種) 越冬前に生育量の確保が必要なので、なるべく早めには種する。	大豆への利用  草丈は、1.5m前後にもなり、軟弱で40cmで匍匐する。5月にはいると開花が始まる。

は必ず設けるとともに、耕起時に片培土機(サイドリッジャー)などで畝を立てる事が望ましい。

基肥555で25kg/10a	肥料は必要なし	
ハイブリッドサンフラワーNEO	寒太郎・ヘアリーベッチ	
5月中旬～6月中旬	9月上旬(立毛間は種)～10月上旬	9月下旬～10月中旬
2～3kg/10 a	3kg/10 a	

または鎮圧する。

ヘアリーベッチは隣接田への伸長・流入を防ぐため、畦から1mは播種しない

アップercutロータリー、ソーウェイロータリーを使用して行う。

残程を分解させるため、気温の高い10月中を目安とする。	4月下旬頃	5月下旬頃 (大豆のは種前) ※は種直前でも可
生育量が大さい場合、1回目は10cm程度フレールモアを上げた状態で走行する2段刈りとし、細かく細断する。	生育量により細断から入水まで期間を調整する必要があります。	大豆種子にはタネバエ被害防止のためにクルーザーMAXXの塗布する。 大豆の基肥窒素は0kg。 ただし、苦土石灰は散布する。

10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
→ すき込み							
は種 → 排水溝の手直し(随時) → すき込み → 田植え							
は種 → 排水溝の手直し(随時) → すき込み → 大豆は種							

柿の栽培指針

①目標収穫個数

樹 齢	1樹あたり着果数
20年生以上	150～200果
10年生以上20年生未満	100～150果
5年生以上10年生未満	20～80果

- (1) 10 a あたり収穫目標を 1 果実重200～300 g で4,000～5,000果とする。
 (2) 30年生以上の成木で管理しにくく、収穫果数が100個以下の樹は計画的に植え替える。

②結 実 管 理

結実確保…三社柿では結実を安定させるため受粉樹の効果が大きい。高接ぎを含めて園地には10mおきに受粉樹を配置する。

摘 果…2 L～3 L (200～300 g) の柿を収穫するため7月下旬までに30～35葉に1果となるよう摘果する。

- (1) 1 結果枝の中で基部、先端部の果実を摘果し、中央部の果実1果を残す。
 (2) 結果枝の長さが10～15cmくらいで弱い枝が多い樹では結果枝4～5本に1果とし成り過ぎを防ぐ。
 (3) 結果枝が20cm以上で果実が大きくなりやすい樹では結果枝4～5本に1～2果とする。
 (4) 変形果（ヘタスキ果など）、キズ果（枝ズレなど）は見つけ次第摘果する。
 (5) ヘタスキ果対策

- 1) 受粉樹の高接ぎ 樹全体にムラなく着果させることができる。また、種子が確実にはいった果実は初期肥大がよくヘタスキが軽減される。
 2) 弱剪定と摘果の調整 ヘタスキ果が発生しやすい樹は樹勢が強く果実が大きくなりすぎるので弱剪定とし、結果枝4～5本に1～2果となるよう摘果する。

③施肥基準量

区分	施肥時期	肥 料 名	施 肥 量 (kg/10a)		
			10年生未満	10～30年生	30年生以上
基肥	11月 ～ 3月	※堆肥等有機質資材			
		牛糞堆肥	5 m ³	5 m ³	5 m ³
		バーク堆肥	8 m ³	8 m ³	8 m ³
		醗酵けいふん	300kg	300kg	300kg
		苦土石灰	100kg	100kg	100kg
		BB有機入り柿専用 (N-10、P-8、K-8)	90kg	120kg	140kg

※堆肥等有機質資材は上記の内いずれか1種類を1～2年に1度施用する。

※堆肥は完熟したものを施用する。

※葉色が淡く果実肥大が悪いときは、(6～7月梅雨明けまで)にBB有機入り柿専用(20kg/10a)を施用する。

※樹勢が強い場合は、BB有機入り柿専用肥料の施肥量を減らす。(目安は2割減程度)

④野そ駆除

- (1) ヤソデオン10～20gを巣穴に投入するか、柿の根元等、野その通路に配置する。
- (2) 樹幹の周囲の敷ワラ、堆肥、雑草等は根雪前に取り除く。
- (3) 野そ被害防止のため、金網や肥料袋（ビニール袋）等を幹の周りに巻く。

⑤粗皮削り・落葉処理

- (1) 休眠期間に落ち葉を集めて処分する。（落葉病予防対策の基本）
- (2) 粗皮削りを行いカイガラムシなど越冬害虫の密度低下を図る。

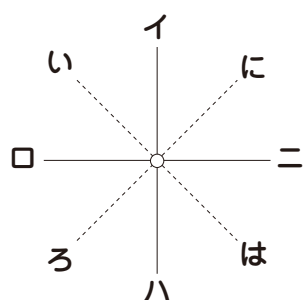
⑥縮間伐と整枝の必要性

- (1) 管理作業の効率化、薬剤や日光の透過性を良好にするため20年生以上の成木では10a当り植栽本数30～35本を目標に樹冠の拡大に合わせて適宜、縮間伐をすすめる。
- (2) 安全に作業するため高い枝を整理して樹を低くする。

⑦縮間伐・整枝・せん定作業の進め方

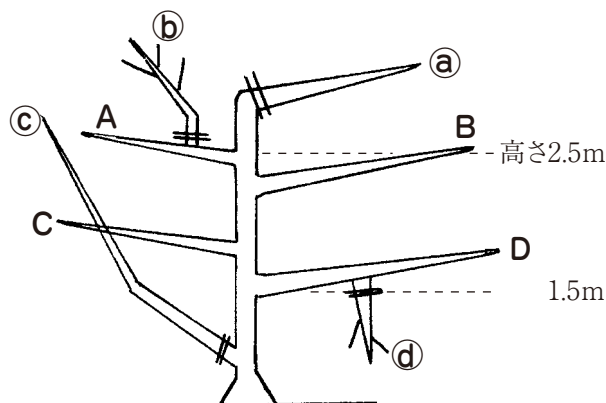
- (1) 隣の樹と混み合ってきた場合、どちらの樹を大切にするか決め、片方を縮間伐する。
- (2) 地上1.5～2.5mの高さで幹からでている枝は作業しやすく、雪害を回避できるので主枝として残す。（あらかじめテープなどでマークしておくといよい。）
- (3) 残したい主枝に日陰をつくる枝から切除する。
- (4) 樹を低くするため主枝の背中に直立する枝を切除する。
- (5) 葉をかかりやすくするため幹に対する分枝角度が狭い枝を切除する。
- (6) 機械の通路にあたる枝や草刈りの邪魔になる枝を切除する。

① 枝が多い場合（樹を真上から見下ろした図、中心の○が幹）



最初の太い枝を切る前に樹をひとまわりし、
イ、□、ハ、ニと残すか
い、ろ、は、にと残すか
主枝同士の間隔が充分に空くように切る。

② 主枝の選びかた（A・B・C・Dを主枝として残し、①・②・③・④の枝を切除する場合）



切除する枝（切除する理由）

- 主枝と平行している枝
（主枝の日当たりをよくするため）
- 主枝の背中の立ち枝
（樹を低くするため）
- 分枝角度が狭い枝
（主枝に葉がよくかかるように）
- 防除・草刈りの邪魔になる枝
（作業安全のため）

三社干柿加工

【干柿加工目標】

◎やわらかくておいしい ◎きれいな色に揃っている ◎衛生的で十分乾燥している

	あんぽ柿	干 柿（コロ柿）
目標サイズと製品重量	L 60～74 g 2 L 75～89 g	2 L 45～61 g 3 L 62～82 g
原料柿の重量（皮むき前）	L 200～230 g 2 L 240～280 g	2 L 200～240 g 3 L 250～310 g
収穫時期（平年での暦日）	11月1日～10日	11月5日～20日
収穫の目安（ヘタ部カラーチャート指数）	3.0～4.0	4.0
1台車あたり乾燥個数	1,000～1,500個	1,500～2,000個
イオウ使用量（1台車あたり）	5～6 g 10～15分くん蒸	3～5 g 10～15分くん蒸
予備乾燥（電気乾燥機）	温度30℃ 湿度40～60%で 48～72時間 乾燥歩留45%くらいまで	温度28～30℃ 湿度40～60%で72時間 乾燥歩留45%くらいまで
仕上げ乾燥	遠赤外線乾燥機30℃で 48～72時間 乾燥歩留35%まで	レンタン（火力）乾燥 25～30℃で 乾燥歩留30%まで（別表）
包装	シール機 300個／hr	自動包装機

【あんぽ柿加工の注意点】

- 1）あんぽ柿加工では休乾を24時間以上取らないよう予備乾燥から仕上げまで一気に乾燥をすすめる。
- 2）あんぽ柿加工では遠赤外線乾燥機的能力にあわせて1台車あたりの乾燥個数を予備乾燥の段階から少なめとして十分乾燥する。遠赤外線乾燥機能力以上の個数では柿が黒くなりやすい。
- 3）乾燥完了後からシール作業は柿が変色しないようできるだけ短時間でおこなう。脱酸素剤は開封後30分以内に包装を終了し、24時間以上静置し、異常発酵など袋のふくれるものがないことを確認し出荷する。

【干柿加工の注意点】

- 1）適熟果の収穫が高品質な干柿に仕上げる第一歩なので、未熟な果実を収穫した場合は果実を暖かい室内で2～3日追熟させてから加工する。適熟果の収穫量が多く、加工しきれない場合は冷蔵（5℃で10日、2℃で20日保存できる）して順次加工する。
- 2）硫黄くん蒸は柿の表面が乾かないうちに行う。
- 3）予備乾燥（電気乾燥）では柿の表皮が乾きすぎで厚くならないよう湿度40%以下での長時間の乾燥を避ける。乾きすぎで柿が硬くなることが多いので特に注意する。（あんぽ柿共通）
- 4）仕上げ乾燥ではレンタンの火が直接干柿にあたらないようレンタンの上に鉄板等を置く。また、レンタンの火と柿との距離を離すようサオをかけかえる。
- 5）休乾する場所は気温を10℃くらいに保ち、表面に水分が出てくるまで待ってから、再び乾燥を繰り返す。
- 6）柿の手もみは脱渋完了後（脱渋に必要な積算温度は2,500～3,000℃）に行う。また、休乾

時に表面に水分がある時には柿が傷むので手もみしない。果実の肩（ヘタとり機で果肉を取った縁回り）と果頂部は硬くなりやすいので指先でもむ。

7) 仕上げ乾燥基準 別表参照

【衛生管理対策】（あんぽ柿、干柿共通）

- 1) 気温15℃、湿度80%以上の条件ではカビが発生しやすいので、作業場や機械の内部に温湿度計を設置して危険な状態が予想されるときは遅れずに対応する。対策として
 - ①乾燥機の点検（除湿、温度調節が確実に動いているか日頃からチェックしておく）
 - ②柿の表面の除湿
 - ・レンタン乾燥 12時間くらい
 - ・ジェットヒーターの利用
熱風が直接柿にあたらないよう扇風機を利用して熱風を拡散させながら乾かす。
 - ③作業場の除湿
 - ・乾燥場の換気、除湿につとめる。
 - ・休乾中の柿と生柿を近づけないよう台車管理に注意する。
 - ・カビが発生した柿は見つけ次第捨てる。
 - ④消毒用エタノール（濃度70～80%）でサオや台車、乾燥機内部を消毒しておく。
- 2) 作業前の手洗いや作業中の帽子の着用など、衛生管理対策を徹底する。また、作業場内での飲食は行なわない。
- 3) 柿の皮やヘタスキ果等はショウジョウバエの発生源となるので、作業場から離れた場所へ処分する。
- 4) 出荷する前にヘタ割れ、ヘタスキ等の不良果、髪の毛等の異物混入がないことを十分に確認する。
- 5) 台車ごとに記録板をつけて、乾燥時間と回数を記録して品質管理を行う。

※別表 仕上げ乾燥基準

乾燥回数	乾燥時間	レンタン乾燥		休乾時間
		温 度	湿 度	
1	12～20hr	25～30℃	50～60%	10～20hr
2				
(手もみ)				
3	8～12hr	25～30℃	50～60%	10～20hr
4	4～8hr	23～25℃	40～50%	12～24hr
5				
6				
(型なおし)				
7	2～4hr	20～23℃	40～50%	12～24hr
8				

※注意 柿の表面に水分が出ていない状態で乾燥すると硬い柿になるので乾燥は柿の状態を見て繰り返すこと。

レンタン乾燥室基準

幅	奥行	高さ	煉炭量
1.3m	2.2m	2.0m	2個

令和 7 年度三社柿防除暦

月	旬	生育相	対象病害虫	農 薬 名	使用倍率	水100ℓ当たり 薬 量	10a当たり 散布量
3月	上・下	休眠期	カイガラムシ	機械油乳剤95	20 倍	5ℓ	350ℓ
			越冬病害虫 カイガラムシ類	石灰硫黄合剤	7 倍	14ℓ	350ℓ
5月	上・中	展葉期	ハマキムシ類 カキクダアザミウマ	アタブロンSC	4,000 倍	25ml	350ℓ
	下	開花前	落葉病 炭そ病	①トレノックスフロアブル	500 倍	200ml	350ℓ
6月	上・中	落花後	落葉病 灰色かび病 炭そ病	②フロンサイドSC	2,000 倍	50ml	400ℓ
	下	幼果期	落葉病 炭そ病 カイガラムシ類 アザミウマ類	③ジマンダイセン水和剤 ※モスピラン顆粒水溶剤(劇)	600 倍 4,000 倍	166g 25g	400ℓ
7月	上	果実肥 大期	落葉病 炭そ病 カメムシ類 フジコナカイガラムシ	④トレノックスフロアブル スミチオン水和剤40	500 倍 1,000 倍	200ml 100g	400ℓ
	中・下		炭そ病、落葉病 うどんこ病	ベルコート水和剤	1,500 倍	66g	400ℓ
8月	上		コナカイガラムシ類 カメムシ類	アクタラ顆粒水溶剤	2,000 倍	50g	400ℓ
	下		炭そ病 イラガ類 カキノヘタムシガ	ジマンダイセン水和剤 ※オリオン水和剤40(劇)	600 倍 1,000 倍	166g 100g	400ℓ
9月	上	成熟期	炭そ病	インダーフロアブル (炭そ病重点防除時期)	5,000 倍	20ml	400ℓ
	中・下		炭そ病 カメムシ類	オーソサイド水和剤80 キラップフロアブル	1,000 倍 2,000 倍	100g 50ml	400ℓ
10月	上		炭そ病	ミギワ20フロアブル	4,000 倍	25ml	400ℓ
	中		炭そ病	トップジンM水和剤	1,000 倍	100g	400ℓ

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

使用時期 (収穫前日数)	年間使用回数	注 意 事 項
発 芽 前	—	・カイガラムシ多発園は、粗皮削りを行い、機械油乳剤95(20倍)を発芽前に散布する。または3月中下旬頃、粗皮削りあとにスタークル顆粒水溶剤を1樹あたり20～40gを2倍に希釈し(発芽前～発芽期、年間1回)、主幹、主枝に塗布する。 ・石灰硫黄合剤は機械油乳剤95との近接散布は行わない。 ・炭そ病枝は、せん定時に発見次第切除し処分する。 ・接ぎ木(枝接ぎ)は4月下旬～6月に行う。また、接ぎ木部はカキノキマダラメイガ(フタモンマダラメイガ)に被害されやすいので注意する。 ・ヒメコスカシバやカキノキマダラメイガの被害が見られる場合は、ガットサイドS(産卵期～幼虫食入初期(但し、収穫45日前まで)、年間2回以内MEP(スミチオン等)成分使用回数3回以内)1.5倍液を主幹部、主枝及び垂主枝の分枝部に塗布または散布する。
発 芽 前	—	
収穫14日前まで	3回以内	・カイガラムシ多発園は、4月下旬にアブロード水和剤(1,000倍、開花期まで但し収穫45日前まで、年間2回以内)を散布する。 ・アザミウマ類多発園は、アクタラ顆粒水溶剤(2,000倍、収穫3日前まで、年間3回以内)を散布する。
収穫30日前まで	2回以内	・5月下旬から7月上旬は落葉病の重要防除期間なので、①～④の防除必ず実施する。
収穫45日前まで	1回	・フロンサイドSCのかぶれが心配な場合は、代わりにストロビードライフフロアブル(3,000倍、収穫14日前まで、年間3回以内)を散布する。 ・新梢に炭そ病斑が見られる場合は発見次第切除し処分する。
収穫45日前まで	2回以内	・みつばちを保護するため、満開10日後まで殺虫剤は使用しない。
収穫前日まで	3回以内	・6月下旬～7月初旬頃はカイガラムシの幼虫ふ化時期なので、散布ムラが無いよう、ていねいに殺虫剤を散布する。
収穫30日前まで	2回以内	・炭そ病の多発園は、オンリーワンフロアブル(3,000倍、収穫前日まで、年間3回以内)を散布する。
収穫30日前まで	3回以内	・ケムシ類、ハマキムシ類、フタモンマダラメイガの発生が見られる場合はサムコルフロアブル10(5,000倍、収穫前日まで、年間3回以内)を散布する。
収穫14日前まで	3回以内	
収穫3日前まで	3回以内	・カイガラムシ類の重点防除期間。
収穫45日前まで	2回以内	・イラガ類の重点防除期間
収穫21日前まで	1回	
収穫7日前まで	2回以内	・インダーフロアブルは必ず散布する。 ・9月以降にカイガラムシ類の発生が目立つ園地では、コルト顆粒水和剤(3,000倍、収穫前日まで、年間3回以内)を散布する。
収穫7日前まで	5回以内	
収穫7日前まで	2回以内	
収穫前日まで	3回以内	・カイガラムシ類多発園では10月からバンド誘殺(コモ巻き)を実施する。 ・台風通過直後はフロントフロアブル25(3,000倍、収穫前日まで、年間3回以内)で炭そ病、落葉病の防除を徹底する。
収穫前日まで	6回以内	

○令和6年12月11日現在の農薬登録内容に基づいて作成。農薬の使用にあたっては、必ず最新の登録情報を確認して使用すること。

果樹栽培の注意点

	受 粉 樹	病 害 虫 ・ 栽 培 メ モ
ウ メ	稲積では不要 他品種は必要	カイガラムシ類：発芽前 石灰硫黄合剤 8 倍 アブラムシ類：4 月下旬 ※ダイアジノン水和剤34(劇) 1,500倍 (収穫21日前まで 2 回以内) 5 月下旬 ※バリアード顆粒水和剤(劇) 4,000倍 (前日まで 2 回以内) 黒 星 病：4 月上旬 オーソサイド水和剤80 800倍 (収穫21日前まで 3 回以内) 5 月上旬 トップジンM水和剤 1,000倍 (収穫21日前まで 3 回以内) カイガラムシ類：7 月上旬 ※モスピラン顆粒水溶剤(劇) 2,000倍 (収穫前日まで 3 回以内)
ナ シ	必要	黒 星 病：開花期低温時に発生しやすい。 開花直前、直後の防除（4 月中旬、下旬） 芽基部病斑（芽の基部にハチマキ状に黒いスス）を見つけたら 切り取って園地外に処分する。 アンビルフロアブル 2,000倍 （収穫7日前まで 3回以内） 開花前散布し赤星病の同時防除を兼ねる 輪 紋 病：6～7 月 ベルクート水和剤 1,000倍 (収穫14日前まで 5 回以内) ハ ダ ニ 類：7 月下旬 梅雨明け直後 マイトコーネフロアブル 1,500倍 (収穫前日まで 1 回)
リンゴ	必要	黒 星 病：開花期低温時に発生しやすい。 開花直前、直後の防除(特に開花直後5月上旬が重要) アンビルフロアブル 2,000倍 (収穫 7 日前まで 3 回以内) 斑点落葉病：6～7 月 ベルクート水和剤 1,000倍 (収穫前日まで 3 回以内) 褐 斑 病：6～7 月 トップジンM水和剤 2,000倍 (収穫前日まで 6 回以内) 輪 紋 病：6～7 月 ベルクート水和剤 1,000倍 (収穫前日まで 3 回以内) 枝についたイボを削り取る キンモンホソガ：6月上旬、7月上旬 ※ダイアジノン水和剤34(劇) 1,000倍 (収穫30日前まで 4 回以内) 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 (収穫前日まで 3 回以内) ナミハダニ・リンゴハダニ：7 月下旬 梅雨明け直後 マイトコーネフロアブル 1,500倍 (収穫前日まで 1 回) カミキリムシ類：6 月下旬～7 月上旬 ロビンフッド(収穫前日まで5回以内) 幹に食害(木くず)が見られたら枝・幹の食入孔に ノズルを差し込み噴射する。 頂芽（枝の先端）に花芽がつくので細かい枝の先をきらない。 ふじでは大きい果実をならせるため 1 果実に対し50葉くらいに 摘果。

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

	受 粉 樹	病 害 虫 ・ 栽 培 メ モ
モ モ	白桃系を除き 不要	縮 葉 病：3月中下旬発芽前 石灰硫黄合剤 7 倍 (発芽前) 穿孔細菌病：病斑のある枝を見つけて除去する 開花直後 アタッキン水和剤 1,000倍 (収穫60日前まで 2 回以内) 灰 星 病：6月に袋かけ、袋かけ直前 トップジンM水和剤 1,500倍 (収穫前日まで 6 回以内) モモハモグリガ：6月頃から葉に食害が見られたら ※モスピラン顆粒水溶剤(劇) 4,000倍 (収穫前日まで 3 回以内) コスカシバ：被害部をナイフで削り幼虫を捕殺する。 9月上旬 ※モスピラン顆粒水溶剤(劇) 2,000倍 (収穫前日まで 3 回以内) 大きい果実を収穫するためには摘蕾（全体の70%くらい落とす）が有効。風当たりが強い場所は穿孔細菌病が多発するので風当たりの少ない場所に植える。
ブドウ	不要	黒 と う 病：春先が低温、多雨時に発生しやすい。 巻きツルや罹病枝を除去。 晩 腐 病：巻きツルや罹病果実を除去。 早期に袋かけ、又はカサかけをする。 べ と 病：梅雨期、高温時に発生しやすい。徒長枝を整理 7月袋かけ後 ストロビードライフフロアブル 3,000倍(収穫14日前まで 3 回以内) 灰色かび病：開花期低温多湿時に発生しやすい。開花後花カス を除去する。開花直前にトップジンM水和剤 2,000倍(収穫45日前まで 1 回) ブドウカミキリ：新梢伸長期に発生する。被害枝を除去する。 幼虫（枝の中にいる）を捕殺する。 収穫後10月中旬までに ※モスピラン顆粒水溶剤(劇) 2,000倍（収穫後 秋期3回以内）を散布する。

にんにくの栽培ごよみ

時期		作 業	防 除 体 系 (例)			
月	旬		対象病害虫	薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数・総使用回数)	水100ℓ 当たり薬量	10a当たり 散 布 量
9	上	弾丸暗渠・額縁排水溝施工		ラウンドアップマックスロード (耕起前まで、雑草生育期・1回)	200～500ml	100ℓ
	中	割球				
	下	耕起・基肥施肥・畝立て				
		種球消毒①	チューリップサビダニ	※ガードホープ液剤(劇)・500倍(植付前・1回)	200ml 30分種球浸漬	
10	中	種球消毒②	黒腐菌核病	ベンレートT水和剤20 (植付前・1回)	種子重量の1% 種球湿粉衣	
		植付け・覆土				
	上	除草剤散布①	一年生雑草	トレファノサイド乳剤(植付後、収穫90日前・2回以内)	300ml	100ℓ
	下	排水溝手直し				
11	上	芽直し				
		除草剤散布②	一年生雑草	ザクサ液剤(雑草生育期 萌芽前又は畝間処理・収穫前日・2回以内)	300～500ml	100ℓ
	中	防除① (混用事例有)	春腐病・さび病	Zボルドー・500倍(期限制限なし・回数制限なし)	200g	100ℓ
			アブラムシ・ネギコガ	オルトラン水和剤・1000倍(収穫7日前・2回以内)	100g	100ℓ
12	中					
	上	排水溝手直し				
	中	防除②	春腐病・さび病	Zボルドー・500倍(期限制限なし・回数制限なし)	200g	100ℓ
	下					
1	上	排水溝手直し				
		防除③	春腐病	カスミボルダー・1000倍(収穫7日前まで・5回以内)	100g	100ℓ
	中	除草剤散布③	一年生雑草	ザクサ液剤(雑草生育期 萌芽前又は畝間処理・収穫前日・2回以内)	300～500ml	100ℓ
		除草剤散布④	一年生雑草	トレファノサイド乳剤(植付後、収穫90日前・2回以内)	300ml	100ℓ
2	中					
	下	防除④ (混用事例有)	春腐病	アグリマイシン100・1000倍(収穫7日前・3回以内)	100g	100ℓ
			さび病・葉枯病等	ダコニール1000・1000倍(収穫7日前・6回以内)	100ml	100ℓ
	上	除草剤散布⑤	一年生雑草	ゴーゴーサン乳剤(植付後雑草発生前、収穫60日前・1回)	500ml	100ℓ
3	上	防除⑤	春腐病・さび病	Zボルドー・500倍(期限制限なし・回数制限なし)	200g	150ℓ
	中	防除⑥	春腐病	ナレート水和剤・1000倍(収穫7日前・2回以内)	100g	150ℓ
	下	防除⑦ (混用事例有)	春腐病	バリダシン液剤5・800倍(収穫3日前・5回以内)	125ml	150ℓ
			さび病・葉枯病等	アミスター20フロアブル・2000倍(収穫7日前・3回以内)	50ml	
4	上	防除⑧ (混用事例有)	春腐病	Zボルドー・500倍(期限制限なし・回数制限なし)	200g	150ℓ
	中		アブラムシ類・さび病・ネギコガ チューリップサビダニ	※ハチハチ乳剤(劇)・1000倍(収穫7日前・2回以内)	100ml	
		防除⑨ (混用事例有)	アブラムシ類・ネギコガ	オルトラン水和剤・1000倍(収穫7日前・2回以内)	100g	150ℓ
	下		葉枯病	ベルクート水和剤・1000倍(収穫3日前・3回以内)	100g	
5	上	収穫	※5月下旬に試し掘りを行い、適期に収穫する。			

※4月以降の散布量を増やす(150ℓ/10a)

※殺菌剤・殺虫剤を散布する際に展着剤(クミテン・散布液100ℓに10～30mlを加用)する。アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない(薬害の恐れ)。

※さび病の発生確認次第、アミスター20フロアブル・2000倍(収穫7日前・3回以内)を散布し防除を行う。

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

1. 耕起及び畝立て

- ・ 苦土石灰、発酵鶏糞を全面散布し、トラクターで、深く細かく耕起する。
- ・ エコ大麦44号を散布し、うね幅140～160cm、うね高25cm程にうね立てし、黒マルチ（幅160～180cmマルチ使用）を被覆する。

基肥一発体系施肥例（kg/10a）

肥料名	基肥	N - P - K
発酵鶏糞	200	4 - 12 - 6
苦土石灰	100	
ようりん	20	4
エコ大麦44号	60	18 - 3 - 5.4
		22 - 19.0 - 11.4

2. 種球の準備

- ・ 品種は「上海早生」を用いる。
- ・ 種球を10a当たり80～100kg準備する。
- ・ 種球を1片ずつに分割する。4g未満の小球、変色や奇形、カビの生えた種球は使用しない。

3. 種球消毒

- ・ 消毒後は、芽が出やすくなるので、植付け3日～前日に種球消毒を行う。
- ・ 種球を網袋に入れ、「ガードホープ液剤（劇）」500倍液に30分間浸漬する。
- ・ 水切り後、湿っている間に「ベンレートT水和剤20」をふりかけ、よく混ぜる。
- ・ 陰干しで、風乾（扇風機等で風を送り表面を乾燥）する。

4. 植付け

- ・ 植付け時期は、9月25日～10月10日とする。
- ・ 株間15cm×条間25cm、4条植え。
- ・ 植付け深さ10cm程度とし、芽が出る方を上にして一片ずつ植え込む。
- ・ 植付け後、管理機等でうね間の土をマルチ上に薄くのせる。
- ・ 圃場周囲に額縁排水溝を必ず設置し、溝と額縁排水溝をしっかり連結し排水を良くする。

5. その後の管理

- ・ マルチ下に入ったままの芽がある場合は、芽をマルチの外に取り出す（芽直し）。
- ・ 2本立ちとなった株は、生育の悪い方を抜き取り1本に間引く（除けつ）。
- ・ 抽たい（蕾の発生）が始まったら随時見回り、花茎を摘み取る（とう摘み）。
- ・ 新球の肥大期に土壌が乾燥した場合は灌水するが、5月下旬以降は灌水しない。

6. 病虫害防除

- ・ 融雪後は春腐病、その後、葉枯病、さび病が発生しやすいので、適期に防除する。

7. 収穫・調製

- ・ 5月下旬頃から試し掘りを行い、球の肥大状況を確認し（球の底部が平らになった頃が適期）、晴天日に収穫する。
- ・ 早すぎると肥大が悪く、貯蔵性が劣り、遅すぎると裂球しやすくなるので適期に収穫する。
- ・ 収穫当日中に、根と茎を切って乾燥を開始する。重量が7割程度になるまで乾燥させる。
- ・ 乾燥後、表面が白くなるまで皮をむき、規格に分けて出荷する。

青ねぎの栽培ごよみ（４月定植）

作 型		2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	品 種
4 月定植		●		○		■		■			■	鴨 頭
時 期		作 業		防 除 体 系								
月	旬			対 象 病 害 虫		薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数と総使用回数)		水100ℓ 当たり薬量		10a当たり 散 布 量		
2	上	播種 防除 葉切り		軟腐病（葉切り前日夕方） さび病・べと病・葉枯病 （葉切り前日夕方） 軟腐病(葉切り前夕方)	バリダシン液剤5 500倍（収穫前日 2回以内） ダコニール1000 1,000倍（収穫14日前 3回以内） スターナ水和剤 2,000倍（収穫7日前 3回以内）		200mℓ 100mℓ 50g		100ℓ 100ℓ 100ℓ			
3	中											
	下											
4	上											
	中	葉切り 耕起・元肥施肥 防除 防除 畝立て・マルチ 定植 除草剤		軟腐病（葉切り後の 雑菌繁殖予防） コガネムシ類幼虫 ネギアザミウマ・ ネギハモグリバエ 萎凋病・小菌核腐敗病 1年生雑草	スターナ水和剤 2,000倍 （収穫7日前 3回以内） ダイアジノン粒剤5（定植時 1回） ベストガード粒剤（定植時 1回） ベンレート水和剤 200倍（定植直前 1回） ゴーゴーサン乳剤（定植後但し定植10日後 1回）		50g 500g 300mℓ		100ℓ 6kg 6kg 5分間浸漬 100ℓ			
	下											
5	上	除草剤		1年生雑草	トレファノサイド乳剤（収穫30日前 2回以内）		300mℓ		100ℓ			
	中											
	下	防除		ハモグリバエ類 シロイチモジヨトウ アザミウマ類	グレースシア乳剤 2,000倍 （収穫7日前 2回以内）		50mℓ		150ℓ			
6	上											
	中	収穫① 防除		ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	ダントツ粒剤（収穫3日前 4回以内）		－		6kg			
	下	防除		軟腐病	バリダシン液剤5 500倍 （収穫前日 2回以内）		200mℓ		150ℓ			
7	上	防除		さび病・べと病 黒斑病・葉枯病	アミスター20フロアブル 2,000倍 （収穫3日前 4回以内）		50mℓ		150ℓ			
	中	防除		シロイチモジヨトウ ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	アフームエクセラ顆粒水和剤 1,000倍 （収穫7日前 3回以内）		100g		150ℓ			
	下	防除		軟腐病	カスミンボルドー 1,000倍（収穫14日前 2回以内）		100mℓ		150ℓ			
8	上	防除		ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	ベストガード粒剤 （収穫前日 3回以内）		－		6kg			
	中											
	下	収穫② 防除		〃	グレースシア乳剤 2,000倍 （収穫7日前 2回以内）		50mℓ		150ℓ			
9	上	防除		シロイチモジヨトウ アザミウマ類 ハモグリバエ類	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）		50mℓ		150ℓ			
	中	防除		シロイチモジヨトウ	※アグロスリン乳剤 1,000倍（収穫7日前 5回以内）		100mℓ		150ℓ			
	下	防除		アザミウマ類 シロイチモジヨトウ ネギハモグリバエ	ディアナSC 2,500倍 （収穫前日 2回以内）		40mℓ		150ℓ			
10	上	防除		〃	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）		50mℓ		150ℓ			
	中	防除		シロイチモジヨトウ	※アグロスリン乳剤 1,000倍 （収穫7日前 5回以内）		100mℓ		150ℓ			
	下	防除		〃	ディアナSC 2,500倍 （収穫前日 2回以内）		40mℓ		150ℓ			
11	下	収穫③ 防除		〃	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）		50mℓ		150ℓ			

○薬剤の効能を高めるために、展着剤（アプローチBIであれば50mℓ/100ℓ）を加用する（アミスター20フロアブル・バリダシン液剤5は除く）。

○軟腐病発生時は、カスミンボルドー1,000倍（収穫14日前 2回以内）を散布し防除を行う。

○大雨や強風の後は、Zボルドー500倍（使用時期・使用回数 制限なし）を散布する。

○さび病発生時には、速やかにアミスター20フロアブル2,000倍（収穫3日前・4回以内）を散布する。

○薬剤の効能を高めるために、展着剤（アプローチBIであれば50ml/100ℓ）を加用する（アミスター20フロアブル・バリダシン液剤5は除く）。
○軟腐病発生時は、カスミンボルドー1,000倍（収穫14日前 2回以内）を散布し防除を行う。
○大雨や強風の後には、Zボルドー500倍（使用時期・使用回数 制限なし）を散布する。
○さび病発生時には、速やかにアミスター20フロアブル2,000倍（収穫3日前・4回以内）を散布する。

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

1. 育苗管理

- ・448穴セルトレイに培土を詰め、播種板(10粒/穴)を活用して播種し、覆土する。
- ・10a作付の場合：448穴セルトレイ55枚・ネギ用培土50L/袋で3袋（床土2袋・覆土1袋）・種子必要量246,400粒。
- ・マイクロロングトータル280・70日タイプ10kg/袋（30g/枚）を床土と均一に混ぜる。
- ・播種後、苗箱を水位1.2cm程度の水に浸け、底面給水させる（かん水量は800g/枚）。
- ・底面かん水後、セルトレイをハウス内のマス目の粗いパレットの上に並べ、地面から離して育苗する（根鉢形成の促進）。

○播種時期

4月中旬定植 → 2月上旬播種（育苗日数：約70日）

○苗管理

- ・発芽するまで、セルトレイを被覆資材（ラプシート等）で被覆する。
- ・播種3日後の朝に被覆資材をめくり、表面が湿る程度かん水した後、再び被覆する。
- ・播種7日後、7～8割の発芽が確認されたら、被覆資材を取り除く。

○かん水

- ・ハウス内の上部かん水（スプリンクラー・スミサンスイ等）を使用する。
- ・培土の乾き具合を6時と11時に必ず確認し、乾燥していればかん水する。
- ・育苗前半（出芽後3週間まで）は、根量が少ないため、乾燥と湿害の両方に注意する。
- ・育苗後半（～定植時）は、生育が旺盛になるので、やや乾燥気味に管理する。

○防除

- ・病害発生の予防のため、右の表を参考に防除する。

農薬の種類	倍率	使用方法
バリダシン液剤5	500	散布
ダコニール1000	1,000	散布
スターナ水和剤	2,000	散布

○葉切り

- ①葉切り前日の夕方にかん水し、乾いた後に右図の殺菌剤を霧状散布する（葉切りの度に薬剤を変える）。
- ②晴れた日の午前中に草丈が8～12cmになるように葉切りする（1回目8cm・2回目10cm）。
定植は12cmを目安とする。
- ③葉切り後は葉先が乾燥するまでかん水しない。乾燥後直ちにかん水する。

2. ほ場の準備

○施肥例

- ・3月の中旬までに牛糞堆肥（完熟）を2t/10aを投入する。

肥料名	基肥 (kg/10a)
苦土石灰	100
過リン酸石灰	60
なっちゃんエース	70

○耕起・畝立て

- ・畝幅150～160cm、畝高さ20cm以上、畝天板の幅100～105cmとする。
- ・畝立て直前に「ベストガード粒剤・6kg/10a」と「ダイアジノン粒剤5・6kg/10a」を散布してから畝立てを行い、白黒ダブルマルチを被覆（白を表に）する。

3. 定植

- ・定植後の立枯れ病防止のため、定植前日にベンレート水和剤を散布する（水30Lにベンレート水和剤を60g溶かし1箱あたり約500ml灌注）。
- ・たまねぎ定植機で定植する（条間24cm・株間13cm・4条植え）
- ・根鉢が十分に形成されていることを確認する。
- ・定植機に苗がくっつくことを防ぐため、定植当日朝はかん水しない。

4. 除草剤

- ・定植後、速やかにゴーゴーサン乳剤をは場全面に散布する。
- ・定植21～28日後を目安にトレファノサイド乳剤をは場全面に散布する。
- ・以後、株元のイネ科雑草はナブ乳剤又はセレクト乳剤を散布し、広葉雑草は抜き取る。

5. 防除

- ・左ページ表を参考に適期防除を実施する。
- ・病害虫の発生が目立つ場合は、収穫前日数に注意して追加で薬剤を散布する。

6. 収穫

- ・草丈が70～80cmになったら収穫をする。
- ・収穫の目安として1回目：6月中旬 2回目：8月下旬 3回目：11月下旬

7. 追肥

- ・右表を参考にやさい燐加安S540をマルチの上から施用する。
- ・葉色が淡ければ、追加でやさい燐加安S540を20kg/10aを施用する。

追肥時期	施用量
1回目の収穫から10日後	20kg/10a
2回目の収穫から10日後	40kg/10a

大麦・にんにく跡 青ねぎの栽培ごよみ

作 型	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	品 種
麦・にんにく跡				●	○		■	■		■	鴨 頭
時 期	防 除 体 系（6月下旬定植）										
月 旬	作 業	対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数と総使用回数)		水100ℓ 当たり薬量		10a当たり 散 布 量				
5	上 中 下	播種 防除 防除	軟腐病（葉切り前日夕方） さび病・べと病・葉枯病 （葉切り前日夕方）	バリダシン液剤5 500倍（収穫前日 2回以内） ダコニール1000 1,000倍（収穫14日前 3回以内）	200ml 100ml		100ℓ 100ℓ				
6	上	葉切り	軟腐病 （葉切り前日夕方）	スターナ水和剤 2,000倍 （収穫7日前 3回以内）	50g		100ℓ				
	中										
	下	葉切り 耕起・基肥施肥 防除 畝立て・マルチ被覆 定植 除草剤散布	軟腐病（葉切りによる 雑菌繁殖予防） コガネムシ類幼虫 ネギアザミウマ ネギハモグリバエ 萎縮病・小菌核腐敗病 一年生雑草	スターナ水和剤 2,000倍 （収穫7日前 3回以内） ダイアジノン粒剤5（定植時 1回） ベストガード粒剤（定植時 1回） ベンレート水和剤 200倍（定植直前 1回） ゴーゴーサン乳剤（定植後但し定植10日後まで1回）	50g 500g 300ml		100ℓ 5分間浸漬 100ℓ				
7	上	除草剤散布	一年生雑草	トレファノサイド乳剤（収穫30日前 2回以内）	300ml		100ℓ				
	中	防除	さび病・べと病 黒斑病・葉枯病	アミスター20フロアブル 2,000倍 （収穫3日前 4回以内）	50ml		100ℓ				
	下	防除	ハモグリバエ類 シロイチモジヨトウ アザミウマ類	グレーシア乳剤 2,000倍 （収穫7日前 2回以内）	50ml		100ℓ				
8	上	防除	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	ダントツ粒剤 （収穫3日前 4回以内）	—		6kg				
	中	防除	軟腐病	バリダシン液剤5 500倍 （収穫前日 2回以内）	200ml		150ℓ				
	下	防除	〃	グレーシア乳剤 2,000倍 （収穫7日前 2回以内）	50ml		150ℓ				
9	上	収穫① 防除	シロイチモジヨトウ アザミウマ類 ハモグリバエ類	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）	50ml		150ℓ				
	中	防除	シロイチモジヨトウ	※アグロスリン乳剤 1,000倍（収穫7日前 5回以内）	100ml		150ℓ				
	下	防除	アザミウマ類 シロイチモジヨトウ ネギハモグリバエ	ディアナSC 2,500倍 （収穫前日 2回以内）	40ml		150ℓ				
10	上	防除	〃	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）	50ml		150ℓ				
	中	防除	〃	※アグロスリン乳剤 1,000倍 （収穫7日前 5回以内）	100ml		150ℓ				
	下	防除	〃	ディアナSC 2,500倍 （収穫前日 2回以内）	40ml		150ℓ				
11	上	防除	〃	ベネビアOD 2,000倍 （収穫前日 3回以内）	50ml		150ℓ				
	中・下	収穫②									

○薬剤の効能を高めるために、展着剤（アプローチBIであれば50ml/100ℓ）を加用する（アミスター20フロアブル・バリダシン液剤5は除く）。
○軟腐病発生時は、カスミンボルドー1,000倍（収穫14日前 2回以内）を散布し防除を行う。
○大雨や強風の前にZボルドー500倍（使用時期・使用回数 制限なし）を散布する。
○さび病発生時には、速やかにアミスター20フロアブル2,000倍（収穫3日前・4回以内）を散布する。

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

1. 育苗管理

- ・448穴セルトレイに培土を詰め、播種板(10粒/穴)を活用して播種し、覆土する。
- ・10a作付の場合：448穴セルトレイ55枚・ネギ用培土50L/袋で3袋（床土2袋・覆土1袋）・種子必要量246,400粒。
- ・マイクロロングトータル280・70日タイプ10kg/袋（30g/枚）を床土と均一に混ぜる。
- ・播種後、苗箱を水位1.2cm程度の水に浸け、底面給水させる（かん水量は800g/枚）。
- ・底面かん水後、セルトレイをハウス内のマス目の粗いパレットの上に並べ、地面から離して育苗する（根鉢形成の促進）。

○播種時期

6月下旬定植 → 5月上旬播種（育苗日数：約50日）

○発芽促進管理

- ・発芽するまで、セルトレイを高温抑制被覆資材（タイベック700AG）で覆う。
- ・毎朝、被覆資材を捲って培土の乾き具合を確認し、表土が湿る程度のかん水をした後に再び被覆する。
- ・7～8割の発芽が確認されたら、被覆資材を取り除く。

○かん水

- ・ハウス内の上部かん水装置（スプリンクラー、スミサンスイ等）を使用する。
- ・培土の乾き具合を6時と11時に必ず確認し、乾燥していればかん水する。
- ・育苗前半（出芽後3週間まで）は根量が少なく、乾燥と湿害の両方に注意する。
- ・育苗後半（～定植時）は、生育が旺盛になるので、やや乾燥気味に管理する。

○防除

- ・病害発生の予防のため、右の表を参考に防除する。

農薬の種類	倍率	使用方法
バリダシン液剤5	500	散布
ダコニール1000	1,000	散布
スターナ水和剤	2,000	散布

○葉切り

- ①葉切り前日の夕方にかん水し、乾いた後に右図の殺菌剤を霧状散布する（葉切りの度に薬剤を変える）。
- ②晴れた日の午前中に草丈が8～12cmになるように葉切りする（1回目8cm・2回目10cm）。定植は12cmを目安とする。
- ③葉切り後は葉先が乾燥するまでかん水しない。乾燥後直ちにかん水する。

2. ほ場の準備

○施肥例

肥料名	基肥 (kg/10a)
苦土石灰	100
過リン酸石灰	60
あきちゃんエース	70

○耕起・畝立て

- ・前作終了後、植え付け1ヶ月前までに硫酸40kg/10aを施用し、前作の残渣とすき込む。
- ・畝幅150～160cm、畝高さ20cm以上、畝天板の幅100～105cmとする。
- ・畝立て直前に「ベストガード粒剤・6kg/10a」と「ダイアジノン粒剤5・6kg/10a」を散布してから畝立てを行い、白黒ダブルマルチを被覆（白を表に）する。

3. 定植

- ・定植後の立枯れ病防止のため、定植前日にベンレート水和剤を散布する（水30Lにベンレート水和剤を60g溶かし1箱あたり約500ml灌注）。
- ・たまねぎ定植機で定植する（条間24cm・株間13cm・4条植え）
- ・根鉢が十分に形成されていることを確認する。
- ・定植機に苗がくつつくことを防ぐため、定植当日朝はかん水しない。

4. 除草剤

- ・定植後、速やかにゴーゴーサン乳剤をほ場全面に散布する。
- ・定植21～28日後を目安にトレファノサイド乳剤をほ場全面に散布する。
- ・以後、株元のイネ科雑草はナブ乳剤、セレクト乳剤の散布、広葉雑草は抜き取る。

5. 防除

- ・左ページ表を参考に適期防除を実施する。
- ・病害虫の発生が目立つ場合は、収穫前日数に注意して追加で薬剤を散布する。

6. 収穫（1回目）

- ・草丈70～80cmになったら収穫する。
- ・収穫時期の目安は1回目は9月上旬、2回目11月中旬。

7. 追肥（収穫後）

- ・収穫10日後にやさい磷加安S540を20kg/10aをマルチの上から施用する。
- ・葉色が淡ければ、追加でやさい磷加安S540を20kg/10aを施用する。

白ねぎ（チェーンポット栽培）の栽培ごよみ

時 期		作 業	防 除 体 系			
月	旬		対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数と総使用回数)	水100ℓ 当たり薬量	10a当たり 散 布 量
4	中	定植、基肥② 除草剤散布	コガネムシ類幼虫 一年生雑草	ダイアジノン粒剤5（定植時1回） ゴーゴーサン乳剤 （定植後但し定植10日後まで1回）	300ml	6 kg 100 ℓ
	下					
5	上	除草、削り込み	一年生雑草	トレファノサイド粒剤2.5 （30日前 2回以内）		5 kg
	中					
6	下	土寄せ①、防除 追肥① 除草	アザミウマ類 ネギハモグリバエ 一年生雑草	ダントツ粒剤（3日前 4回以内） トレファノサイド粒剤2.5 （30日前 2回以内）		6 kg 5 kg
	中					
	下					
7	上	防除	べと病、疫病	アリエッティ水和剤 800倍 （3日前 3回以内）	125 g	100 ℓ
	中		軟腐病	Zボルドー 500倍 （使用時期 使用回数制限なし）	200 g	250 ℓ
	下		軟腐病	オリゼメート粒剤 （30日前 2回以内）		6 kg
	上		アザミウマ類	スタークル粒剤（3日前 2回以内）		6 kg
	中		黒斑病、べと病	ダコニール1000 1,000倍 （14日前 3回以内）	100ml	150 ℓ
8	下	土寄せ③、防除	軟腐病	Zボルドー 500倍 （使用時期 使用回数制限なし）	200 g	250 ℓ
	上		軟腐病	オリゼメート粒剤 （30日前 2回以内）		6 kg
	中		ネギアザミウマ シロイチモンジヨトウ	アファームエクセラ顆粒水和剤 1,000倍 （7日前 3回以内）	100 g	200 ℓ
	下		べと病、黒斑病	ジマンダイセン水和剤 600倍 （14日前 3回以内）	166 g	200 ℓ
9	上	防除 土寄せ④ 防除	軟腐病	カスミンボルドー 1,000倍 （14日前 2回以内）	100 g	200 ℓ
	中		ネギアザミウマ シロイチモンジヨトウ	※アグロスリン乳剤（劇） 2,000倍 （7日前 5回以内）	100ml	250 ℓ
	下		さび病、黒斑病	アミスター20フロアブル 2,000倍 （3日前 4回以内）	50ml	250 ℓ
	上		軟腐病	Zボルドー 500倍 （使用時期、使用回数制限なし）	200 g	250 ℓ
10	中	↑ 収 穫 ↓	軟腐病	ナレート水和剤 1,000倍 （14日前 3回以内）	100 g	100 ℓ
	下		ネギアザミウマ	ダントツ水溶剤 2,000倍 （3日前 4回以内）	50 g	250 ℓ
	上		アザミウマ類 ネギハモグリバエ	ディアナSC 2,500倍 （前日 2回以内）	40ml	250 ℓ
11	中	※茎葉の損傷が懸念されれば、銅剤（Zボルドー等）を散布する。ただし、薬害を避けるため高温時には散布しない。 ※11月中旬以降の収穫予定圃場には10月中旬に追肥する。				
	下					
	上					

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種
春まき夏秋どり 春まき秋冬どり		●		○					■				ホワイトスター

作業の要点

1. 排水対策

転作田では次の排水対策を徹底する。

・額縁排水溝の設置（植え溝より深く）

・サブソイラーによる弾丸暗渠の設置

10aに500m以上

2. 育苗（チェーンポット）

(1)10a 当たり必要苗箱数 畦幅1.2m 約55箱

(2)育苗日数 2月中下旬播種：50～60日
3月上中旬播種：45～50日

(3)育苗管理

①出 芽：水稻出芽機で芽だし後にハウス内に移す。
(20℃ 7日間)

②ハウス内での管理：坪200Wの温床線が必要
(下図のようにハウス内で二重トンネル被覆する。)

・温度管理

日中 15～20℃
夜間 5℃以上

・本葉1枚展開までは、冷
気にあてない

・本葉1枚展開以降は、日
中に換気とかん水が必要。

・本葉2枚展開以降は、夜
間にもすそを開けて外気
に慣らす。

③目標の苗姿

草 丈 16～18cm

葉 数 本葉3枚

葉鞘径 2.5～3.0mm

3. 本畑準備

(1)元肥の全面散布：P H6.0以上の弱酸性で
有機質の多い通気性よい土にする

完熟堆肥 3,000kg
苦土石灰 200kg
BM苦土重焼燐 60kg
なっちゃんエース 80kg

全面散布し、耕起する。

(2) 植え溝切り

・畦幅 100～120cm
(作土の浅い転作田は広くとる。)

・植え溝切りは、土の乾きを防ぐために35cm以上
確保する。

溝の幅は、35cm以上

深さは、15cm以上

細かい土塊があること

4. 定 植

PP苗直下の肥
料濃度を初期生
育を促進する程
度に高める
- N成分3kg/
10a 程度

・定植前にトリフミン
水和剤200倍液をかん注する。

・覆土は、ポットの上
に1cm以上かける。

・定植後、覆土のかか
らない部分を手直し
する。

・定植後に植え溝に散布する薬剤
殺虫剤 ダイアジノン粒剤5
除草剤 ゴーゴーサン乳剤

5. 基肥一発肥料施肥体系（kg/10a）

肥料名	基 肥①	N	P	K
完 熟 堆 肥	3,000			
苦 土 石 灰	200			
重 焼 り ん	60		21	
白ねぎ専用肥料 なっちゃんエース または あきちゃんエース	80	16	4.8	4.8
		16	25.8	4.8

※出荷が11月以降になる場合は10月に追肥する。
※なっちゃん溝施用の場合は、60kgとする。
※夏秋どりはなっちゃん、秋冬どりはあきちゃんを使用する。

6. 土寄せ

(1)除草 除草剤バスタ（収穫前日まで）等にネギにかからないように散布。

(2)土寄せ①（削り込み）

・定植後40～50日、茎径5～7mmの時期に削り込み
で植え溝を埋める。

※茎径が細く、草丈が短い場合、一度に植え溝を埋
めずに三角くわで削り込みを数回に分けて行う。

(3)土寄せ②～④

・2回目以降は、20～25日おきに行う。

(2回目は茎径10mm以上になってから)、あわてない

・生葉数4枚を確保するために、土寄せは5枚目の
付け根までとする。

(4)土寄せ⑤（最終土寄せ）

・葉鞘部分が30cmを超えたら、最終土寄せを行う。

・最終土寄せは、葉の分岐点よりも上までしっかり
土をかける。

・土寄せ後の軟白日数

収穫時期

軟白日数

8月中～9月上 15～20日

9月中～10月中 20～30日

10月下～11月中 30～40日

1回目

2回目

3～4回目

最終土寄せ

かぼちゃの栽培ごよみ

作 型		3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	品 種
普 通		●	○			■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■	くりゆたか
		●		○		■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
時 期	作 業	防 除 体 系						
月 旬		対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数と総使用回数)		水 100 ℓ 当たり薬量		10a 当たり 散 布 量	
3	上	地 温 (25～27℃) の確保が可能であれば中旬に播種						
	中							
	下							
4	上	定植床の準備	べと病 ネキリムシ類	ダコニール1000 1,000倍 (7日前 3回以内) ダイアジノン粒剤 5 (定植時 2回以内)		100ml		100 ℓ 6kg／10a
	中	防除						
	下	定植、トンネルまたはホットキャップかけ 摘心						
5	上	整枝、しきわら 防除	べと病、うどんこ病 アブラムシ類	ダコニール1000 1,000倍 (7日前 3回以内) ※モスピラン顆粒水溶剤(劇) 2,000倍 (前日 2回以内)		100ml 50 g		100 ℓ 100 ℓ
	中							
	下							
6	上	防除、交配	疫病、べと病 アブラムシ類	アリエッティ水和剤 800倍 (前日 3回以内) スミチオン乳剤 1,000倍 (14日前 3回以内)	125 g 100ml	100 ℓ 100 ℓ		
	中	防除	べと病、疫病、炭疽病	ジマンダイセン水和剤 600倍 (21日前 2回以内)	166 g	100 ℓ		
	下	マット敷き 防除	うどんこ病	ストロビーフロアブル 3,000倍 (前日 3回以内)	33 g	100 ℓ		
		玉なおし、防除	うどんこ病	ポリベリン水和剤 1,000倍 (7日前 3回以内)	100 g	100 ℓ		
7	上	↑ 収	うどんこ病	モレスタン水和剤 2,000倍 (3日前 3回以内)		50 g		100 ℓ
	中							
8	上	穫 ↓						
	中							

※大雨や強風の後には、必ずZボルドー500倍（使用時期・使用回数制限なし）を散布する。

作	業	の	要	点
○栽培のポイント ・梅雨時期の防除及び排水対策を徹底し、疫病やうどんこ病の発生を最小限に食い止める。吸肥力の強い作物なので、チッソ過多による「つるボケ」に注意する。 ・樹勢が小さく果実に直射日光が当たる場合は、日焼け防止対策を実施する。				

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

1. 育苗管理

- ・播種床は25～27℃を確保する。（まき床は、播種2日前より十分にかん水し、地温を確保しておく。）

播種：条間6cm、株間6cmとし覆土は1cmとする。播種後たっぷりかん水し、新聞紙で覆う。発芽後は早めに新聞紙を取り除く。

鉢上げ：本葉1.5枚時にポリポットに移植する。床温を20～22℃とし活着を促す。

活着後は床温を徐々に下げて最低地温15℃を確保する。

低温短日処理：花芽分化促進のため、低温短日処理を行う場合は、鉢上げ活着後～本葉3枚頃まで行う。

- ・低温処理は夜温10～12℃、短日処理はコモで8時間に制限する。夕方4時から朝8時まで遮光する。
- ・苗の順化は、定植1週間前から徐々に外気にあて、かん水は控え気味にしてしっかりした苗に仕上げる。

育苗日数 30～35日 本葉4～5枚

2. ほ場準備

- ・基肥を施用し耕起うね立てする（額ぶち排水溝を設置しておく。）
- ・うね幅は3.5m、株間0.9mとする。（植付け本数 約250本/10a）

3. 施肥（kg/10a）

肥料名	基 肥	追 肥	
		①	②
完熟堆肥	2000		
苦土石灰	100		
ようりん	20		
固形30号プラス	60	30	
燐硝安加里 S 604	5		30
		N14.6	P 12.5 K 13.9

※完熟堆肥・苦土石灰は全層に、ようりん・固形30号プラス、燐硝安加里 S 604は植付けうね部分に施肥する

4. 除草剤散布・マルチ

- ・うね立て後、全面（ツルを配置する場所にも）にクレマート乳剤200～400ml/10aを散布する。定植7日前にマルチを行い、地温を上げておく。

5. 定植

- ・本葉5枚で摘心したものを植え付け、十分かん水後トンネル又は白寒冷紗をかける。

6. 温度管理

- ・定植後は7～10日位高温にならない限り密閉して生育を促進する。それ以降は順次換気して外気温が15～17℃に安定したらトンネル又はホットキャップを除去する。

7. 整枝

- ・トンネル又はホットキャップ除去後、勢いの揃った子ヅル3本仕立てとする。
- ・側枝は子ヅルの1番果が着果する8節程度まで、早めに摘み取る。

8. しきわら・追肥

- ・ツル先がマルチより出始める頃まで雑草が多い場合はバスタ液剤を畦間に散布した後、しきわらをまたは遮光ネットをしく。
- ・追肥①はトンネル除去前（しきわら前）に、株元から約1m先に施用する。追肥②は1番果がこぶし大になった頃、ツルの先に施用する。ただし、ツルが旺盛に繁茂しているときは追肥をしない。

9. 交配

- ・早い時期の着果には訪花昆虫も少ないので、確実に着果させるには人工交配が必要である。雌花が開花したら、雄花の花粉の発生を確認し早朝から9時ころまでに交配をする。
- ・1番果の着果節位は10節前後が理想的である。低節位に着果した果実や変形果は早めに摘果する。

10. マット敷き 着果後15日で果色がやや黒緑色に変化した頃にフルーツマットを丁寧に敷く。

11. 玉直し 果形と果色が均一に美しく仕上がるように、収穫10日前に正座させる。

12. 収穫

- ・一番果の収穫は開花後40～50日を目安とするが、完熟果を収穫するためには、果梗に5～6本の亀裂が生じ、コルク化してから収穫する。2番果は果皮の艶がさめてきた頃を収穫適期とする。
- ・屋内で5日風乾して果面、果梗を乾燥させ、腐敗果のでないことを確認の上出荷する。

みょうがの栽培ごよみ

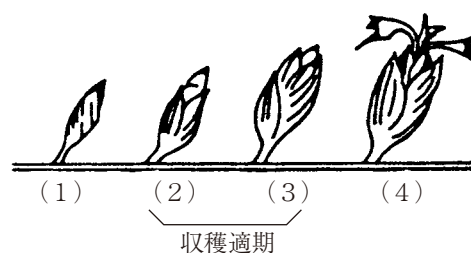
時 期	生育状況	作 業 及 び 防 除
月 旬		
3 中	萌芽期	○融雪 ・ 除雪や『ミネカル』80～100kg/10a等の融雪資材散布による萌芽の促進
3 下		
4 上		
4 中		○除草 ・ 萌芽前に除草剤の『ザクサ液剤』散布
4 下		○地下茎の間引き ・ 畑一面の地下茎は20cmの幅で間引く
5 上	花芽分花期	○施肥 ・ 萌芽期に『そさい3号プレミアム』を20kg/10a散布
5 中		○被覆資材の敷込 ・ 基肥散布後、落ち葉やカヤ等を厚さ10cm位敷込む
5 下		・ 除草剤散布後、残った雑草は手で取る
6 上		○間引き ・ 本葉8枚頃を目安に 厚い所を12cm角に1本位に間引く
6 中		○追肥 ・ 間引き作業終了後、 『そさい3号プレミアム』を20kg/10a散布
6 下	花蕾発生期	○防除 ・ 『ダコニール1000』（収穫14日前まで4回以内）の1,000倍液を散布
7 上		・ 梅雨明け後、降雨が少なく圃場が乾く場合は灌水する
7 中		
7 下		
8 上		○収穫 （本葉12枚頃） ・ 収穫適期を逃さないように収穫
8 中	根茎充実期	・ 花蕾の洗浄・水切り・選別・箱詰めの各作業は特に注意をはらう
8 下		・ 花芽の出た物は絶対に出荷しない
9 上		
9 中		
9 下		
10 上		○施肥 ・ 『ようりん』を40kg/10a散布
10 中		・ 『苦土石灰』を40kg/10a散布
10 下		○次年度準備 ・ 来春用の被覆資材（落ち葉、カヤ等）を確保

◎出荷規格（1kg入用ダンボール箱）

等 級	選 別 基 準
A	花蕾(みょうが)の80%以上紫紅色となっているもの
B	花蕾(みょうが)の60%以上紫紅色となっているもの
C	上記以外のもの

- ・ 花芽の出た物や病害虫におかされた物は除く
- ・ 洗浄後の水切りを十分に行う
- ・ ゴミ等の異物が混入しないように注意する
- ・ 柄は1cm以内に切り揃える

収穫の目安



栽培要点

生育状況	要 点
融雪	早期出荷のために、春の融雪作業を行う ・ミネカル、ケイブン等の黒色の資材散布 ・除雪機、手作業等で圃場の除雪
除草	みょうがに登録のある除草剤の散布 1) 既存圃場 『トレファノサイド粒剤2.5』 ・散布時期 萌芽前（雑草発生前） ・10a 当たり使用量 6 kg/10 a ・使用回数 1 回 全面土壌散布 『ザクサ液剤』 ・散布時期 萌芽前又は畦間処理（14日前まで） ・10a 当たり使用量 薬量300～500mlに対し水100～150ℓ ・使用回数 2 回以内 雑草茎葉散布 2) 新植圃場 『ラウンドアップマックスロード』 ・散布時期 耕起前まで（雑草生育期） ・10a 当たり使用量 薬量200～500mlに対し水50～100ℓ ・使用回数 1 回 雑草茎葉散布 ※野菜類で登録あり
地下茎の間引き 被覆資材の敷込	年数経過とともに地下茎が一面に広がる為、畝間20cm位を間引く 落葉やカヤの敷込みは畝全体に厚さ10cm位を目途に敷込む ・カヤは30～40cmに切って敷込む 敷込み時期は、畑全体に萌芽が見えた時期 ・早すぎると……地温が上がらず萌芽が遅れる ・遅すぎると……萌芽した芽が傷つく
間引き	みょうがの品質向上と病気の予防のため6月下旬から間引きの作業を行う ・時期 本葉8枚の頃より開始 ・間引きの程度 親木の間隔が12cm位あく程度 （長靴を履いて楽に通れるくらい）
病虫害防除	○根茎腐敗病 『ユニフォーム粒剤』 ・18kg/10a 収穫30日前まで 使用回数2回以内 土壌表面散布 『オラクル顆粒水和剤』 ・3ℓ/m ² (2,000倍) 収穫3日前まで 使用回数3回以内 土壌灌注 ○ハスモンヨトウ 『フェニックス顆粒水和剤』 ・2,000倍 収穫前日まで 使用回数3回以内

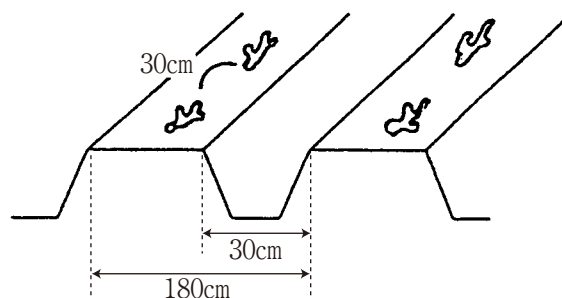
◎みょうが畑の新植（改植、更新）の手順

1. 圃場の準備

施肥

10a当たり

肥料名	基 肥	追 肥	
苦土石灰	100kg		
ようりん	80kg		
完熟堆肥	4 t		
そさい3号プレミア		20kg	20kg



2. 大型のトラクターによる深耕、碎土

3. 畝立……排水を徹底するため、高い畝にする

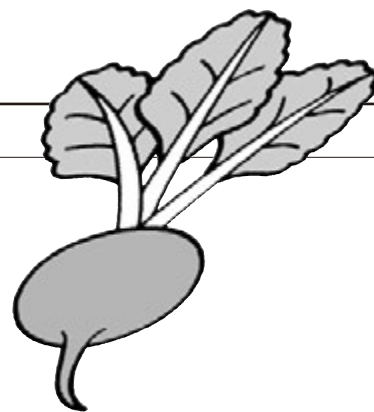
4. 苗の植え込み

- ・根茎での植え込み……苗の掘り起こし時期は4月（萌芽前）又は11月（親木の枯れ上がり後）
- ・間引き苗での植え込み…5月中旬～下旬の間引き時に地下茎のついた苗を植え込む

赤かぶの栽培ごよみ

時 期		作 業 内 容	防 除 体 系			
月	旬		対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収 穫 前 日 数 と 総 使 用 回 数)	水 100 ℓ 当 た り 薬 量	10 a 当 た り 散 布 量
9	上	本田準備 雑草が多いほ場 ラウンドアップマックスロード		耕起前 1 回	500ml	100 ℓ
		基肥・耕起 ・完熟堆肥 2,000kg/10 a ・苦土石灰 100kg/10 a ・鮮菜200 90kg/10 a ・フロンサイド粉剤	根こぶ病	播種又は定植前 1 回 (全面土壌混和)		30kg 40kg
		畝立て				
	中	播種 ・ダイアジノン粒剤 5 除草剤散布 ・ラッソー乳剤	キスジノミハムシ 一年生雑草	播種時 1 回 (作条散布) 播種直後 1 回		6 kg 100 ℓ
		・Z ボルドー 500倍 ※野菜類で登録あり	軟腐病	生育中	200g	200 ℓ
		間引き 1 回目、追肥 ・そさい追肥専用 10kg/10 a ・マラソン乳剤 1,000～3,000倍 1,000倍	アブラムシ類 アオムシ	14日前 4 回以内	100～33ml 100ml	200 ℓ
10	下	間引き 2 回目、追肥 ・そさい追肥専用 20kg/10 a ・フェニックス顆粒水和剤 2,000～4,000倍	コナガ ハイマダラノメイガ	収穫前日まで	50g	100～ 300 ℓ
	上					
	中					
	下					
11	上					
	中					

作 業 の 要 点

**1. 本田準備****(1) 排水対策**

- ・ 額縁排水溝を設置する。
- ・ サブソイラーで弾丸暗渠を掘る。

(2) 除 草

- ・ 雑草が多い圃場は耕起前までにラウンドアップマックスロードを散布。
※野菜類で登録あり

(3) 耕起、基肥施用

- ・ 苦土石灰、完熟堆肥、フロンサイド粉剤を散布して、十分耕起する。

(4) 畝高と畝幅

- ・ 畝 高 20～25cm 畝 幅 1～1.2m

2. 播 種

- ・ 播種時に散布するダイアジノン粒剤5は播種前に播種溝に土壌混和する。
- ・ 栽培規模に応じて、5～7日間隔の段まきとする。
- ・ ダイアジノン粒剤5を条まき後、1株3～4粒の点まき（シーダーテープ）
- ・ 栽植密度 株間20cm、条間30～40cm 2条
- ・ 播種直後に10aあたりラッソー乳剤150mlを100ℓの水で希釈し全面土壌散布する。
- ・ 9月の長雨で発芽不良が起きる事があるので、播種後1週間で発芽しなければ追いまきする。
- ・ 病害発生前にZボルドーで細菌病の予防散布
※野菜類で登録あり

3. 間引き**(1) 間引きの回数**

- ・ 2回行って、1株1本とする。

(2) 間引き、追肥の目安

- ・ 1回目：本葉2～3枚時
- ・ 2回目：本葉5～6枚時

*一度根こぶ病の出た圃場は、最近でも7～8年間白菜、ブロッコリー等のアブラナ科作物を作付けないこと。

*大雨や台風などで病害の発生が予想される場合はZボルドー（500倍）で防除する。

※野菜類で登録あり

4. 収 穫

- ・ 根径7～8cmの時期を目安に収穫する。
- ・ とり遅れると割れや「す入り」が出るので注意する。

馬鈴薯の栽培ごよみ

作 型		3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	品 種
普 通		○	○			■ ■ ■ ■	■ ■ ■ ■	男 爵
時 期		作 業	防 除 体 系					
月	旬		対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収穫前日数と総使用回数)		水100ℓ 当たり薬量	10a当たり 散 布 量	
3	中	ほ場準備	そうか病	フロンサイド粉剤 (植付前)			30kg	
	下	種いも消毒 ↑	そうか病	アタッキン水和剤 40倍 10秒間種いも浸漬(水1ℓに対し) (植付前 1回) (薬量25g)				
4	上	定 植 ↓	ケラ・ネキリムシ類	ダイアジノン粒剤 5 (植付前 1回)			6 kg	
	下	除草剤散布	1 年生雑草	トレファノサイド粒剤2.5 (植付後～萌芽前 1回)			5 kg	
5	上	芽かき						
	中	追肥・培土	疫病	ダコニール1000 1,000倍 (7日前 5回以内)		100ml	100 ℓ	
	下		疫病	リドミルゴールドMZ 500倍 (30日前 1回以内)		200 g	100 ℓ	
			アブラムシ類	ジェイエース水溶剤 1,000倍 (30日前 2回以内)		100 g	100 ℓ	
6	上		疫病	ジマンダイセン水和剤 500倍 (7日前 10回以内)		200 g	200 ℓ	
	中	培土	疫病	カスミンボルドー 800倍 (7日前 3回以内)		125 g	300 ℓ	
	下		疫病	Z ボルドー 400倍 (- -)		250 g	200 ℓ	
7	上 中 下	↑ 収 穫						
8	上 中	↓						

作 業 の 要 点
○栽培のポイント ・ 発蕾期における疫病防除の徹底

1. 圃場準備

排水条件のよいほ場を選定し、出来るだけ深く耕起する。また、湿害対策として、額縁排水溝は必ず設ける。土壌水分の多い状態で耕すと碎土が不十分となるので耕起は適期に行う。

2. 施肥 (kg/10a)

肥料名	基 肥	追 肥	成分量		
			N	P	K
完熟堆肥	2,000		4	2	3
苦土石灰	40				
鮮菜200	100		12	10	10
I B化成S 1 号		40	4	4	4
合計			20	16	17

* 未熟な有機物は施用しない

* 完熟堆肥は、そうか病を引き起こす可能性が高いので前作に施用し、当該作には施用しない

3. そうか病・害虫対策

そうか病の発生が予想される場合は、植付け前にフロンサイド粉剤 (30kg/10a) を全面施用する。

ケラ・ネキリムシ類対策として植付け前にダイアジノン粒剤 5 (6kg/10a) を施用する。

4. 定 植

(1) 晩霜による萌芽や幼植物の被害がない限り、出来るだけ早植する。(3月下旬～4月上旬)

(2) 種いも準備

種いもは、健全なものを10アール当たり120kg用意する。

種いも消毒：そうか病対策として、アタッキン水和剤40倍液に10秒間種いもを浸漬する。消毒後風乾する。

小さい種いもはそのまま使用するが、大きな種いもは一片が50g前後になるよう頂軸部に沿って縦切りして用いる。

(3) 栽植方法

畝幅110cmの場合株間30cmの1条植えとし、植付け後覆土は7～8cmとやや多めにかけ霜害を防ぐ。

(4) 除草剤散布

覆土後トレファノサイド粒剤2.5を5kg/10a 全面土壌散布する。

5. 芽かき

出芽がそろったら早めに芽かきを行い、1株1～2本立てとする。

6. 培土・追肥

培土はいもの着生を容易にし、緑化いもの発生を防いだり、主茎の倒伏防止や雑草の抑制、病原菌の侵入を少なくするなどの効果がある。

ただし、多量の培土は生育を一時的に抑制するため、2回に分けて行う。なお、1回目は草丈が約20cmになった頃に行い、2回目は主茎に蕾が見え始める前に終える。追肥は1回目の培土時に施す。

いもの肥大最盛期は梅雨期にあたるので、停滞水による生育の抑制や病害発生を抑えるため、培土時にできた溝はつなぎ、排水口と連結させる。

7. 収穫・調製

収穫：収穫調製時の剥皮や打ち傷等を少なくするため茎葉が黄変してから掘り取る。(掘り取り1週間前に茎葉を刈り取っておくと剥皮しにくい。) 晴天からやや曇天の日を選んで掘り取る。畝上で1～2時間乾かし、収穫する。

収穫したいもは、直射日光が当たらない、風通しの良い所に広げ、3～4日間よく乾かしてから、選別調製する。

7月中旬～8月上旬を目標に出荷する。

さつまいもの栽培ごよみ

時 期		作 業	防 除 体 系			
月	旬		対 象 病 害 虫	薬 剤 と 濃 度 (収 穫 前 日 数 と 総 使 用 回 数)	水100ℓ 当り薬剤量	10a 当り散布量
3	中	種 芋 準 備 種 芋 消 毒	黒 斑 病	トップジンM水和剤 500倍 (植付前1回)	200g	浸漬消毒 (30分)
	下	苗 床 作 り 伏 込 り 温 度 管 理 か ん 水				
4	上中下			※コガネムシ類幼虫多発が懸念される場合、 畝立て前に、ダントツ粒剤を10a当たり 9 kg散布して、全面土壌混和する。		
5	上	基 肥 ① 耕 除 ① 畦 立 て 防 マ ル チ ン グ 苗 消 毒 定 か ん 植 水	ネコブセンチュウ コガネムシ類幼虫	ネマトリンエース粒剤 (植付前1回)	500g	土壌混和 20kg 5kg さし苗 基部浸漬 (30分)
	中			ダイアジノン粒剤5 (30日前まで3回以内)		
	下		黒 斑 病	ベンレートT水和剤20 200倍 (植付前1回)		
6	上					
	中					
	下					
7	上	か ん 水 ③ 防 除 ④	イモコガ	アディオン乳剤 3,000倍 (7日前まで5回以内)	33ml	200ℓ
	中		イモコガ ハスモンヨトウ ナカジロシタバ	※オリオン水和剤40(劇) 1,000倍 (前日まで5回以内)	100g	200ℓ
	下					
8	上					
	中					
	下					
9	上	青 果 用 収 穫				
	中					
	下					
10	上	種 芋 用 収 穫				
	中					
	下					

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

●…種まき ○…植えつけ □…収穫

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種 名
マ ル チ 栽 培					○	○	○	○	○	○			鳴門金時 ベニハルカ

作 業 の 要 点

1. 種イモの準備

- ・種イモ100kg/10aを準備する。
- ・無病健全で品種の特性を備えた200～300gのイモを選ぶ。

2. 苗床作りと種イモの伏込み

- ・苗床必要面積は2～3坪/10aとする。
- ・種イモの伏込みは、定植50日前に行う。
- ・床土の深さ15cm、小イモは床の周囲、大イモは中央部に首部を同一方向に並べて覆土する。
- ・かん水を十分行い、ワラもしくは籾殻を厚さ5cm程度に覆う。
- ・発芽までは30℃に保つ。(200W/坪)
- ・採苗後、硫酸を坪当たり50g施用し、たっぷರಿかん水する。

3. 育苗管理

- ・発芽揃後、床温は日中22～25℃・夜間18℃に保ち、晴天時の高温障害に注意する。
- ・かん水は、生育の劣る場所を多めにし、生育を均一にする。
- ・床温が30℃以上になると種イモが腐敗するので注意する。

4. 基準施肥

(kg/10a)

肥 料 名	基 肥	備 考
BMサツマイモ専用	120	・基肥は、定植10日前に全層施肥する。 ・前作も考慮してツルボケさせないように窒素成分を控える。

5. 定 植

- ・定植の5～7日前にマルチを行い、地温を上げておく。
- ・植え付けは、風のない日を選び地温が12℃以上の時期から始める(5月上旬以降)。
- ・うね幅90cm・株間30cmで苗は斜め4～5節土中に差し込む。

6. か ん 水

- ・植え付け後は、活着を早めるため十分にかん水する。
- ・植付後30～40日間は、イモの形状や大きさが決まるので、水不足とならないよう十分かん水する。

7. 雑草対策

- ・10aあたりバスタ液剤(畦間処理・収穫14日前まで 2回以内)200～500mlを水150ℓで希釈し、グラカバーを使用して畦間散布する。

8. 収 穫 貯 蔵

- ・定植後100～120日を目標に収穫する。
- ・イモの表皮に傷をつけないように注意する。



さといもの栽培ごよみ

○…植えつけ □…収穫

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	品 種 名												
マルチ栽培														石川早生 大和												
月	作 業	作 業 の 要 点																								
4	種芋準備	○ 種芋の準備 ・ 種芋は丸型で1個が50～60g程度の大きさで病害にかかっていないものを選ぶ。（切口に赤いスジのないもの） ・ 休眠からさめ、芽が伸び出したものを使用する。 ・ 種子伝染病を防止するため、ベンレートT水和剤20で種芋を粉衣消毒（種芋の0.5%）しておく。 ○ 品 種 ・ 石川早生 子・孫芋の着生と肥大が早く、子芋は丸型で多収性品種。 （収穫が遅れると、生理障害が発生しやすい） ・ 大和 芋質は粘りがあって良質で、形は米俵型に近い早生丸土垂の系統。子・孫・孫芋の着生が良く、肥大良好で収穫適期が比較的長い品種。 （収穫が遅れると、割れいもが発生しやすい）																								
	ほ場準備	・ 排水のよい圃場で、灌水のし易い圃場を選ぶ。 ・ 完熟堆肥を十分に施肥し、できるだけ早めに深く耕しておく。 ・ 施肥から畝作りまで一度に仕上げる。 ○ 施 肥（kg／10a） <table><thead><tr><th>肥料名</th><th>基肥量</th></tr></thead><tbody><tr><td>完熟堆肥</td><td>2,000</td></tr><tr><td>苦土石灰</td><td>120</td></tr><tr><td>よ う り ん</td><td>80</td></tr><tr><td>L P s 989</td><td>200</td></tr><tr><td>けい酸加里プレミア34</td><td>40</td></tr></tbody></table>													肥料名	基肥量	完熟堆肥	2,000	苦土石灰	120	よ う り ん	80	L P s 989	200	けい酸加里プレミア34	40
	肥料名	基肥量																								
完熟堆肥	2,000																									
苦土石灰	120																									
よ う り ん	80																									
L P s 989	200																									
けい酸加里プレミア34	40																									
植え付け	・ 株間40cm、条間35cmの2条植え ・ 畝の高さは高めに、排水を良くしておく。 ・ 植え付け時、種芋の芽が出るところを上にして10cmの覆土がかかるようにし、極端な深植えにならないように注意する。 ・ 植え付け直後にマルチを行い、生育促進と雑草防止に努める。																									

月	作 業	作 業 の 要 点
5	芽直し	・芽が出始め、マルチを突き上げてきたら素早く穴を開け、高温障害にならないようにする。 ・芽が4～5本出た場合は除去し1本立ちとする。
	灌 水	・晴天が4～7日続き、葉に水が溜まらなくなったら灌水を行う。梅雨期がすぎると干害を受けやすいので注意する。 (灌水は地温が低い時間帯に1～2時間程度畝間灌水する)
7	子ズキの 処 理	・石川早生 脇より出る子ズキは刈り取り、子芋の秀品率を高める。 ・大 和 5月中旬までの植えつけで、初期生育が良好な場合は刈らずに放任した方が孫芋の着生・肥大が良い。 ・遅植えや、生育が遅れている場合は、孫芋の肥大が悪くなるので、子ズキを刈り栄養を集中させると良い。
10	収穫・貯蔵	・収穫は茎葉が黄変して肥料が切れてから掘り取る。 ・収穫は晴天で畑が乾いているときに掘り取る。 ・試し掘りを行い、1株あたりの重量やL以上比率を勘案して収穫開始時期を決める。 ・貯蔵しようとする芋は、親から子芋を外さないで逆さまに風乾し、温度変化の少ない冷暗所で貯蔵する。

<病害虫防除>

乾腐病

種芋感染・土壌感染する。芋の表皮が浮いてフカフカしたり、芋の結合部に赤褐色のスジや斑点が見える。無病の種芋を用いるとともに、罹病株をほ場外に持ち出し処分する。

アブラムシ

葉の裏に、小さな虫が群生して吸汁する。7月下旬～8月中旬に発生する。梅雨明け後、急増するので、発生が少ないうちに防除する。

※エルサン乳剤(劇) 1,000倍 収穫7日前まで 使用回数1回

アディオン乳剤 2,000～3,000倍 収穫7日前まで 使用回数5回以内

ハダニ

葉がカスリ状に白く退色し、やがて褐変、最後は葉全体が枯れあがる。高温乾燥を好み梅雨明け後、急増し8月下旬にピークとなる。発生が少ないうちに防除する。

※コテツフロアブル(劇) 2,000倍 収穫7日前まで 使用回数2回以内

ハスモンヨトウ

卵を塊で産み、ふ化後～中齢幼虫までは集合して葉を食害し、中齢幼虫以降は隣接の株に分散し、食害を続ける。8月下旬～10月に多発する。発生初期に防除する。

※ハクサップ水和剤(劇) 2,000倍 収穫3日前まで 使用回数5回以内

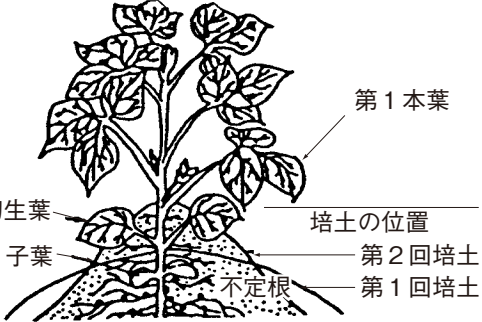
アディオン乳剤 2,000倍 収穫7日前まで 使用回数5回以内

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

黒大豆栽培（枝豆）ごよみ （品種 丹波黒）

準備する種子量

4 kg/10 a

生育	播種準備～播種・発芽期		開花期・	
	6月	7月	8月	
農作業名	排水対策 土づくり資材・堆肥施用 基肥施用・耕起 ダイアジノン粒剤5 6 kg/10 a タネバエ・ネキリムシ防除 除草剤散布 トレファノサイド粒剤2.5 適期播種 6月下旬～7月上旬 培土 1回目 追肥 2回培土直前 培土 2回目 培土 3回目 			
栽培基準のポイント	排水対策 ・額縁排水溝の設置や心土破碎によりほ場の乾きをよくする。 ・排水口は深く掘り下げる。 土づくり ・地力の低いほ場では堆肥を施用する。 ・土壌PH 6.5～6.5を目標に石灰質資材を散布する。 栽植本数 130×40～50 cm（2粒まき） 10 aあたり株数 1,500～2,000本 除草剤散布 ・除草効果を高めるために土の湿っている播種直後にまく。 培土 ・倒伏防止、雑草防除、新根発生のため、早めに実施する。 3回目…開花期までに、分枝の付け根まで 2回目…本葉5葉期頃に初生葉が隠れる程度 1回目…本葉3葉期頃に子葉が隠れる程度			

土づくり	堆肥 2 t 苦土石灰 100kg／10 a ＋ 粒状ようりん 40kg／10 a または シエルホス 100kg／10 a	基肥	基肥555 15kg／10 a	追肥	NK化成2号 又は硫安 10～15kg ／10 a
------	---	----	-----------------	----	------------------------------------

莢伸長期	子実肥大期	黄葉期・収穫期	
9月	10月	11月	12月

殺虫剤

殺虫剤

枝豆収穫期

葉もぎ
収穫・脱莢脱粒
乾燥手選別
調整

畦間除草剤

作物名	農薬名	使用量 (10a当り)	雑草・ 適用病害虫	使用 時期	使用 回数
黒大豆 枝豆	ラウンドアップ マックスロード	500mℓ (水25～ 100ℓ)	1年生雑草	収穫前日 まで	2回 以内
黒大豆	バスタ液剤	500mℓ (水100～ 150ℓ)	1年生雑草	収穫28日 前まで	3回 以内
枝豆	バスタ液剤	500mℓ (水100～ 150ℓ)	1年生雑草	収穫14日 前まで	3回 以内

殺虫剤

作物名	農薬名	使用量 (10a当り)	雑草・ 適用病害虫	使用 時期	使用 回数
黒大豆 枝豆	スミチオン 乳剤	1,000倍 (水100～ 300ℓ)	・マメシクイガ ・カメムシ類 ・アブラムシ類	収穫21日 前まで	4回 以内
黒大豆 枝豆	トレボン乳剤	1,000倍 (水100～ 300ℓ)	・マメシクイガ ・カメムシ類 ・ハスモンヨトウ	収穫14日 前まで	2回 以内
黒大豆 枝豆	※アグロスリン 乳剤(劇)	2,000倍 (水100～ 300ℓ)	・マメシクイガ ・カメムシ類 ・フタスジヒメハムシ	収穫7日 前まで	3回 以内
黒大豆 枝豆	アタブロン 乳剤	2,000倍 (水100～ 300ℓ)	・ハスモンヨトウ	収穫14日 前まで	2回 以内
黒大豆	ブレバソン フロアブル5	4,000倍 (水100～ 300ℓ)	・マメシクイガ ・ハスモンヨトウ	収穫7日 前まで	2回 以内
枝豆			・マメシクイガ ・ハスモンヨトウ ・ウコンノメイガ	収穫3日 前まで	3回 以内
黒大豆	グレースィア 乳剤	2,000～ 3,000倍 (水100～ 300ℓ)	・マメシクイガ ・ハスモンヨトウ	収穫14日 前まで	2回 以内
枝豆			・ウコンノメイガ ・フタスジヒメハムシ ・ハダニ類	収穫前日 まで	

※劇物農薬です。引渡の際には印鑑が必要です。

収
穫

・刈り取った株を逆さにし、3～4株立てかけて2～3日乾かす。
・い機で行う。
・茎葉が黄変し、莢が褐色になったら、鎌、株切り鋏、刈払

脱
粒

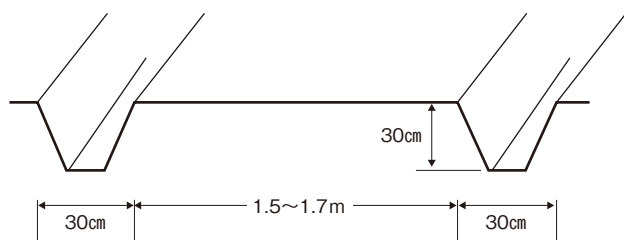
・子実に損傷がないか確認する。

手
選
別

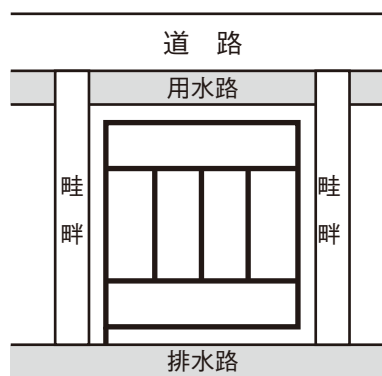
・被害粒、裂皮粒、扁平粒、しわ粒を出荷基準にあわせて取り除く。

そばの栽培ごよみ

月旬	生育状況	作 業 及 び 防 除
8	上 排水 耕起 施肥 整地 うね立て 播種	・ほ場周辺と内部に排水溝を作る。 ・播種前に施肥、整地を行う。 - うね幅1.5～2m（排水の悪いほ場は狭くする） ・充実した種子を選択。 ・シーダーで播種。播種は必ず覆土をする。排水溝の整備。 ・苗立本数㎡当り100～150本程度。
	中 出芽期	
	下 着蕾期	
9	上 開花始期	・播種後20～25日位で開花し始める。 ・ハスモンヨトウ発生初期の防除（播種後25～30日） ロムダンフロアブル 2,000倍液 （収穫21日前まで 2回以内） ・追肥は、倒伏の恐れがあるので行わない。
	中 開花盛期	
	下 開花終期	
10	上 成熟期 収穫期	・収穫（子実全体の65～70％程度が黒緑色になった頃） ・収穫後、早めに送風する。 ・乾燥（水分14～15％）乾燥温度上限40℃まで。 ・脱穀後は、静置式乾燥機で乾燥する。 ・唐箕選で精選する。
	中	
	下	



ほ場排水模式図



○品種と特徴

品 種

・とよむすめ ・常陸秋そば

生育ステージ

開花始期：播種後20日頃

成熟期：播種後60～70日頃

○栽培ポイント

1. ほ場準備

(1) 排水対策

- ・湿害には非常に弱く、ほ場の乾燥が悪いと発芽不良や不揃いとなるため、作付け予定地では融雪直後に額縁排水を掘り、乾燥に努める。

(2) 施肥

- ・耕起前に基肥を全面散布する。(堆肥使用の場合、基肥不要)

基肥555 (・ 単作 7kg/10a
 ・ 麦跡 5kg/10a

苦土石灰 40～60kg/10a (土壌PHはPH6.0～6.5にする)

(3) 耕起

- ・耕起の深さは15cm程度で、通常のロータリで耕起・整地を行うが、碎土はできるだけ丁寧にする。

(4) 畦立て・整地

- ・畦幅1.5～2.0m、畦高30cm、畦間30cmで畦立てを行う。生育期間中の排水不良は、収量や品質低下を引起し、病気の発生要因となるので停滞水とならないようにする。

2. 播 種

- ・播種は条播き、ばら播きのどちらかでも良いが、薬剤散布を行う場合は条播きとする。
- ・播種量は、作付の時期により若干異なるが、秋そばの場合は10a当たり4～5kgが基準である。

表 播種量

播種時期	播種量 (条播) (kg/10a)
8月 上旬	3～4kg (地力に応じて)
8月 中旬	4kg
8月 下旬	5kg

3. 害虫防除

- ・開花期にハスモンヨトウの予防防除として、ロムダンフロアブルの2,000倍液を散布する。(収穫21日前まで 2回以内)

4. 収 穫

- ・全体の子実の65～70%程度が黒緑色になった時期に刈り取る(播種後60～70日)。
- ・コンバインの脱穀部の受け網は、そば用の格子式またはロール式に変更して収穫する。
- ・機械での刈取は、晴天日に露が落ちてから作業を行う。
- ・刈り遅れは、脱粒による収量の損失や穂発芽の危険性の増大につながるので、適期収穫に努める。

5. 乾燥・脱穀

- ・手刈りの場合 小束にして、はさ干しやほ場での島立てで乾燥する場合は、7～10日脱穀後に地干しにより、水分含有率14～15%になるまで乾燥する。
- ・機械刈りの場合 地干しや静置型乾燥機で乾燥する。高温熱風による急激な乾燥は、品質を落とすので40℃以下で行う。

6. 精 選

- ・唐箕などを利用し、可能な限り精選するよう心がける。

主な園芸農薬と使用方法

(殺虫剤)

農 薬 名	害 虫 名 (例)	系 統	(未成熟) とうもろこし	じゃがいも	カ ブ	大 根	にん じん
アグロスリン乳剤 (劇)	アブラムシ類	ピレスロイド	○7				○7
アフーム乳剤	コナガ・アザミウマ類・ダニ類	アベルメクチン	○3		○3	○7	○前
エルサン粉剤2	アオムシ・コナガ・アブラムシ類・ハスモンヨトウ	有機リン		○14	○30	○30	
エルサン乳剤 (劇)	アオムシ・アブラムシ類・アザミウマ類	有機リン	○14	○14	○30	○30	○90
オルトラン粒剤	アオムシ・アブラムシ類・アザミウマ類	有機リン		○植	○21	○播	
オルトラン水和剤	ヨトウムシ・アオムシ	有機リン	○7	○30			
コテツフロアブル (劇)	ハダニ類・アオムシ	ピロール	○前		○前	○14	○前
サブリナフロアブル	コナガ・アオムシ	B T	○前	○前	○前	○前	○前
スミチオン乳剤	アブラムシ類・アザミウマ類	有機リン	○7	○3			
ダイアジノン粒剤5	ネキリムシ類・コガネムシ類	有機リン	○14	○植	○45	○21・播	○播
ダントツ水溶剤	アブラムシ類・ハモグリバエ	ネオニコチノイド	○3	○7	○3	○7	
トレボン乳剤	アオムシ・アブラムシ類	ピレスロイド	○7	○7		○21	
モスピラン顆粒水溶剤 (劇)	アブラムシ類	ネオニコチノイド	○前	○7	○21	○14	○前

(殺菌剤)

農 薬 名	病 害 名	系 統 (グループ名)	(未成熟) とうもろこし	じゃがいも	カ ブ	大 根	にん じん
アミスター20フロアブル	うどんこ病・さび病・黒斑病	QoI殺菌剤		○7・植	○7	○14	
カスミンボルドー	黒腐病・軟腐病	ペキシピラノシル抗生物質		○7		○14	○14
ジマンダイセン水和剤	べと病・黒斑病・疫病	ジオカーバメート		○7			○7
ダコニール1000	うどんこ病・べと病・白斑病	クロロニトリル		○7		○45	○7
トップジンM水和剤	うどんこ病・灰色かび病	MBC殺菌剤		○7			
ベンレート水和剤	菌核病・萎凋病	MBC殺菌剤	○播	○植			
ラリー水和剤	うどんこ病・すすかび病・さび病	DMI殺菌剤					
ロブラール水和剤	白斑病・灰色かび病	ジカルボキシイミド		○前			○14

- ・ (劇) は劇物指定農薬です。購入の際には印鑑が必要です。
- ・ 同一系統の薬剤を連用すると、その薬剤に抵抗性を持つ害虫や耐性を持つ病原菌の発生が懸念されます。系統の違う薬剤をローテーションして使用し、病害虫の抵抗性や耐性の発現を抑えましょう。

上記の使用方法は参考です。使用前に必ずラベルを一読し、基準を必ず守りましょう。

令和6年12月末現在 登録農薬

玉ねぎ	ねぎ	あずき	きゅうり	かぼちゃ	スイカ	メロン	トマト	ミニトマト	ナス	ピーマン	キャベツ	白菜	レタス	ホウレンソウ
○7	○7	○7	○前	○前	○前	○前	○前		○前	○前			○7	○7
	○7		○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○7	○3	○3
											○14	○21	○21	
○7	○21	○7		○3	○3	○3					○14	○21	○21	○21
			○定				○定		○定	○定	○定	○定		
○21		○14									○30	○30	○30	
	○7	○3	○前	○前	○前		○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○14
○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前
○21	○14	○21	○前	○14	○3	○前	○前		○前					○21
○30・定	○定	○60・播	○定	○21・定	○14・定	○14・播	○10・定	○前・定	○3・定	○10・定	○30・定	○定	○定	○播
	○3	○7	○前	○3	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○3	○前	○前	○前
	○21	○14	○前	○前	○3	○3	○前		○前	○前	○3	○7	○14	
○7	○7	○14	○前	○前	○3	○3	○前	○前	○前	○前	○7	○14	○前	○14

玉ねぎ	ねぎ	あずき	きゅうり	かぼちゃ	スイカ	メロン	トマト	ミニトマト	ナス	ピーマン	キャベツ	白菜	レタス	ホウレンソウ
○前	○3	○7	○前		○前	○前	○前		○前	○前	○7	○7	○7	
○14	○14	○30	○前		○前	○3	○前	○前		○前	○7		○7	
○3	○14	○30	○前	○21	○7	○7	○前				○30	○30		
○7	○14		○前	○7	○3	○3	○前	○前	○前	○前	○14	○7	○14	
○前	○7	○14	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○3	○7	○7 ^{※1}	
○前	○30	○14	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前 ^{※2}	○前	○7	○7	○14	○21
	○7		○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前	○前				
○7	○14	○21	○前		○前	○前	○前	○前	○前	○前	○7	○14	○14	

※1 灌水の場合45日前まで

※2 萎凋病の場合14日前まで

※使用時期の説明

○定	定植前又は定植時	○出	出芽前又は出芽時
○播	播種前又は播種時	○前	収穫前日まで
○植	植付前又は植付時	○数値	収穫前日数

農薬散布に気をつけましょう



農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散しないよう注意するとともに、地域一体となった取り組みが大切となります。

残留農薬基準のポジティブリスト制度とは・・・

一定量とは、「人の健康を損なうおそれのない量として厚生労働大臣が定める量」として、原則0.01ppmとなる。
(いわゆる一律基準)

◎ご相談はこちらまで 砺波農林振興センター TEL 32-8147
 なんと農協生産センター TEL 62-0261

農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場、作物へ農薬が飛散しないよう散布時には注意しましょう。

散布しようとする作物以外に農薬がかからないように細心の注意を

風のない時を選んで散布

農薬の飛散の最大要因は、風です。

風のない日や風の弱い時刻を選んで散布しましょう。

また、散布中でも風向きや風速は変化するので常に注意が必要です。

散布の位置と方向に注意

農薬は対象とする作物だけにかかるようにできるだけ作物の近くから散布しましょう。

また、圃場の内側に向かって散布するようにします。

高さのある作物などは、枝葉のない方向へ飛ばないように注意します。

スピードスプレーヤーでは、ノズルの配列を樹型に合わせて調整し、余分な放出を少なくします。

散布機の圧力と風量は適切に

圧力が高くなると細かい粒子が発生し、飛散しやすくなるので、圧力は低めに抑えます。

スピードスプレーヤーは、過大な風量は避け、樹体に到達する程度に調節します。

散布水量は適切に

散布水量が多くなるほど飛散する割合も増えます。葉面が濡れたらそれ以上散布しないなど、無駄な散布をしないようにします。

また、作物のないところではノズルを止めましょう。

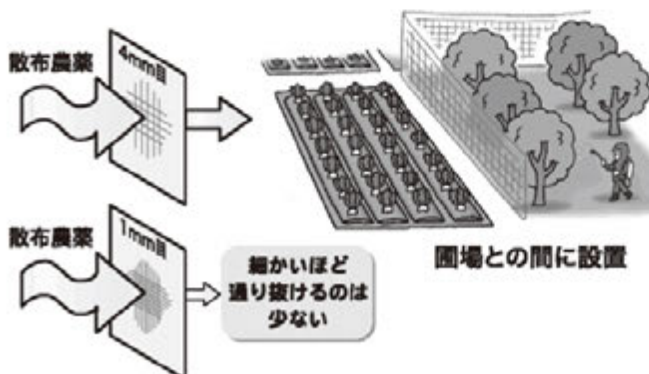
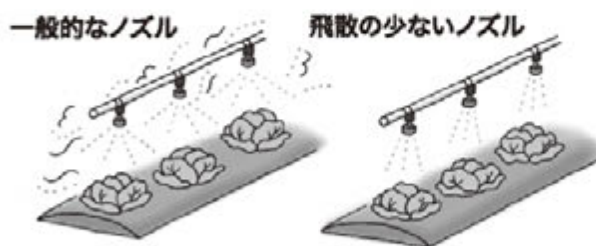
適切なノズルを選びましょう

一般的なノズルは粒子が小さい(0.1mm以下)ため、浮遊し飛散しやすくなっています。飛散の少ないノズルに切り替えることも効果的です。

しゃへい 遮蔽シート・ネットの設置も効果的

防風などで使用されているネットを圃場間に設置することも飛散防止に有効です。細かいあみ目の方がより効果が高くなります。

近接作物を直接シートで一時的に覆う対策もあります。



地域一体となった取り組みが大切です。

より飛散しにくい剤型を選びましょう

農薬の飛散は散布粒子が小さいほど起こりやすくなります。粒剤など、より飛散しにくい剤型に代えることで効果があります。

散布しようとする作物、周りの圃場の作物の状況を確認し、より多くの作物に使用できる農薬を選ぶなど、使用する農薬についても見直しましょう。

また、発生予察情報に基づき、散布回数を減らすことも検討しましょう。



決められた農薬の使用方法を守りましょう

使用前には農薬のラベルに書かれている適用内容を確認し、散布できる作物や使用量・濃度、使用時期そして成分ごとに定められている総使用回数を必ず守って使いましょう。

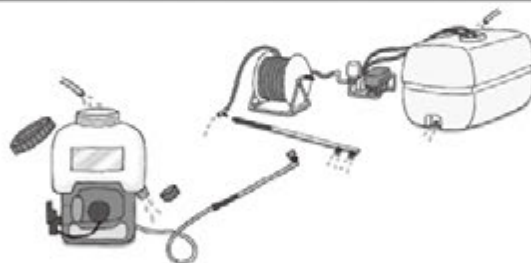
散布した後は、圃場ごとに使用した農薬や作業内容を必ず記録しておきましょう。



使用する散布器具に農薬が残っていないか確認しましょう

前回使用した農薬が散布器具に残っていたりすると、作物に薬害が生じたり、収穫物に農薬が残留してしまったりなど、思わぬ事態がおこります。

散布器具を使用した後は、タンクやホースなどに農薬が残らないようにしっかりと洗浄して、日ごろから管理を徹底しましょう。



自分だけの注意では防げない部分があります。地域一体となって対策を考えましょう

地域一体となって農薬飛散防止のための連絡体制を整え、次のような取り組みを実行しましょう。

● 散布農薬の見直し

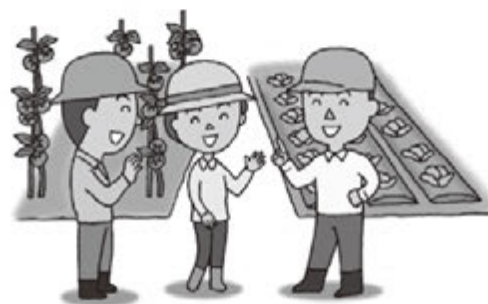
より多くの作物に適用があり、収穫日近くまで使えるような農薬を選定することで、飛散した場合のリスクを減らすことができます。

● お互いに連絡を取り合う

周りの圃場で収穫直前の作物がある場合は、散布日や収穫日を変更するなどの調整をしましょう。

● 作付けの工夫も

隣の圃場との間隔を広げたり、隣接する圃場では作付けする作物を替えるなどの工夫をしましょう。



農薬散布前に必ず確認しましょう

農薬飛散防止のために

チェック項目

立地条件・散布条件の確認！

- ☐ 周りは他の作物を栽培している圃場ですか？
- ☐ 近くに貯水池や川などの水系はありませんか？
- ☐ 風の強さはどうですか？

近接作物の確認！

- ☐ 隣接した圃場に収穫間近の他の作物はありませんか？
- ☐ 遮蔽シート・ネットなどは使っていますか？

散布器具の確認！

- ☐ 散布器具のノズルは飛散低減タイプですか？
- ☐ 散布圧力や風量は調節しましたか？

散布方法の確認！

- ☐ 調整した散布液は適切な量ですか？
- ☐ 作物のない方向に散布はしていませんか？
- ☐ 散布器具は作物に近づけて散布していますか？

対策

作物や収穫日を確認
散布方向や風向きに気をつける
風が強い時は散布をしない

散布日を変える等調整する
きちっと張られているか確認

作物に合わせて選ぶ
圧力を上げすぎず、風量は絞る

必要以上の散布は避ける
ノズルの方向に注意する
できるだけ作物に近づける

下記の項目の前にある
□にチェックを入れて
確認できます。



農薬適正使用のために！

チェック項目

- ☐ 散布する作物は農薬ラベルの適用作物に入っていますか？
- ☐ 農薬の定められた使用方法を守っていますか？
- ☐ 使用する予定の防除機・器具に不具合はありませんか？
- ☐ 水田での散布では圃場外に流出しないようにしましたか？
- ☐ 農薬に触れた手で収穫物を扱っていませんか？
- ☐ 散布記録を残しましたか？

対策

適用のない作物には使用しない
使用量・希釈倍数・使用時期・成分ごとの総使用回数は必ず守る
日ごとの管理を徹底し、使用後は洗浄をする
止め水をしっかりする
農薬を使ったあとは、手を洗う
圃場・作物ごとに、散布月日・農薬名・散布濃度・量を必ず記録する

農薬の飛散は、気象条件、立地条件、散布器具や農薬の種類など、多くの要因が考えられます。農薬散布に伴う飛散は、近接作物への農薬残留の他、周辺環境への影響などにもつながります。もし、飛散による何らかの事故が発生した場合は、自分自身が被害者にも加害者にもなってしまいます。

地域の生産者同士の連携、地域の指導者への相談など、こまめに行なうことが大切です。安全・安心な農産物を生産していくために、農薬の使用法を守るとともに、これまで以上に飛散防止対策に努めていきましょう。